敷地鉄橋遺跡

1987

石川県立埋蔵文化財センター

敷地鉄橋遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

調査区全景(北より)

調査区全景(東より)

例　言

1　本書は、昭和59年度に実施した大聖寺川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う加賀市敷地鉄橋遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は石川県土木部河川課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施し、費用は同課が負担した。

3　調査にあたっては、杉野洋一郎・市堀元一・石田和彦氏のご協力を得た。

4　本書中における註や参考文献は、それぞれ章末に掲げた。

5　本書中で指示した方位はすべて磁北であり、断面図の数値は絶対高である。

6　本書の執筆分担は、次のとおりである。

第１章 ……松　山　和　彦
第２章、第３章第１節第１項 ……戸　澗　幹　夫
第３章第１節第２項 ……田　嶋　明　人
第３章第２節 ……北　野　博　司
第３章第３節 ……木　立　雅　朗
第３章第４節 ……芝　田　　悟

7　本書の作成にかかる遺物整理作業は、石川県埋蔵文化財整理協会に依頼した。

8　編集は執筆者各員の協力によるものである。

本　文　目　次

第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　敷地鉄橋遺跡の位置と地理的環境 …… 1
　第２節　考古学的環境 …… 4

第２章　調査の契機と経過 …… 11

第３章　遺構と遺物 …… 12
　第１節　掘立柱建物と出土遺物 …… 12
　　第１項　掘立柱建物 …… 12
　　第２項　掘立柱建物出土遺物 …… 33
　第２節　土坑 …… 43
　第３節　溝 …… 59
　第４節　銭貨 …… 74

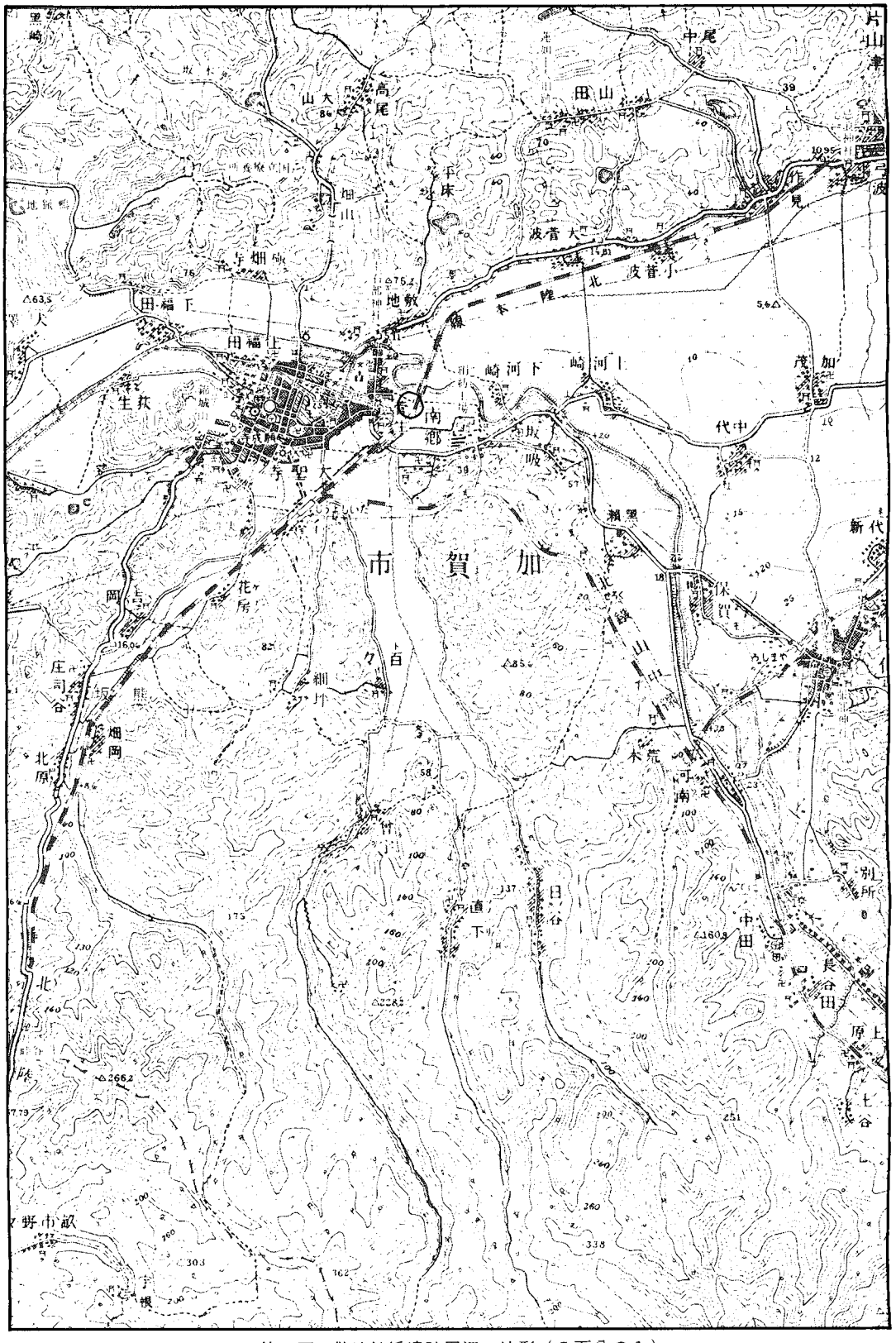
第1章　位置と環境

第1節　敷地鉄橋遺跡の位置と地理的環境

敷地鉄橋遺跡は加賀市南郷町地内に所在している。付近は同市大聖寺市街地の東端に接する標高5～7m水田地帯であり、北陸本線大聖寺駅からは北東に約1kmの距離を有する。大日山（標高 1,368m）に源を発した大聖寺川は、江沼郡山中町地内においては渓流状の眺めを呈するが、その下流の加賀市山代温泉の西方付近で一気に平野に注ぎ込む。そして幾度かの蛇行を繰り返したのちに大聖寺市街地を貫流していくわけであるが、その市街地の直前の北陸本線の渡河地点には1本の鉄橋が架っている。この鉄橋こそが本遺跡の名称の由来となった敷地鉄橋であり、かつては車窓から大きく蛇行して流れる大聖寺川を見ることができたが、調査に至る契機の部分の記述でも触れたように現在はもうその面影はなく、かわって新たに付け替えられたコンクリート護岸の直線的な流路が目に入るであろう。

さて、遺跡の周辺について巨視的にみていこう。周知のように県下の南西端に位置する加賀市及び山中町一帯はかつては加賀国江沼郡に属しており、その郡域は弘仁14（823）年の加賀国立国に際して越前国江沼郡13郷・4駅のうちの南半の8郷2駅をもって充てられて以来近世に至るまでほとんどかわりなかったといわれている。そしてその郡名である「江沼」は、かつての入江や沼地の広がる低湿な景観に由来するとされており、郡域の中央部には東西約8km・南北約4kmからなる往時の名残りともいえる潟埋積平野である江沼平地が存在する。この平地は北を橋立台地に、東を月津台地に、そして西と南を大日山系から続く前山帯である江沼丘陵によって画されていることから盆地と呼ぶにふさわしい地形を呈している。以上のように眺めてみた場合、本遺跡は盆地状をなす江沼平地の西に向かって開かれた門戸付近に立地することがわかる。北からは橋立台地の一画である敷地天神山が、南からは江沼丘陵から伸びる吸坂・南郷の低丘陵が迫る約1kmの間を北国街道・北陸本線という北陸道を東西に結ぶ陸上交通の新旧の幹線が走っていることからも、付近が古来より交通の要衝であったことが伺われる。また、ここで看過できないのは天然の内陸水路たる大聖寺川の役割であろう。本遺跡の下流約8kmで日本海へ注ぐわけであるが、江沼盆地の西端を占めるという位置的な環境は、同盆地周辺の物資の集散地としての機能との何らかの関連性を本遺跡に対して想起させるのではなかろうか。

次に本遺跡の北 500m余りの地に鎮座する加賀二ノ宮の菅生石部（すごういそべ）神社も本遺跡を考えるうえでは重要な存在といえる。毎年2月10日に行われる御願神事「竹割祭」によって広く知られるが、『日本三代実録』の元慶7（883）年12月28日の条が文献におけるその名の初見という古社で、延喜式内社であることはいうまでもない。中世には北野社領福田荘の荘鎮守とされ、神主職を世襲した地頭狩野（敷地）氏とも密接な関係があったとされる。本遺跡からは同社の神道的祭祀と直接的に結びつく資料は得られなかったが、わずか 500mという距離上の近接は同社が古代から中世にかけて終始本遺跡の歴史的背景を彩っていたであろうという推測を容易にする。



第１図　敷地鉄橋遺跡周辺の地形（５万分の１）

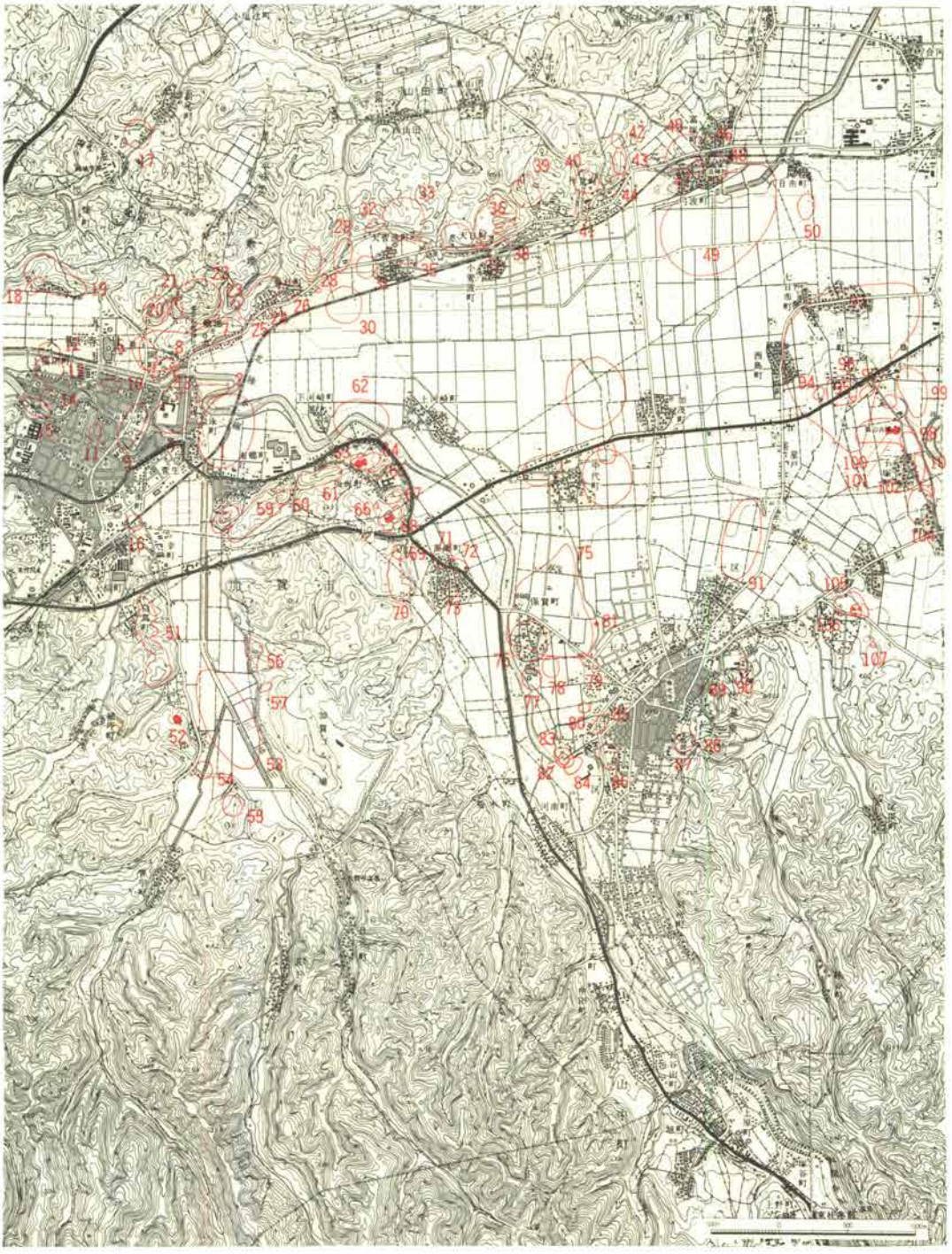
このように本遺跡の歴史的・地理的環境は、北陸道を東西に結ぶ陸上交通の幹線と江沼郡域をほぼ南北に貫く水運の幹線が交差する交通の要衝である点を緯(よこいと)にし、菅生石部神社の鳥居前に続く周辺地域であることを経(たていと)として織り上げられているといえる。いずれも「市場」の形成と深くかかわる問題であるが、近世以降は城下町大聖寺が整備されていく過程で敷地・南郷地域が伝統的に担っていた役割がそれに吸収されていくものと思われる。

第2節　考古学的環境

加賀市は、考古学の分野では中谷治宇二郎・三森定男、文献史学においても井上鋭夫・下出積與といった歴史学研究のすぐれた人材を輩出した地域である。とはいえ、本遺跡の周辺、すなわち大聖寺から江沼盆地にかけての地域において考古学的調査活動が開始されてくるのは、敗戦後間もなくの県立大聖寺高校考古学同好会の発足を契機とする。牧野隆信氏を顧問とし、1950年には黒瀬瓦窯跡・黒瀬御坊山古墳、51年には敷地古墳・敷地経塚というように地域に根ざした地道な活動が続けられてゆき、その成果は同高校発行の『郷土―30年のあゆみ』に集約されている。そして、1950年代中頃を中心とする時期には小地域史復原という視点からの調査研究も盛んになるようであり、それらは『柴山潟（自然と歴史)』、『やましろ』などにまとめられている。やがてこの地にも高度経済成長の波が及び、1970年前後からは北陸自動車道建設や周辺の丘陵開発、加えて圃場整備に伴う発掘調査が目立ってくる。しかしながら、比較的大規模な開発や地域整備を原因とする広い面積を対象とした発掘調査が本格化するのは、それより約10年を経た70年代末からである。まず広域営農団地農道整備事業に係り敷地天神山遺跡群が1979～82年に県立埋蔵文化財センターによって発掘調査されたのを皮切りに、原因を同じくする敷地町後方遺跡が81年に加賀市教育委員会によって調査が実施されることとなった。加えて大聖寺川河川激甚災害対策事業に伴っては1983年に永町ガマノマガリ遺跡・永町大聖寺高校遺跡が、そして84年には本遺跡が県埋文センターによって、また83年に藤ノ木遺跡が加賀市教委によって発掘調査されている。以上のような近年の大規模発掘は奇しくも敷地・永町地区付近に集中するところとなったが、それらがもたらした成果の一つの側面として、当該地域の歴史像、とりわけ古代～中世史の復原に資すべき多くの新知見が付け加えられた点は否めない事実であろう。

さて、次に本遺跡周辺に立地する諸遺跡の概要を年代を追ってみていくことにしたい。江沼盆地及びそれを囲繞する地域においていつの頃から人間集団の営みが開始されたのであろうか。この問題に対してのはっきりとした答えをまだ持ちあわせていないのが現状であるが、しかしながら橋立台地の一画、宮地町の通称ムカイヤマという場所からの大形の石刃の出土は、少なくともそれが旧石器時代にまで遡り得ると考えて間違いないことを示してくれる。続いて縄文時代の遺跡の分布についてみていくならば、江沼地域でもそれらは決して存在が希薄ではないことに気付くだろう。とはいえ発掘調査により実態が把握されている例は乏しく、本遺跡周辺では中期後葉を中心とする藤ノ木遺跡を数えるのみであるが、そこから出土したパンケースにして 600箱以上にのぼる土器・石器・三角壽形土製品・土偶などの膨大な量の遺物は特筆されよう。この時代の人々の足跡はまず敷地天神山遺跡群出土の早期とされる石槍によって伺うことができるが、藤ノ木遺跡・永町大聖寺高校遺跡・岡遺跡・坊山遺跡など中期末～後期初頭頃に至って遺跡数はにわかに増加するようである。このような歴史的事象の背景としては、殊に津波倉縄文遺跡を典型例とするような遺跡の平野部微高地への進出という立地上の視点もかかわってこようが、その点に関しては今後の課題といえよう。

やがて弥生時代を迎えて水稲栽培を基軸に裾えた農業が本格的に開始されてくるわけだが、江



第２図　周辺の遺跡（５万分の１）

第１表　周辺の遺跡（番号は第２図に対応する）

1	敷地鉄橋（古墳～中世）	46	富塚丸山古墳（古墳）
2	永町ガマノマガリ（縄文・弥生～中世）	47	忌浪神社遺跡（古墳）
3	大聖寺高校（縄文・弥生～中世）	48	弓波廃寺（奈良）
4	永町（縄文・弥生～中世）	49	弓波（弥生後期～平安）
5	藤ノ木（縄文・古墳～中世）	50	八日市（奈良・平安）
6	岡町（古墳～中世	51	細坪、三谷Ａ・Ｃ・Ｄ古墳群（古墳）
7	敷地天神山（弥生～中世）	52	百々古墳（古墳）
8	敷地後方（弥生・中世）	53	三谷川（奈良・平安）
9	耳聞山（古墳～平安）	54	百々（古墳）
10	麻畠（不詳）	55	三谷縄文（縄文）
11	鷹匠町（古墳）	56	三谷Ｈ・Ｇ古墳群（古墳）
12	福田Ｂ（奈良・平安）	57	三谷Ｆ古墳群（古墳）
13	福田Ｃ（縄文）	58	南郷八幡神社古墳（古墳）
14	上福田春日神社（平安）	59	南郷城跡（室町）
15	馬場町（奈良・平安）	60	南郷Ａ古墳群（古墳）
16	幸町（古墳）	61	南郷Ｂ～Ｄ古墳群（古墳）
17	高尾廃寺（平安）	62	下河崎（奈良・平安）
18	上木城跡（不詳）	63	片山古墳（古墳）
19	畑古墳群（古墳）	64	吸坂Ａ・Ｂ古墳群（古墳）
20	坊山遺跡（縄文）	65	吸坂神明神社古墳群（古墳）
21	坊山長者屋敷（不詳）	66	吸坂焼窯跡（江戸）
22	金吾ケ城（室町）	67	吸坂Ｃ古墳群（古墳）
23	敷地Ｂ古墳群（古墳）	68	吸坂Ｄ古墳群（古墳）
24	敷地Ｃ古墳（古墳）	69	黒瀬瓦窯跡（奈良）
25	敷地団地（縄文・古墳）	70	黒瀬御坊山古墳群（古墳）
26	敷地春日山古墳群（古墳）	71	黒瀬掃部邸跡（室町）
27	平野山古墳群（古墳）	72	黒瀬（不詳）
28	敷地経塚（不詳）	73	黒瀬覚道館跡（室町）
29	大菅波Ａ（奈良・平安）	74	新黒瀬（古墳）
30	大菅波Ｄ（古墳～平安）大菅波Ｂ（古墳）	75	保賀Ｃ（奈良・平安）
31	大菅波Ｂ（古墳）	76	保賀廃寺（奈良）
32	大菅波古墳群（古墳）	77	保賀（縄文）
33	西の御城（不明）	78	保賀Ａ（不詳）
34	小菅波Ｄ古墳群（古墳）	79	山代五輪塔出土地（中世）
35	大菅波Ｃ（奈良・平安）	80	保賀Ｂ（奈良）
36	小菅波（古墳）	81	中代古墳（古墳）
37	小菅波Ｃ古墳群（古墳）	82	山代大堰宮古墳群（古墳後期）
38	小菅波Ｂ古墳群（古墳）	83	山代大堰宮（縄文・古墳・奈良・平安）
39	作見陣跡（室町）	84	山代廃寺（不詳）
40	作見砦跡（室町）	85	山代ドンド（縄文中期・古墳・奈良・平安）
41	作見Ｂ（古墳）	86	山代観光センター（縄文）
42	作見焼窯跡（中世～江戸）	87	薬王院裏（奈良・平安）
43	作見Ｃ（古墳）	88	薬王院五輪塔（鎌倉・室町）
44	作見Ａ（古墳）	89	山代温泉古墳（古墳）
45	富塚（奈良・平安）	90	吉田屋窯（江戸末）

91　山代新（奈良・平安）
92　上野（奈良・平安）
93　庄・西島（奈良・平安）
94　西島建造物群
95　西島古銭出土地（奈良）
96　津波倉廃寺（奈良）
97　桑原（古墳）
98　津波倉縄文（縄文中期）
99　二子塚（古墳）
100　孤山古墳（古墳）
101　二子塚古墳群（古墳）
102　二子塚東田（弥生中期・古墳前期・平安）
103　二子塚東田（古墳後期）
104　二子塚クマノミヤ（古墳後期）
105　上野高岡山陣跡（安土・桃山）
106　上野古墳群（古墳）
107　ヨシコ窯跡（不明）

や沼などの低湿地に富み、しかも現在も南加賀の穀倉地帯である江沼平野一帯の地が、そのような初期の水田耕作からすでに良好な可耕地を提供していたであろうことは想像に難くない。加賀市東部の柴山潟周辺では柴山出村遺跡や猫橋遺跡がこの時代の標式遺跡として知られており、必ずしも様相のはっきりしなかった同市の西部でも近年の発掘調査事例によって少しずつその姿が解明されようとしている。永町ガマノマガリ及び永町大聖寺高校の両遺跡ではこれまでの時期的空間を埋めるような形で小松式土器及び同期の遺構が確認され、また後期についても敷地町後方遺跡でややまとまった資料の出土をみている。いずれにせよ該期の遺跡はまだまだ地中に埋れているものと思われる。

すでに弥生時代の農耕社会が本質的に内在させていた社会的矛盾は、その跛行的発展の結果さらに拡大されることとなり、到達すべき一つの段階、すなわち階級社会が出現する。その社会の標徴ともいうべき古墳は江沼盆地を見下す尾根々々にもかなり濃密に構築されている。加賀市内では孤山古墳や法皇山横穴群などこの時代の所産として古くから知られていたが、旧江沼郡域を中心とする地域の古墳分布の実態及び群構成のあり方及びその年代的変遷の概要が明確に把握されるようになったのは、石川考古学研究会による分布調査が契機であり、その成果は「江沼古墳群分布調査報告」（『石川考古学研究会々誌第21号』1978年）としてまとめられている。この時点で当該地域に分布する古墳の数は 400基に近いとされているが、本遺跡の周辺では北に橋立台地の南辺に沿って敷地から小菅波にかけて約40基、南に江沼丘陵から伸びる低丘陵の先端を廻るようにして南郷・吸坂・黒瀬にかけて約70基からなる古墳群が大聖寺川を挟んで対峙するように立地している。このうち前者の敷地地域には十数基程が分布するとされ、そのうちの中核的存在といわれる敷地Ａ群からは埴輪及び須恵器が、敷地春日町１号墳（敷地古墳）からは土師器埦及蠟石製管玉が採集されている。また南郷古墳群とも総称される後者においてまず特筆されるべきものとしては、吸坂Ａ３号墳（前方後方墳、主軸長61ｍ）及び吸坂Ｄ13号墳（前方後円墳、主軸長68ｍ）があり、加賀地方で最大クラスである両者は南郷地域の他の古墳がせいぜい20ｍクラスにしか及ばないことを考えるとまさに突出的といえよう。また同古墳群は後期になると東南の黒瀬御坊山を中心とした地区に分布の中心を移すようである。なお、本遺跡の東方約10kmの二子塚の地には江沼地域の盟主墳ともいうべき著名な孤山古墳があり、この周辺の考古学的環境を語る場合には看過し得ない存在といえよう。ところで、古墳時代の集落はどうであろうか。敷地天神山

遺跡群からは昭和56年度（第一次）調査を中心に６世紀頃の遺物がまとまって出土し、竪穴住居跡・掘立柱建物・土壙等も確認され、そのなかには２間×２間の倉庫様の建物も含まれるという。加えて本遺跡と隣接する永町ガマノマガリ遺跡からは６～７世紀を主体とした60数棟の掘立柱建物が検出されており、江沼盆地西部の中核をなすと思われる大規模集落の存在を予想させる。

以上のように６～７世紀頃になると本遺跡周辺では地域の歴史像を想定するに足る発掘調査事例がようやく増加してくるようであるが、次に本遺跡の年代的な中心をなす奈良時代をはじめとする律令制の時代の様相についてみていきたい。本遺跡からは30数棟にも及ぶ奈良時代を中心とする掘立柱建物が整然とした配置のもとに検出され、皇朝十二銭を用いた祭祀的行為も含めて一般の集落とは異った官衙的色彩が強い点がすでに指摘されているわけであるが、本遺跡周辺では奈良～平安時代の遺跡の実態は必ずしも明瞭ではない。とはいえ、ここで視点をややかえて江沼地域全体の古代史像に関してその特徴を抽出してみると、まず県内有数の密度で白鳳寺院が造営された点があげられてこよう。江沼盆地の周辺では保賀・弓波・津波倉・宮地の４廃寺が知られる。このうち保賀廃寺と黒瀬瓦窯との間に供給関係が認められたという。やはり白鳳寺院の問題で興味深いのは、江沼地域の古墳分布のあり方との関連であろう。石川考古学研究会の分布調査でも指摘されているように、江沼地域では小地域に根ざした集団による累代の造墓活動によって古墳群が形成されるという傾向性が看取されるが、続く段階ではそういった伝統的な地域集団と造寺活動とのかかわりはどのようなものであったのか。郡領層の問題などとともに今後の重要な検討課題といえそうである。なお、律令時代の江沼郡衙の推定地としては本遺跡の東方約9.5kmの西島遺跡をあてる考え方が有力視されているが、その周辺からも江戸時代から昭和にかけて 100枚近くに及ぶであろうといわれる和同開珎の出土が伝えられており、官衙的色彩と多量の銭貨（皇朝十二銭）の組み合わせは本遺跡との何らかの類似性を想定せざるを得ない。本遺跡の周辺で調査された遺跡で奈良～平安時代の遺物を出土した例としては敷地天神山遺跡が知られ、また北方約4.5kmの地には平安時代中期とされる高尾廃寺があり緑釉陶器も出土している。ところで諸遺跡の立地とも深いかかわりのある交通路、すなわち古代の官道北陸道がどこを経由して越前へと続いていたかということについては、『延喜式』の兵部省の部分からは能美都安宅駅から江沼郡内の潮津・朝倉の２駅を経て越前国の三尾駅へと抜けていた様子が伺われる。このうち潮津駅は現在の加賀市潮津町付近に比定して間違いないであろうし、朝倉駅については加賀市橘町付近にあてられているようであるが、その位置は今一つはっきりしないようである。そしてこの両者を結ぶルートが橋立台地の海岸寄りを進むものか、或いは同台地の南辺に沿う後世の北国街道にほぼ等しいものであったかどうかは本遺跡を考えるうえでも重要なテーマであろうが、現時点では判断材料に乏しい。

中世になると文献史料の量がにわかに増え、江沼地域においても福田庄、富墓庄、山代庄、熊坂庄、額田庄、奈多庄、横北郷などがその名を見せるようになり、最近では京都高山寺文書にみえる同寺領加賀国右庄の庄園政所跡とされる三木だいもん遺跡の発掘調査について報じられている。これらの庄園群のうちでここで注目せねばならないのは北野宮寺領の福田庄・富墓庄・山代庄本郷であろう。とりわけ福田庄はその位置からいって本遺跡と密接な関連性を有し、文献的に

は弘安10（1287）年10月の熊坂庄領家方をめぐる相論に対する関東下知状が初見であるが、その内容から推して建久6（1195）年までには成立していたようである。承久の乱（1221年）の後に東国御家人である伊豆国の狩野氏の一族が新補地頭として地頭職を獲得したと考えられ、それは先の下知状において寛元元（1243）年に幕府によって福田庄の菅生社の神主職を確認された人物として地頭狩野五郎左衛門尉忠広の名がみえることからも首肯されよう。その後も狩野氏は中世後期に至るまで福田庄を中心にその一党が勢力を伸ばすようであり、南北朝の内乱においては越前の新田義貞に加勢して加賀南部から越前北部にかけて転戦した者として『太平記』の記述は「加賀国ノ住人、敷地伊豆守・山岸新左衛門・上木平九郎以下ノ者共」、すなわち狩野一党をあげている。室町時代には将軍直参の奉公衆に列せられ、将軍義尚による六角氏討伐に際しては狩野松寿が近江へ出陣している。以上のように本遺跡周辺の中世史像を考えるうえで福田庄地頭狩野氏は欠かせぬ存在といよるが、さて一方、考古学上の知見も1970年代末以降まとまって蓄積されてきている。菅生石部神社の後背に所在する敷地天神山遺跡群には砦跡を想定させる土塁及び堀状遺構、僧房域或いは屋敷地と考えられる台状遺構（平担面）群があり、発掘調査によっても中世の掘立柱建物群、柵列、溝、地下式横穴状遺構等が確認されている。なお、同遺跡群のこれらの諸遺構は15世紀初頭の応永年間の菅生石部神社の社地域を記した史料にみえる「西限承仕畠」「東限僧房地」に対応するものであろう。またこれと近接する敷地町後方遺跡からも該期の掘立柱建物群・柵跡・石組井戸等が確認されている。本遺跡に隣接する一帯においては永町ガマノマガリ遺跡において幅約6ｍ、深さ 1.5ｍのクランク状に走る堀やその他の溝によって画された地区から掘立柱建物跡9棟及び井戸2基以上が確認され、その景観はあたかも中世の在地領主の居館跡を想起させる。加えて永町大聖寺高校からもやはり該期の掘立柱建物群が検出されているようである。

最後に城郭について若干付えたい。加賀国南端に位置してしかも越前方面へ抜ける交通の要衝である大聖寺周辺は、軍事上の重要性の高い地域である。殊に江沼盆地の西端の門戸なす本遺跡付近は、北の敷地天神山及び南の南郷の丘陵を天然の堡塁に、その間をほぼ南北に流れる大聖寺川を天然の堀に見立たて場合、まさに越前側より進攻してくる軍勢をくい止める恰好の防衛線となっている様子がわかる。そのため中世末期を中心に幾度かの激しい戦闘の舞台となっている。弘治元（1555）年には朝倉宗滴に率られた越前の兵が敷地天神山後方の金吾ヶ城に布陣し、一向一揆方の津葉（大聖寺城か）・南郷・千足の諸城を攻め落とし、それに対して反撃に出た一揆方が約 700人を討ち取られるという惨敗を喫している。天正年間に入り朝倉氏滅亡後は南加賀地方も柴田勝家を総大将とする織田軍の直接的脅威にさらされるところとなり、敷地付近等において抵抗線がくりひろげられた。

その後近世には城下町として大聖寺が本格的に整備されるようになり、本遺跡周辺はその東に続く田園地帯として今日に至っている。

本稿を記すにあたって越坂一也氏より多くの教示を得た。感謝申し上げる次第である

〔参考文献〕

橋本澄夫　『石川県考古学便覧Ⅰ』　1970
浅香年木他　『加賀市史　通史上巻』　1978
角川書店　『角川日本地名大辞典17　石川県』　1981
加賀市教育委員会　『敷地町後方遺跡発掘調査報告』　1982
加賀市教育委員会　『藤ノ木　遺跡』　1986
石川県立埋蔵文化財センター　　敷地天神山遺跡群　1983
石川県立埋蔵文化財センター　『永町ガマノマガリ遺跡』　1984

第２章　調査の契機と経過

低平な江沼平野の西辺を貫流する大聖寺川は、大聖寺市街地の手前で大きく蛇行し、市街地で三谷川や熊坂川と合流する。このため大聖寺市街地は、梅雨時や春の雪解け期にはたびたび水害にみまわれた。近世において、大聖寺藩は延宝元年に法華坊から福田橋にかけて河道を真直ぐに掘り直したが、大洪水はやまず、大聖寺の人々は水害に悩まされ続けてきたのである。

昭和56年７月２日夜半から３日早朝にかけて加賀地方に豪雨が襲い、市街地を中心に床上浸水などの多大な被害をもたらした。これにより、建設省より河川激甚災害対策特別緊急事業の採択を受け、昭和56年度から昭和60年度までの５ヵ年計画で大聖寺川の改修事業が始まった。これに伴い、昭和58年１月17日に県大聖寺土木事務所より県立埋蔵文化財センターに対し分布調査の依頼があり、分布調査の結果、岡町地内の藤ノ木遺跡と永町地内のガマノマガリ遺跡が確認され、激甚災害対策に伴なう発掘調査の先駆けとなった。

翌年１月10日、県大聖寺土木事務所より南郷地内の分布調査の依頼があり、同年１月19日分布調査を実施した。調査の結果、工事区域内に周知の敷地鉄橋遺跡の広がりを確認し、同年５月14日より発掘調査が開始された。調査対象区は南郷町と隣接する大聖寺菅生町、同永町に及ぶもので、その面積は約 6,000㎡であった。

発掘日誌抄

５月14日　作業小屋の設営。
５月15日　大聖寺土木担当者と作業工程の打ち合わせを行い、橋脚部および作業用排水路の部分から調査を開始することとなった。作業機材搬入。
５月17日　橋脚部および排水路部分の発掘調査を開始。
５月22日　橋脚部および排水路部分の実測作業と伴に河道域の耕土除去作業を開始する。
５月28日　５ｍ方眼の杭打ち作業と包含層の掘り下げ作業に入る。
７月18日　調査区南側より遺構の検出および掘り下げ作業に入る。
７月24日　総柱建物跡の第１号・第２号建物跡が検出される。
８月23日　多数の掘立柱建物跡と伴に銅銭が発見され、一般集落跡とは違った様相を窺わせた。
10月17日　航空測量の準備作業に入る。
10月23日　航空測量を実施。
10月24日　遺構の実測作業の補足を行う。
11月９日　作業機材を撤収し、現地作業を終える。

第3章　遺構と遺物

第1節　掘立柱建物跡と出土遺物

第1項　掘立柱建物跡

1　第1号建物跡（第5図）

第1号建物跡は、調査区南側にあり、地形が北から南、東から西へと傾斜しようとする三谷川の自然堤防にあたる台地の縁辺部に占地している。桁行5間（12.7m）×梁行4間（9.7m）で、総面積124.19㎡である。桁行の柱間寸法は、南から2.60＋2.60＋2.60＋2.60＋2.30mでほぼ2.60m等間であるが、南第5と第6柱穴間は2.30と若干狭くなっており、北側柱列が廂となることも考えられる。梁行は、南側柱列でみると西から2.45＋2.40＋2.45＋2.40mを測るが、北側柱列では、東第3と第4柱穴間が2mと狭くなっている。柱穴の掘方は、径が50～60cmの略円形を呈するものが多く、深さは30～40cmである。柱痕跡は、25cm前後である。主軸はN－11°－Wを示す。

北側では、方2間分の土間とみられる空間があり、中央部には柱穴が認められない。北側柱列東第3と第4柱穴間が狭くなっている点とも関連するとみられ、入口から土間への空間であろう。本建物跡は、東側において第2号建物跡と重複し、西側ではL字形に屈曲する第1号溝によって切られている。また、南には本建物跡に付随する井戸と想われる第1号土壙が存在する。掘方より出土した若干の土師質土器より、本棟は平安末期の12世紀後半から13世記初頭に比定されるとみられ、後述する第2号建物跡の建て替えとみられる。

2　第2号建物跡（第6図）

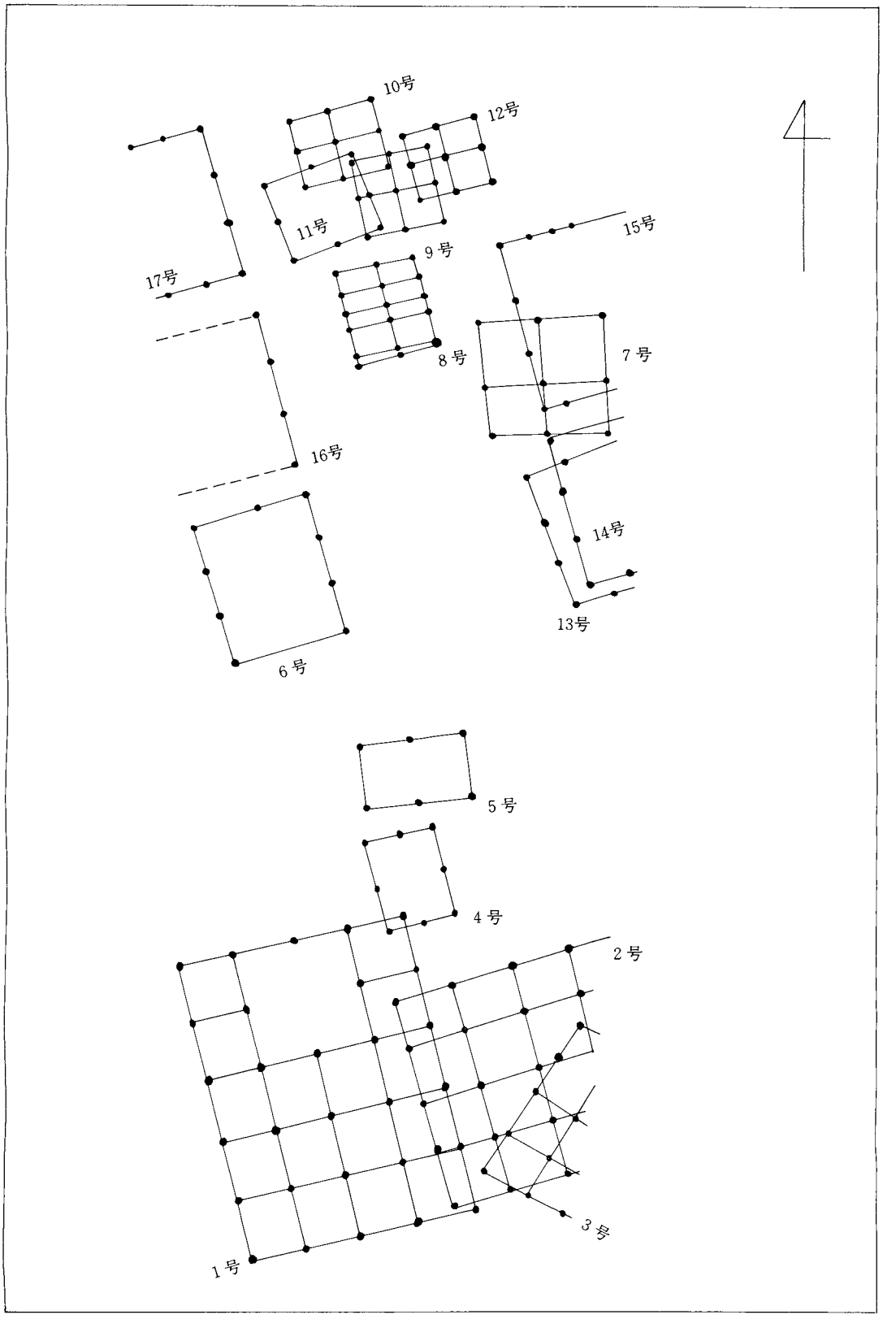
第1号建物跡の東に重複する建物跡であるが、東側が調査区外であることから全体像は不明である。西側柱列は4間（9.1m）で、北側柱列では3間分が検出できた。西側柱列の柱間寸法は、北から2.10＋2.40＋2.50＋2.10を測り、北側柱列のそれは東から2.75＋2.55＋2.55を測る。本建物跡は、屋内の柱筋交点には柱穴が認められるので、第1号建物跡と同様の総柱の建物跡になるとみられる。そうした場合、3間以上の桁行となるとみられる。柱穴は長径が30～40cm大の略円形を呈し、深さは20～40cmである。柱痕跡は25cm前後である。主軸はN－16°－Wである。本建物跡の北には、井戸とみられる第2号土壙が隣接する。第1号建物跡に先行する12世紀後半の建物跡とみられる。

3　第3号建物跡（第7図）

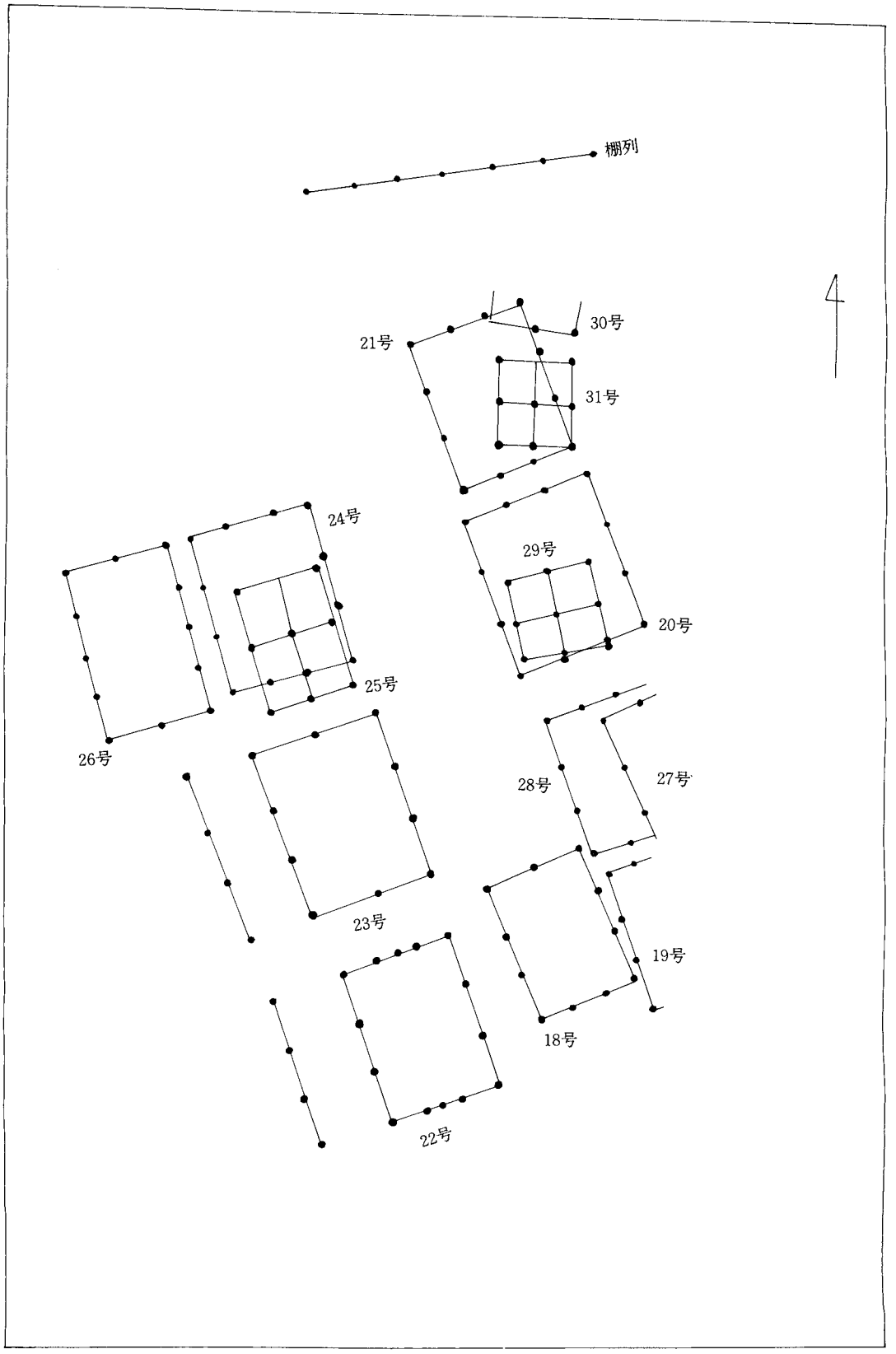
第2号建物跡に重複する。南北柱列4間、東西柱列2間分を検出したのみで、全体規模は不明である。屋内の柱筋交点にも柱穴が認められ、総柱の建物跡になるとみられる。南北柱列の柱間寸法は、南から1.85＋2.20＋1.65＋1.65mで、東・西柱列は1.75m等間である。柱穴は30cm前後の小型を主とする主軸はN－29°－Eで、第1・2建物跡とは大きく異っている。

4　第4号建物跡（第8図）

第2号建物跡の北約2.5mにある。桁行2間（4m）×梁行2間（3m）の南北棟の建物跡で、



第３図　南側建物跡群配置模式図



第 4 図　北側建物群配置模式図

床面積12㎡を測る。桁行の柱間寸法は２ｍ等間で、梁行は 1.5ｍ等間である。柱穴は径40㎝前後の略円形を呈し、深さ20～40㎝を測る。主軸はＮ－16°－Ｗを示し、第２号建物跡に近い。

5　第５号建物跡（第９図）

第４号建物跡の北にある。桁行２間（４.６ｍ）×梁行１間（2.70ｍ）の東西棟の建物跡で床面積12.42㎡を測る。桁行の柱間寸法は 2.3ｍ等間である。柱穴の掘方は、径30㎝前後の略円形を呈し深さ15～20㎝を測る。主軸はＮ－４°－Ｗを示し、第１号建物跡に近い。

6　第６号建物跡（第10図）

先述の第１号建物跡を中心とする中世Ⅰ期建物跡群の北約10ｍの西側縁辺部にある建物跡である。桁行３間（6.15ｍ）×梁行２間（５ｍ）の南北棟建物で、床面積は 30.75㎡を測る。柱間寸法は、桁行は2.05ｍ等間で梁行は 2.5ｍ等間である。西側柱列は中世の第１号溝によって削平されており、南側柱列第２柱穴も中世の土壙によって切られている。柱穴は、残りの良好な東側柱列でみると、径約60～70㎝の略円形をなし、深さは30～40㎝である。しかし、梁行の北側柱列第２柱穴は、約25㎝の小円形を呈し、深さも約12㎝の浅いものとなっている。主軸はＮ－ 13°－Ｗで北に並置されている第16、17号建物跡と同じである。

7　第７号建物跡（第11図）

第６号建物跡の北東約８ｍにある。桁行２間（５.２ｍ）×梁行２間（５ｍ）の総柱の倉庫様建物跡である。桁行の柱間寸法は、東から2.7ｍ＋2.5ｍ、梁行は2.75＋2.25ｍである。柱穴は30～40㎝前後で、深さは20～50㎝と一様でない。床面積は26㎡を測り、主軸はＮ－１°－Ｅである。

8　第８号建物跡

第６号建物跡をはじめとする西側縁辺部の建物跡群の東約３ｍに接する桁行２間（３.５ｍ）×梁行２間（３ｍ）の総柱の倉庫様建物跡である。桁行の柱間寸法は1.75ｍ等間で梁行は 1.5ｍ等間である。床面積は10.5㎡を測り、主軸はＮ－12°－Ｗである。第９号建物跡と重複する。

9　第９号建物跡

第８号建物跡に重複する桁行２間（４ｍ）×梁行２間（3.50ｍ）の総柱の倉庫様建物である。柱穴は長軸が50㎝前後の不整円形で、深さは50～30㎝である。床面積は14㎡を測り、主軸はＮ－８°－Ｗである。

10　第10号建物跡（第12図）

第８、９号建物跡の北約５ｍ、第17号建物跡の東約 2.5ｍにある。桁行２間（3.70ｍ）×梁行２間（2.90ｍ）の総柱の倉庫様建物である。桁行の柱間は西から1.80＋1.90ｍ、梁行は北から1.40＋1.50ｍで、床面積は 10.73㎡を測る。柱穴は、40～60㎝の不整円形で、深さは20～30㎝が一般的であるが、中央の束柱は径65㎝の円形を呈する大型のものとなっている。主軸はＮ－11°－Ｗで、東にある第12号建物とほぼ近い軸をもち、西側にある第17号建物とは直交に近い方位を示す。

11　第11号建物跡（第13図）

第10号建物跡の南西部に重複する。桁行２間（4.10ｍ）×梁行２間（４.０ｍ）の東西棟の建物跡である。床面積は16.4㎡を測る。柱間寸法は、桁行が2.05ｍ等間を示し梁行は北から2.20＋

1.80mを測る。柱穴は35～50cmの略円形で、深さは30cm前後のものが多い。主軸は N－13°－W を測る。

12　第12号建物跡（第14図）

第10号建物跡の東に接する。桁行２間（3.20m）×梁行２間（2.90m）の総柱の倉庫様建物である。床面積は9.28m²を測る。柱間寸法は、桁行が1.60m等間をなし、梁行は1.45m等間であった。柱穴は25～60cmと不均等であり、深さは40cm前後のものが多い。主軸は N－11°－W を示し、第10号建物跡に近い。

13　第13号建物跡（第15図）

調査区の東、第７号建物跡の南に位置する。全体規模は不明であるが、西側柱列３間(5.90m)と南・北側柱列１間分（柱間1.70m）を検出している。主軸は N－19°－W を示す。柱穴は40～60cm前後の不整形な円形を呈する。

14　第14号建物跡（第16図）

第13号建物跡に重複する建物跡で、第６号建物跡の東約10mに対峙する。西側柱列３間（6.50m）と南側柱列１間分(柱間1.70m)を検出したのみで、全体規模は不明である。主軸は N－13°－Wを示し、西側縁辺部にある第６号建物跡群などと平行になる。西側柱列の柱間は、比から2.10＋2.20＋2.20であり、柱穴は80～90cmの大形の掘方を有するものであった。

15　第15号建物跡（第17図）

第14号建物跡の北に並置する。西側柱列３間（7.10m）、北側柱列３間分、南例柱列１間分を検出したのみで、全体規模は不明。西側柱列の柱間は、北から2.30＋2.40＋2.40mで、北側柱列は1.80～ 2.0mで均等でない。柱穴は、西・北側柱列ともに90cm前後の大型の掘方であるが、南側柱列は50cm前後のものとなっている。主軸はN－16°－Wを示す。

16　第16号建物跡

第６号建物跡の北に並置する。全体規模は不明だが、第６号建物跡および第17号建物跡の中間にあって、それらの東側柱列と主軸を同じくする３間分（6.30m）の柱列を確認したいこれと直交する柱列は、第１号溝の存在などにより確認できなかったが、第６・第15・第17建物跡などと同質の建物跡とみられることから、桁行３間の建物跡と考えた。柱間は2.10m等間をなし、柱穴の掘方は90～ 110cmの不整形な方形を呈し、深さ約40cmを測る。

17　第17号建物跡（第18図）

第16号建物跡の北に並置する。主軸は第６・第16号に等しい。桁行３間（6.40m）、梁行２間分を検出した。桁行の柱間は、北から2.10＋2.10＋2.20mで、梁行は1.70m等間である。柱穴は深さ約40～50cmで、掘方が90～ 100cm前後の不整形な方形を呈する。梁行とみられる柱列には、50cm前後の掘方もみられた。この建物跡も、第１号溝の存在によって全体規模は明確にできないが、第６号建物跡などと同様の３間×２間となる可能性が高く、その場合の床面積は、21.76m²となる。主軸はN－13°－Wを示す。

18　第18号建物跡（第19図）

調査区の北側にある建物群の東に位置する。桁行３間(6.0m)で、北側柱列の梁行が２間(4.30

m）に対し南側のそれは３間となるものである。柱間寸法は、桁行が２ｍ等間を示し、北側柱列の梁は2.15ｍ等間であるのに対し、南側柱列は東から1.50＋1.50＋1.30となっている。柱穴は50㎝前後の不整形な円形を呈する。床面積は25.8㎡を測り、主軸はＮ－19°－Ｗを示す。

19　第19号建物跡（第20図）

第18号建物跡の東にある。西側柱列３間(6.0ｍ)、北側柱列１間分を検出したが全体規模は不明である。西側柱列の柱間は２ｍ等間で、北側柱列は2.50ｍを測る。主軸はＮ－16°－Ｗを示す。

20　第20号建物跡（第21図）

北側にある建物跡群の東にあるうちの１棟。桁行３間（7.20ｍ）×梁行３間（5.60ｍ）の南北棟の建物跡である。柱間は桁行が2.40ｍ等間をなし、梁行は 2.0＋1.80＋1.80ｍである。柱穴は概して70㎝前後の略円形を呈し、深さ30～40㎝のものが多いが、南側柱列は掘方が50㎝前後とやや小型である。柱痕跡は25㎝前後のものである。床面積は40.32㎡を測り、主軸はＮ－16°－Ｗを示す。

21　第21号建物跡（第22図）

第20号建物跡の北に並置する。桁行３間（6.60ｍ）×梁行３間（ 5.0ｍ）の南北棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行が2.20ｍ等間を示し、梁行は1.60＋1.60＋1.80ｍである。柱穴は50～70㎝の不整形な円形を呈し、深さ30㎝前後である。床面積は33㎡を測り、主軸は Ｎ－17°－Ｗを示し、第20号建物跡に近似する。

22　第22号建物跡（第23図）

北側建物跡群の中央南側に位置する。３間（6.80ｍ）×２間（4.80ｍ）の南北棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行が2.20＋2.20＋2.40ｍで、梁行は2.40ｍ等間である。ただし、北・南側柱列の第２柱穴の両側には、同形もしくはやや小型の柱穴を配している。建物の西3.05ｍには柱筋に平行する柵列が存在する。柱穴の掘方は、60～ 100㎝の略円形を呈し、深さは約30㎝である。床面積は 32.64㎡で、主軸はＮ－17°－Ｗを測る。この建物跡のほぼ中央には和同開珎、万年通宝などの銅銭が埋納されていた。西側には井戸跡とみられる第19号土壙がある。奈良時代後半の建物跡である。

23　第23号建物跡（第24図）

第22号建物跡の北に並置する。３間（7.40ｍ）×２間（5.40ｍ）の南北棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行が北から2.50＋2.40＋2.50ｍで梁行が2.50＋2.90ｍである。建物の西約３ｍには柱筋に平行する柵列が存在する。柱穴掘方は１ｍ前後の略円形もしくは隅丸方形であるが、南・北柱列の第２柱穴は50㎝前後と小さい。床面積は、39.96㎡で、主軸はＮ－17°－Ｗで第22号建物跡と同じである。

24　第24号建物跡（第25図）

第23号建物跡の北に並置する。桁行３間（6.60ｍ）×梁行３間（5.10ｍ）の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行が2.20ｍ等間であるが、梁行は2.0＋1.50＋1.60ｍである。柱穴掘方は80～100㎝前後の不整形な方形を呈し、深さ40㎝前後のものが多い。床面積は 33.66㎡を測り、主軸はＮ－10°－Ｗを示す。

25　第25号建物跡

第24号建物跡の東側に重複する２間（ 5.0m）×２間（3.50m）の総柱の倉庫様建物である。柱間寸法は、桁行が2.50m等間で、梁行は東より1.50＋ 2.0mである。柱穴は径が30cm前後の略円形を呈し、深さ30cm前後である。床面積は17.5m²を測り、主軸はN－18°－Wを示す。

26　第26号建物跡（第26図）

第24号建物跡の西に並置する。桁行４間（7.30m）×梁行２間（4.40m）の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行は 2.0＋1.70＋1.70＋1.90mで、梁行は2.20m等間である。柱穴掘方は、一辺が40cm前後の不整形な方形が多い。床面積は32.56m²を測り、主軸はN－10°－Wを示す。

27　第27号建物跡

第28号に重複する。全体規模は不明で、西側柱列２間分と北側柱列２間分を検出したのみである。柱間寸法はほぼ２m等間で、柱穴は一辺が50cm前後の不整形な方形を呈す。主軸はN－23°－Wを示す。

28　第28号建物跡（第27図）

第23号建物跡の東約５mにある桁行３間（6.0m）×２間（3.20m）の南北棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行が２m等間で梁行は1.60m等間である。柱穴は、40～60cmの不整形な方形ないし略円形を呈し、深さ35cm前後である。床面積は19.2m²を測り、主軸はN－17°－Wを示す。

29　第29号建物跡（第28図）

第20号建物跡に重複する２間（3.70m）×２間（2.90m）の総柱の倉庫様建物である。柱間寸法は、桁行が1.85等間で、梁行は1.35＋1.55mである。柱穴は40cm前後の略円形を呈す。床面積は10.73m²を測り、主軸はN－５°－Eである。

30　第30号建物跡

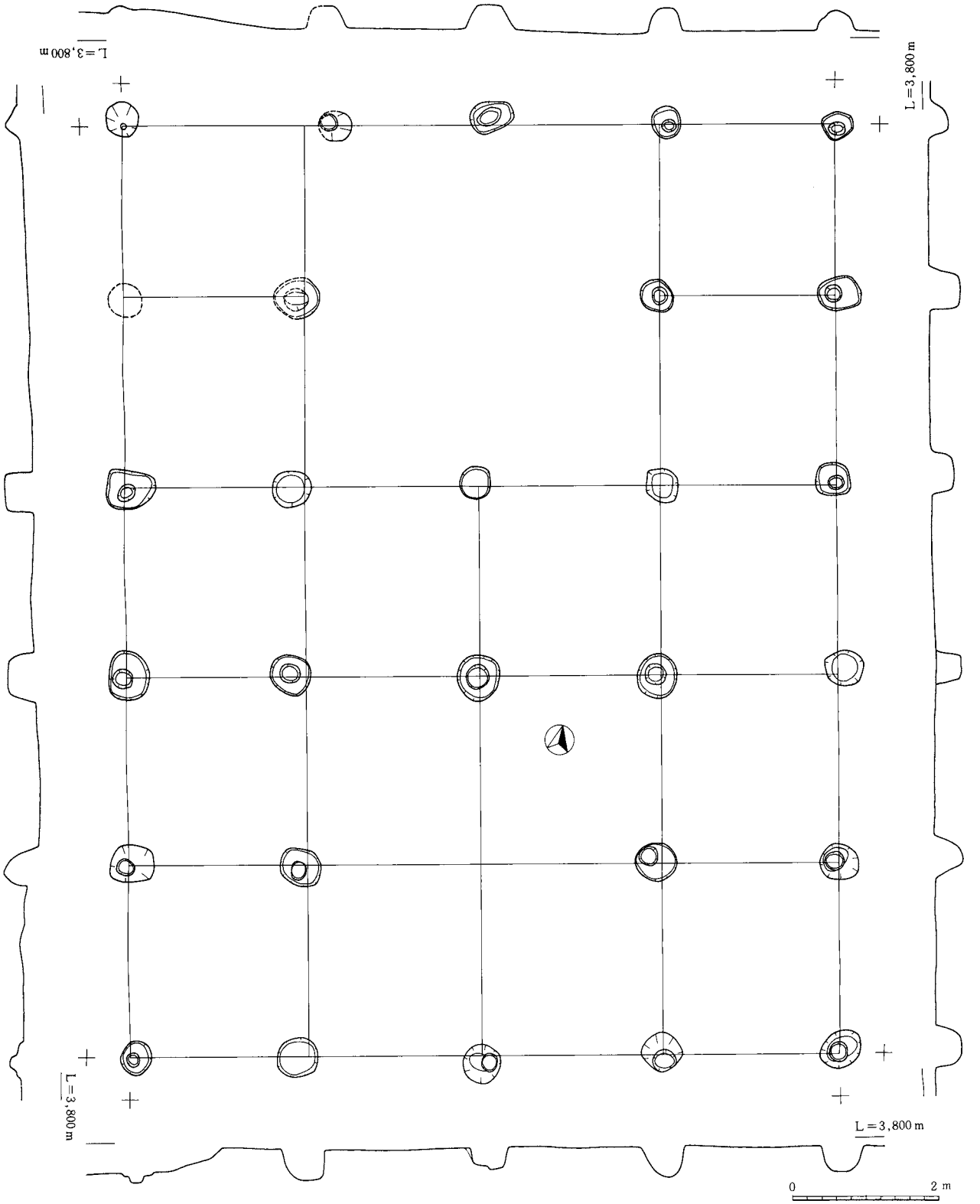
第27号建物跡の北に重複する柱列である。第28号溝に切られて全体規模は不明で、南側柱列を確認できたのみであるが、ここでは建物跡として扱った。

31　第31号建物跡（第29図）

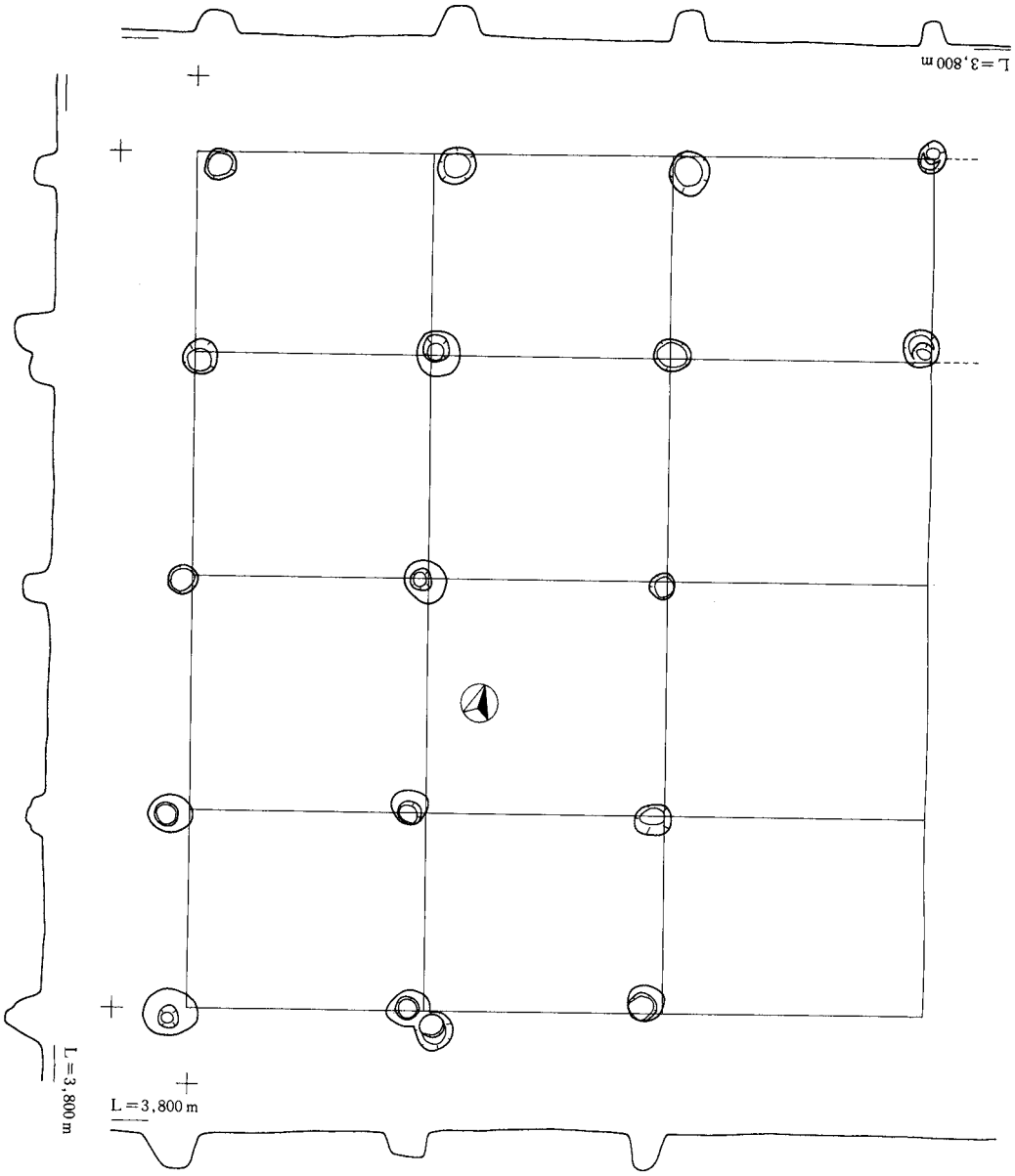
第20号建物跡に重複する。２間（3.70m）×２間（3.60m）の総柱の倉庫様建物である。柱間寸法は、桁行が北から２m＋1.70mで梁行は1.70＋1.90mである。柱穴の掘方は30～50cmの略円形を呈し、深さは40cm前後である。床面積は、13.32m²を測り、N－９°－Wを示す。

32　第32号建物跡（第30図）

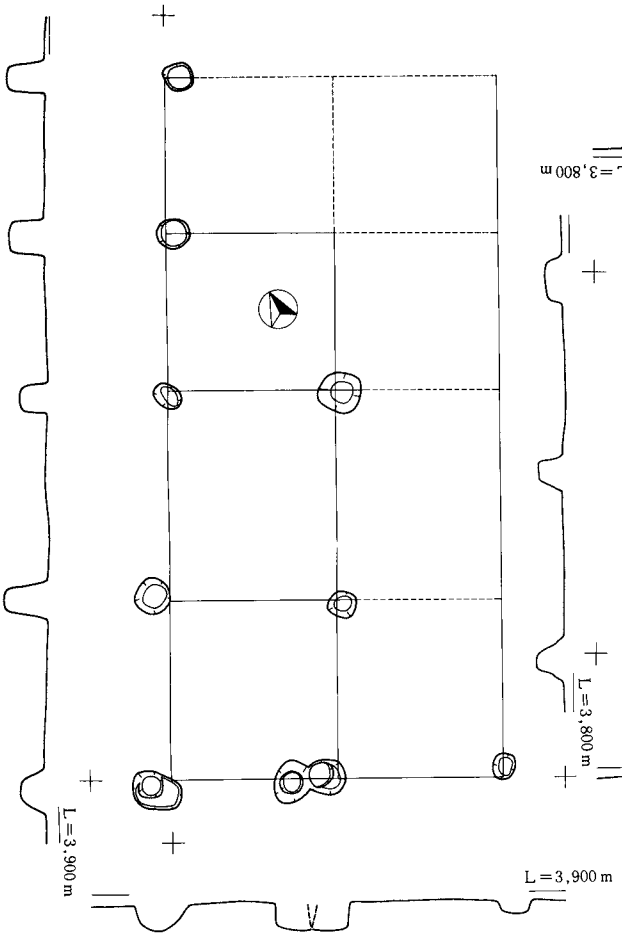
第10～12号建物跡に重複する２間（3.80m）×２間（3.50m）の総柱の倉庫様建物跡である。柱間寸法は、桁行は1.90m等間で、梁行は東から1.90＋1.60mである。柱穴は30cm前後の略円形を呈し、深さは30cm前後である。床面積は13.3m²を測り、主軸はN－７°－Wを示す。



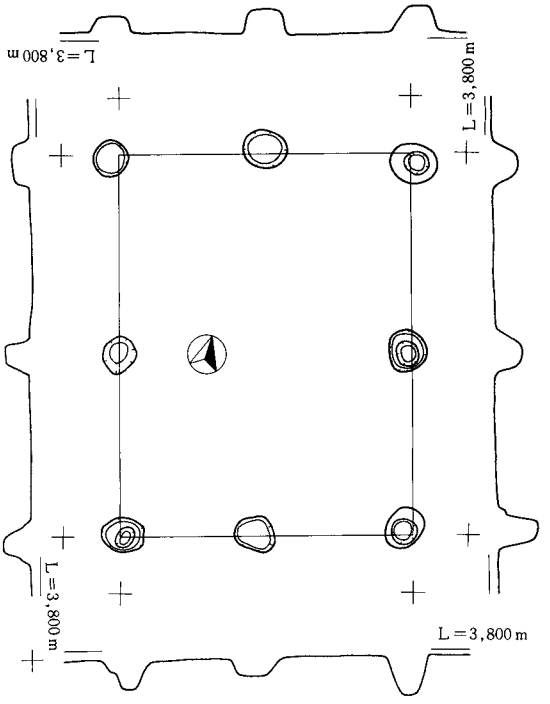
第5図　第1号建物跡



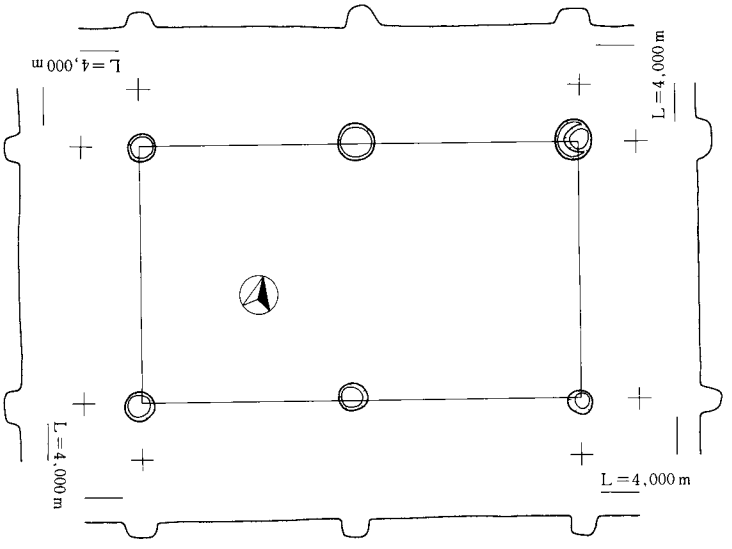
第６図　第２号建物跡



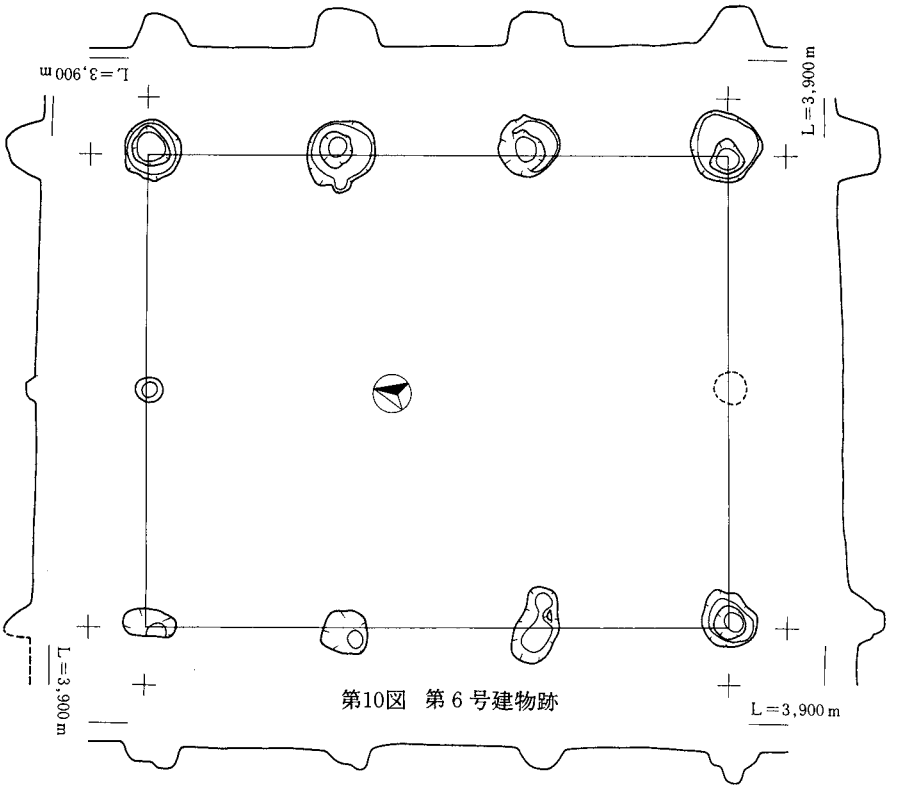
第7図　第3号建物跡



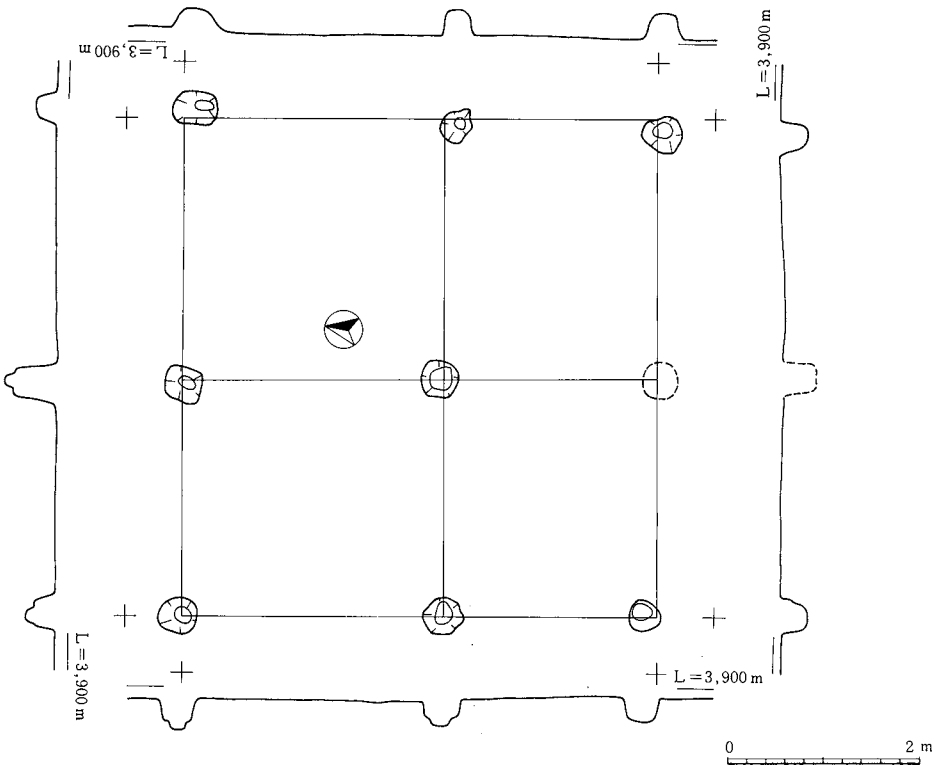
第8図　第4号建物跡



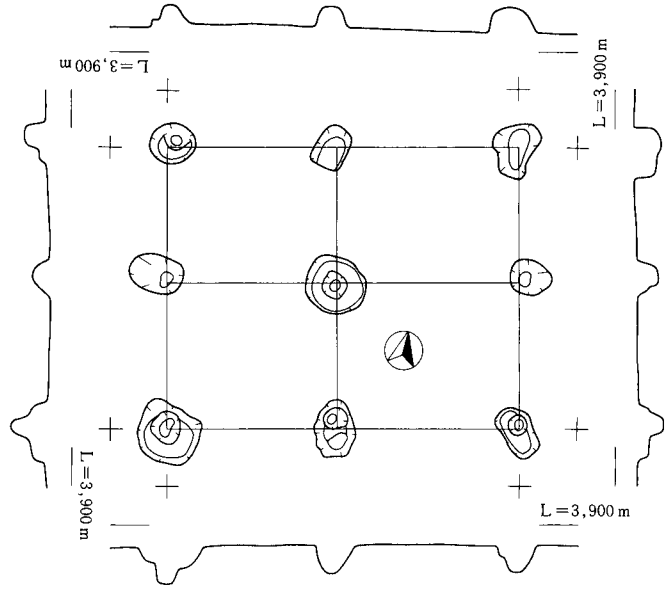
第9図　第5号建物跡



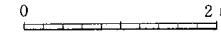
第10図　第６号建物跡

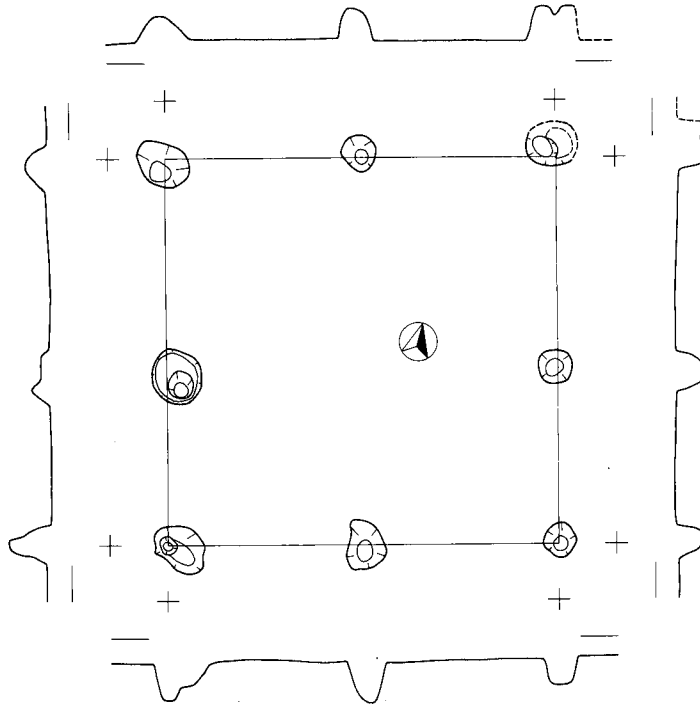


第11図　第７号建物跡

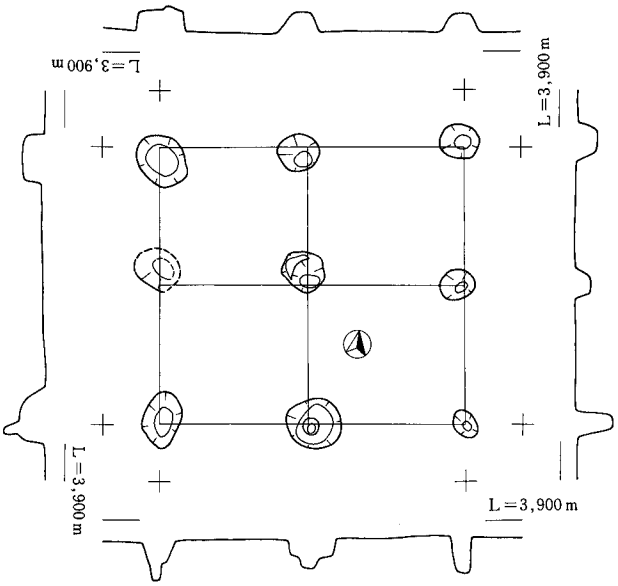


第12図　第10号建物跡

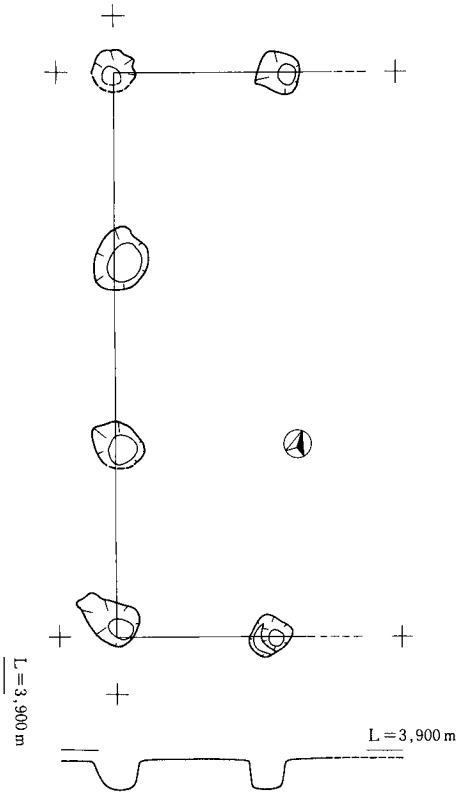




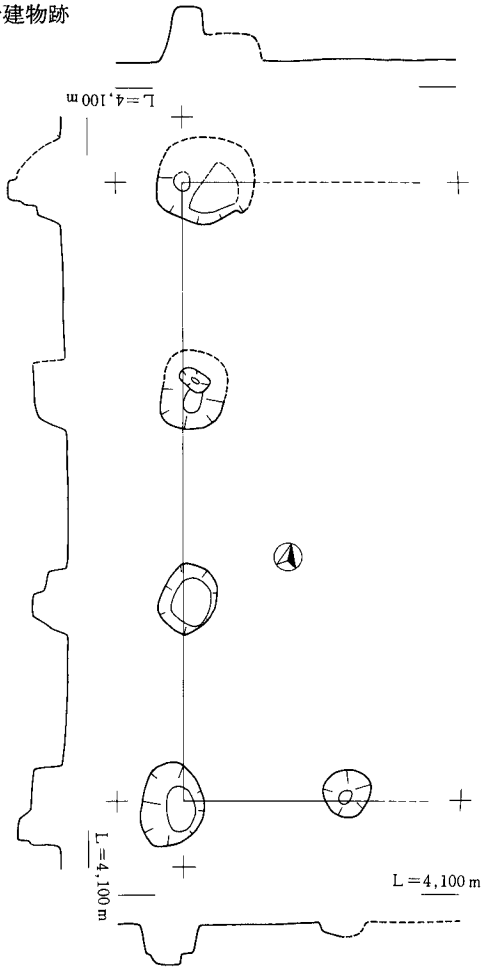
第13図　第11号建物跡



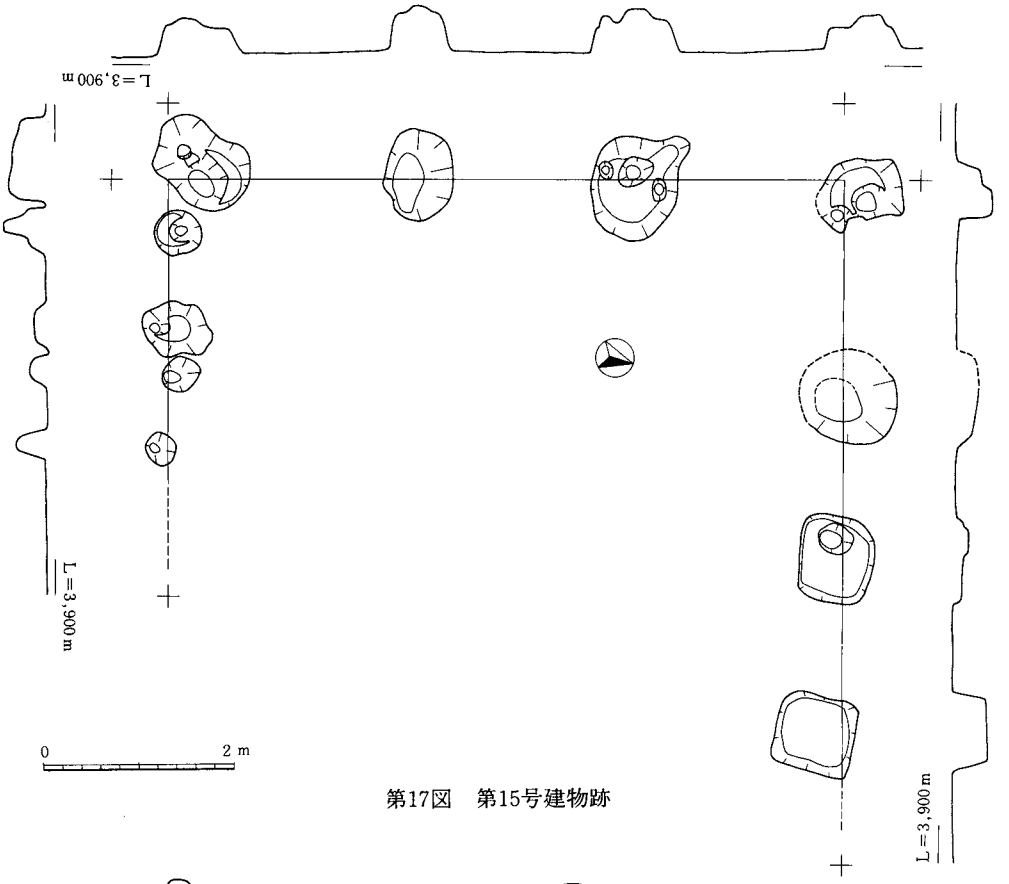
第14図　第12号建物跡



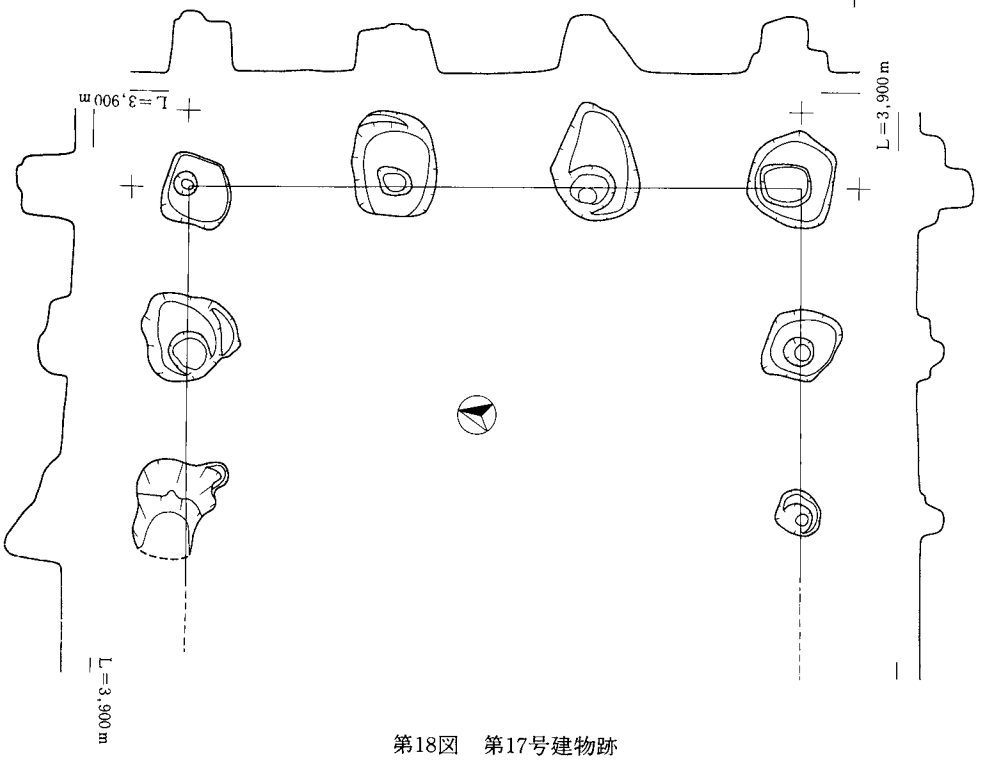
第15図　第13号建物跡



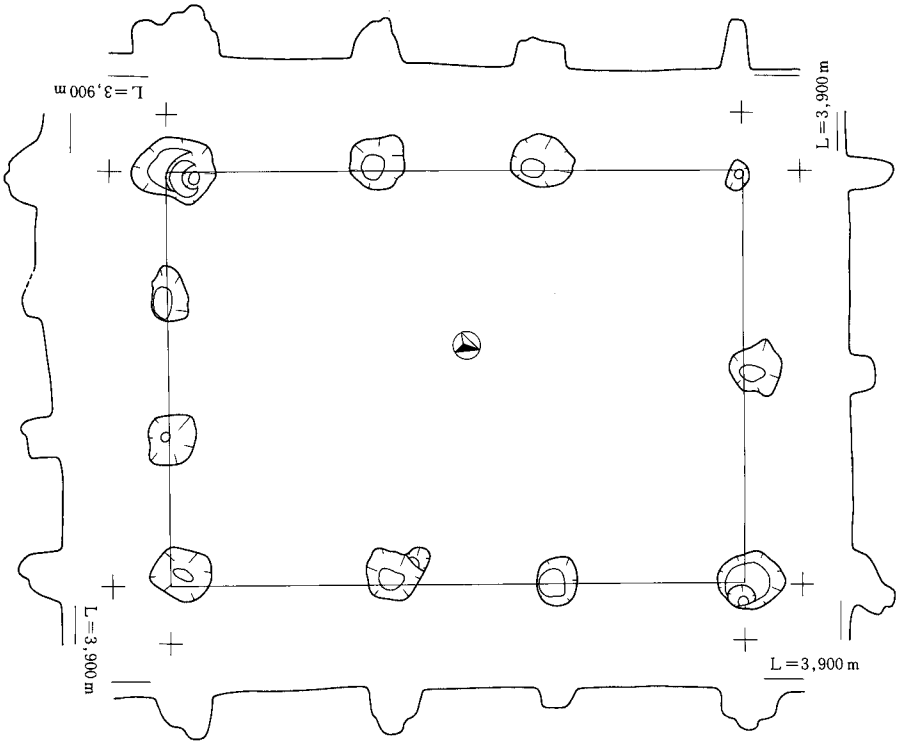
第16図　第14号建物跡



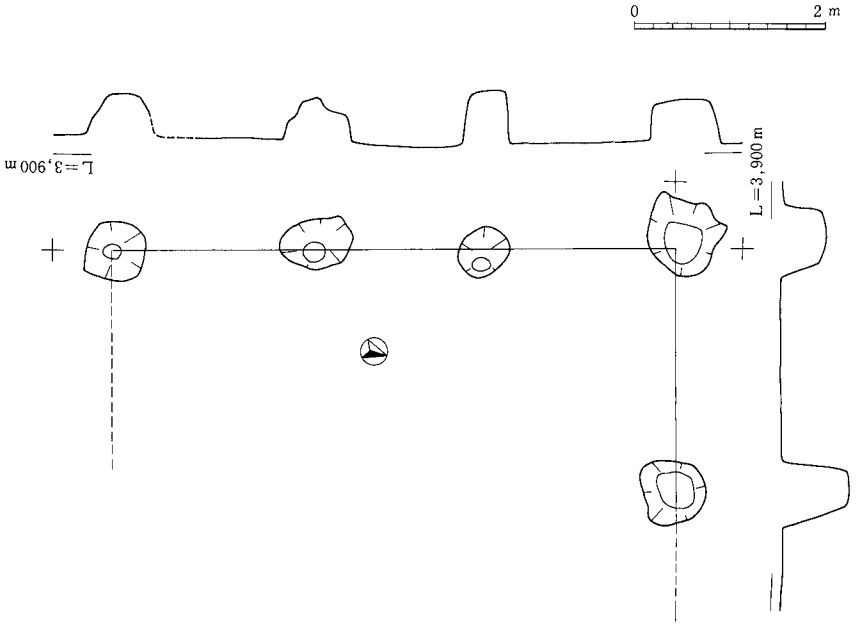
第17図　第15号建物跡



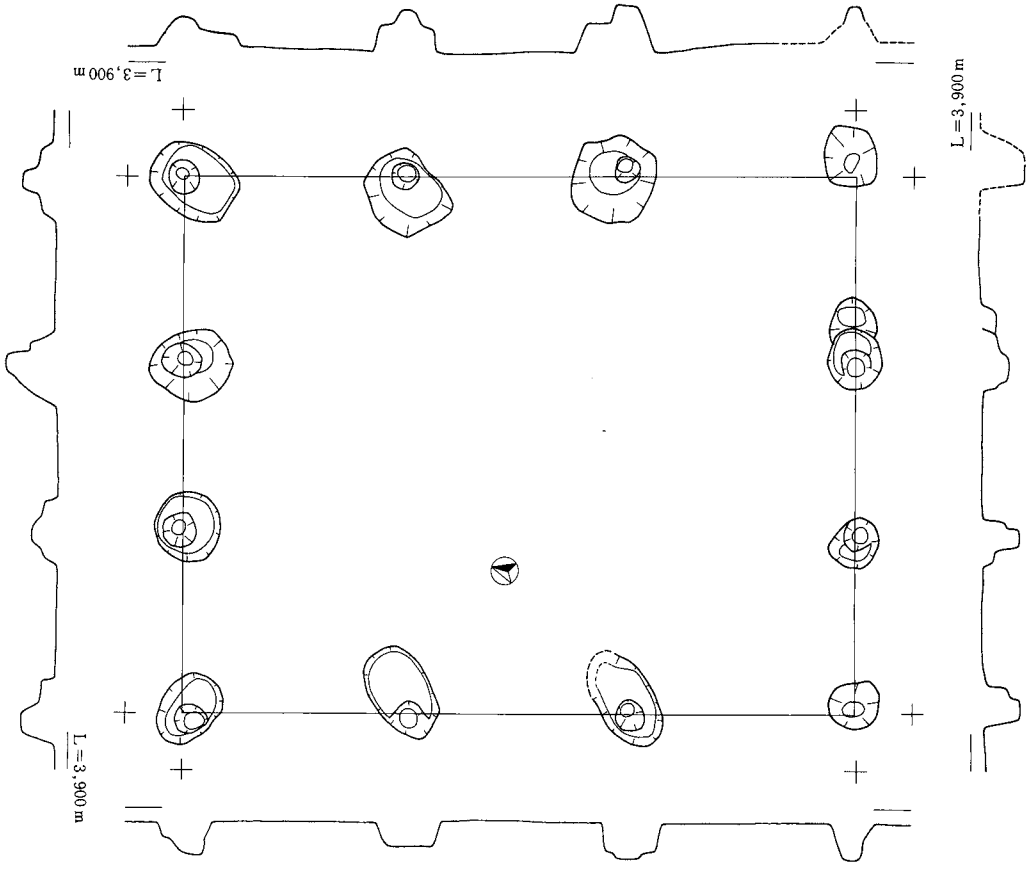
第18図　第17号建物跡



第19図　第18号建物跡

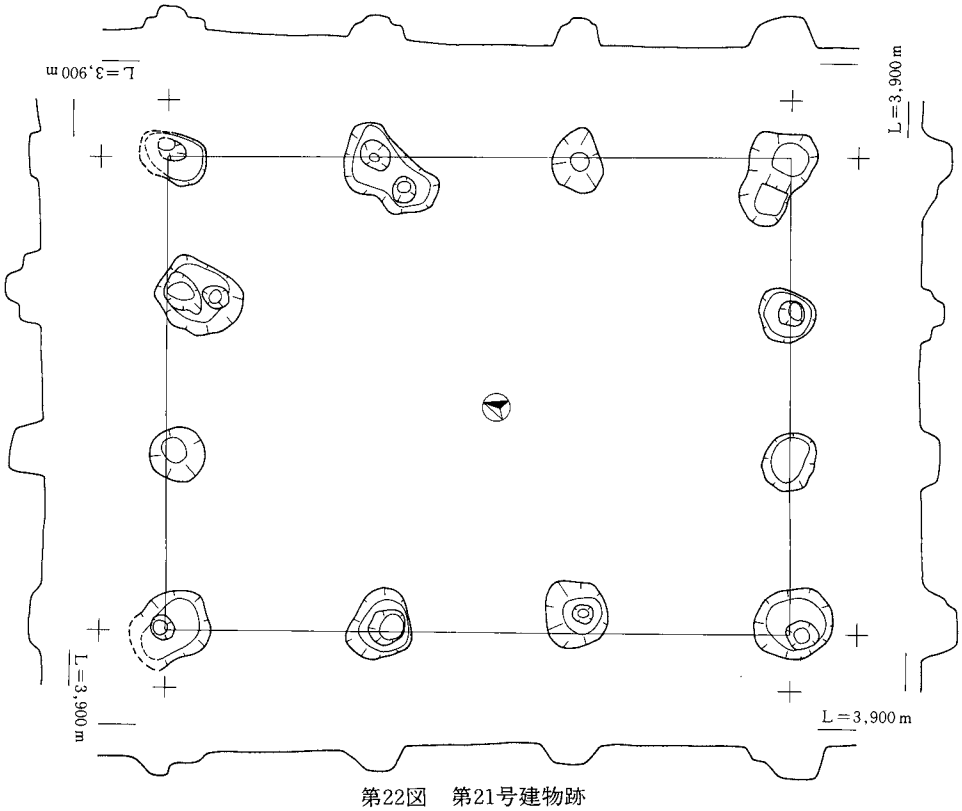


第20図　第19号建物跡

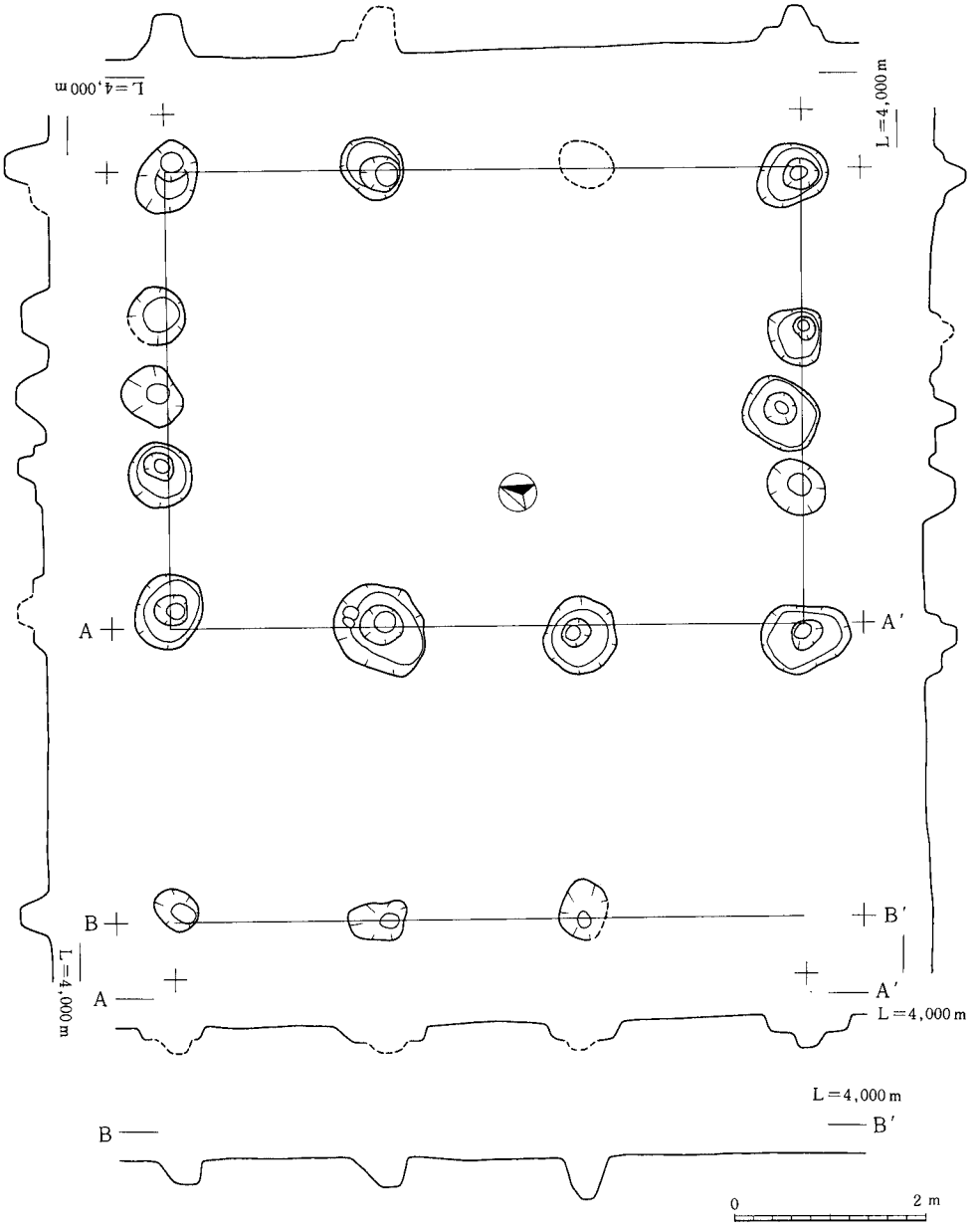


第21図　第20号建物跡

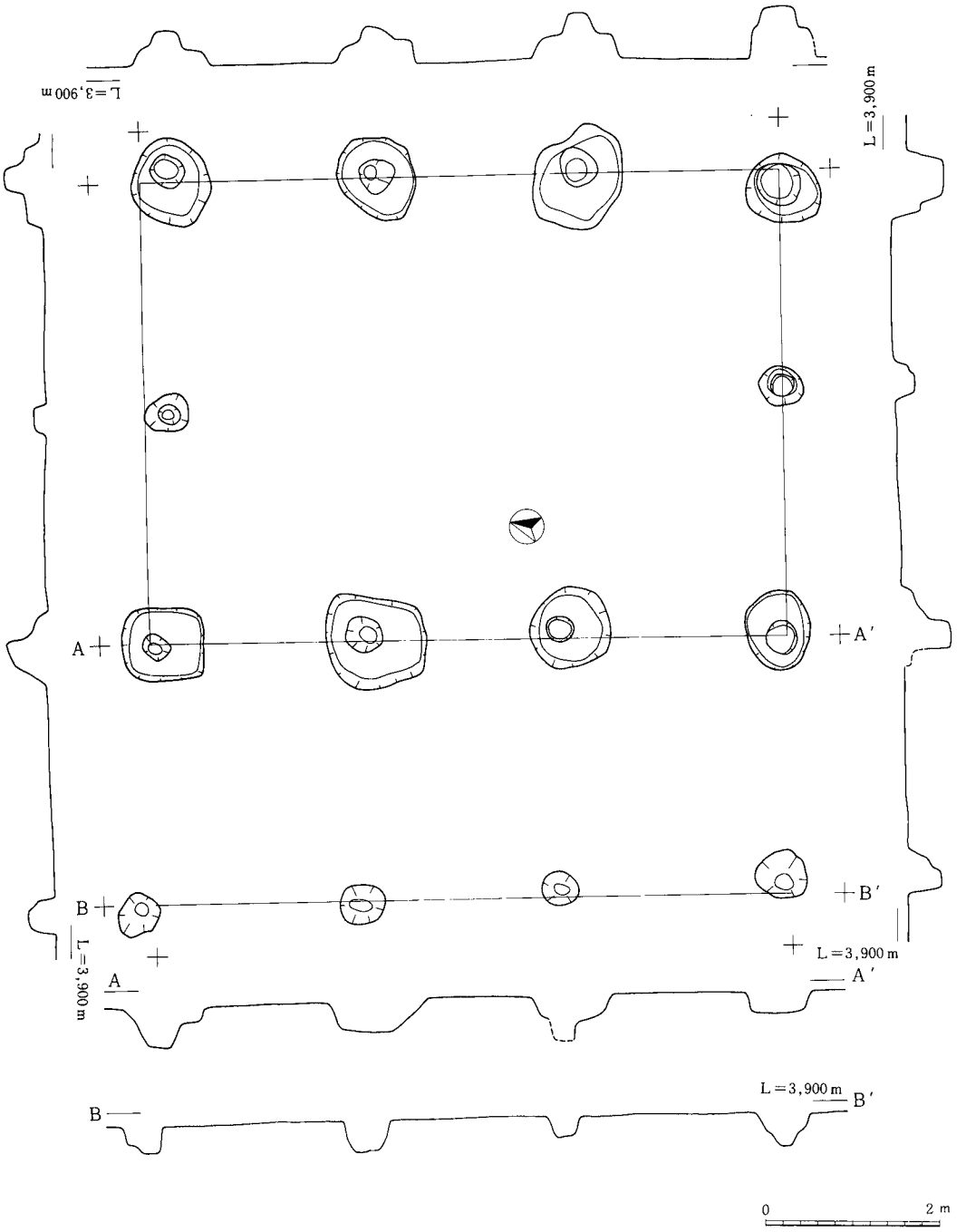
0　2 m



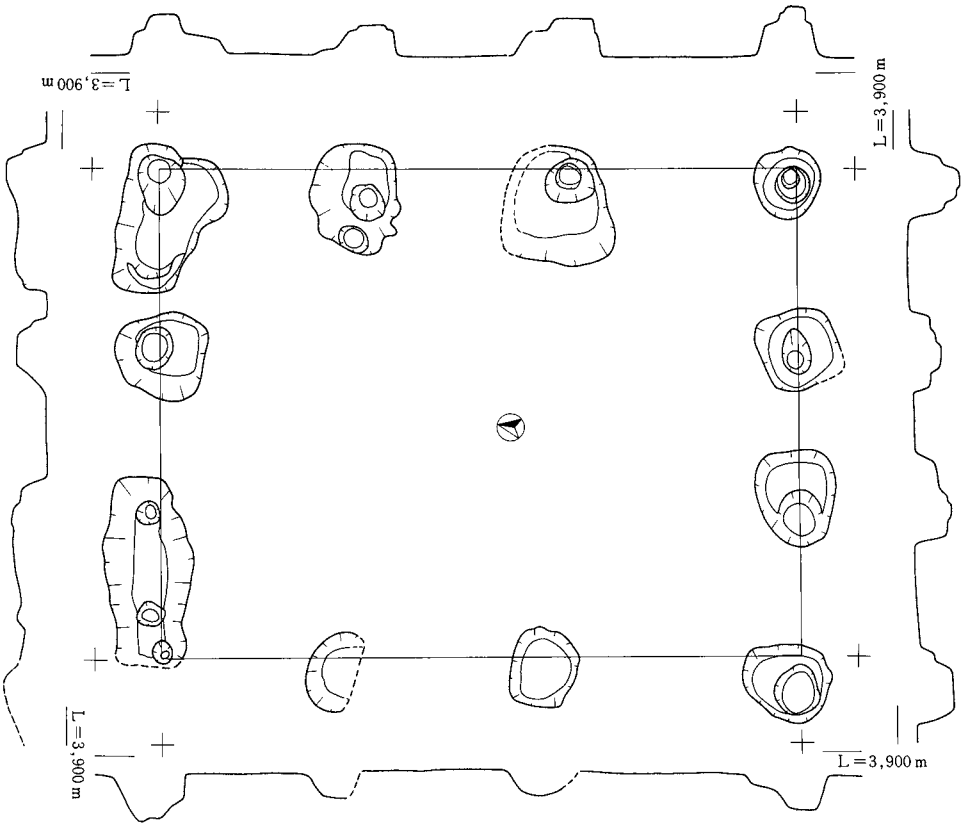
第22図　第21号建物跡



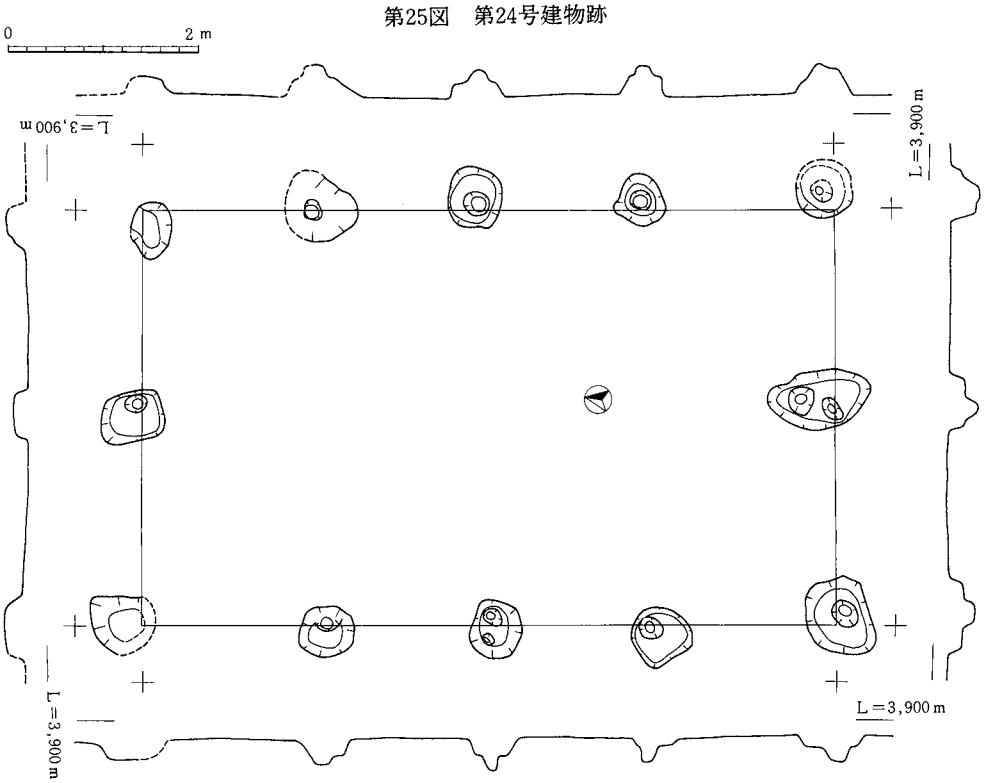
第23図　第22号建物跡



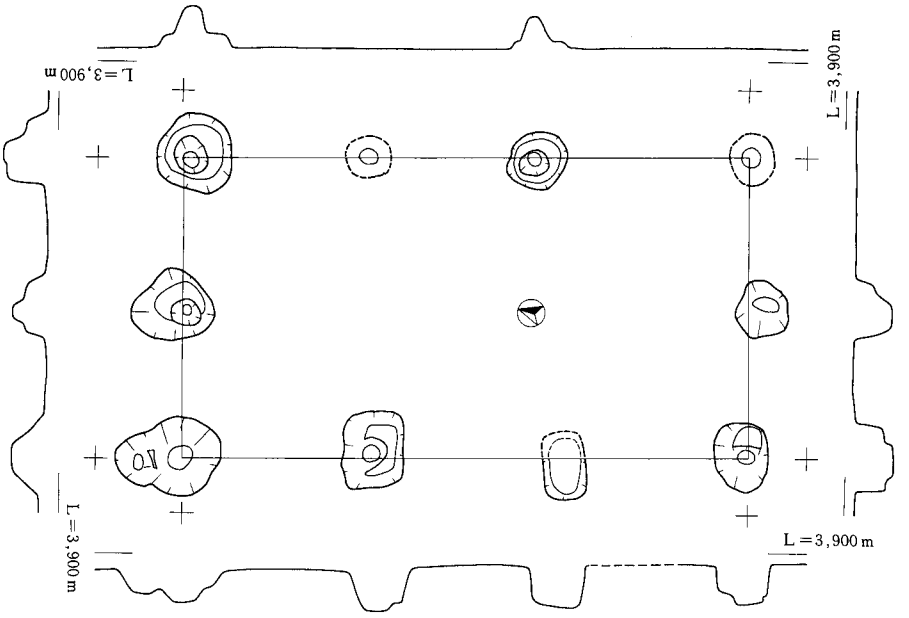
第24図　第23号建物跡



第25図　第24号建物跡

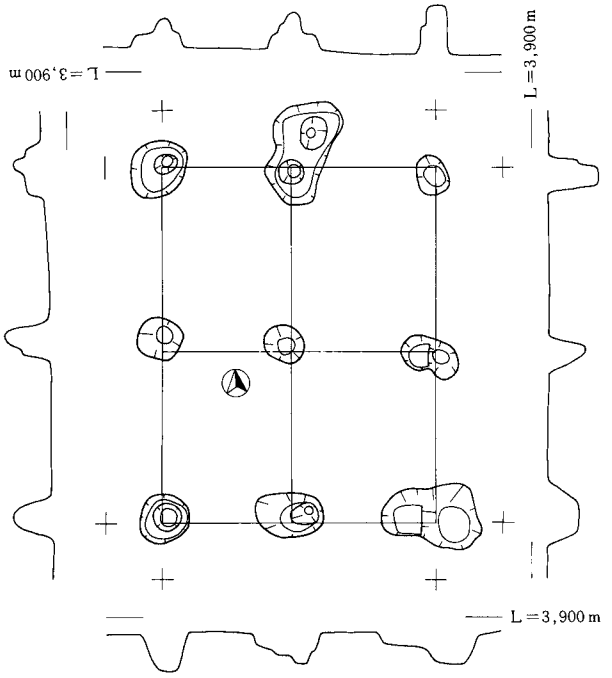


第26図　第26号建物跡

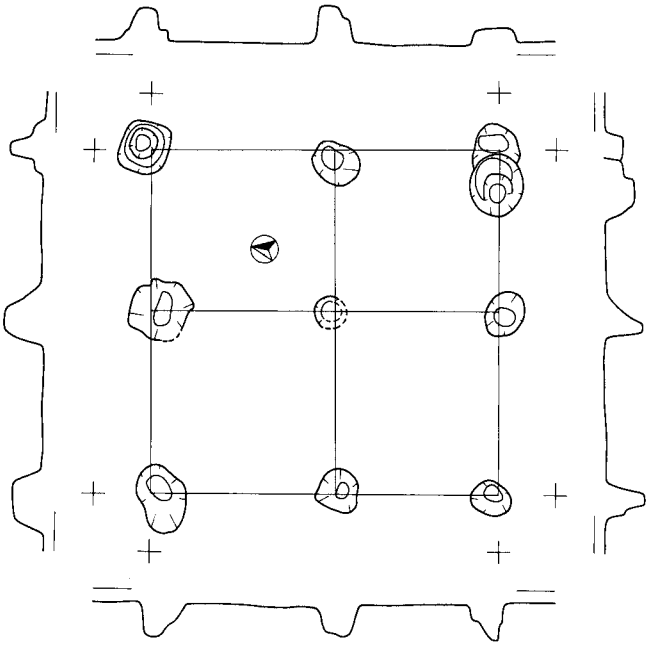


第27図　第28号建物跡

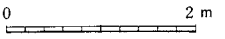
0　2 m

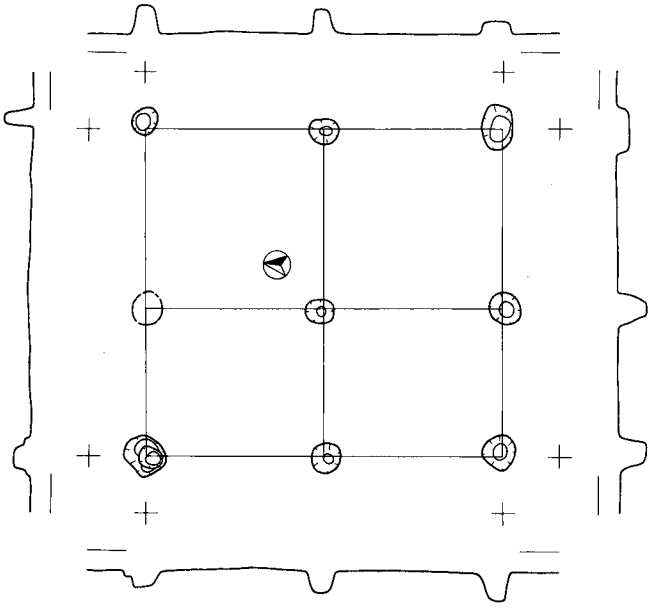


第28図　第29号建物跡



第29図　第31号建物跡





第30図　第32号建物跡

第２項　掘立柱建物出土遺物（第31図～第35図）

２号掘立柱建物　土師器皿（１）の他、土師器皿、須恵器杯身等の細片がみられるが、測図できるものはきわめて少ない。１も口縁部の細片で、かろうじて器形を復元できた唯一のものである。口径15.5cm、口縁部ヨコナデ、体部を指オサエにより調整しており、体部と口縁部の境に稜をもつ。黄褐色を呈し胎土の砂粒は少ない。焼成は甘い。摩耗により詳細な観察はできないが、Ⅸ期～Ⅹ期（田嶋1986）の通有の皿（大型）と推定しておきたい。

３号掘立柱建物　土師器（２）の他、須恵器、土師器の小破片若干がみられる。２は口径14.3cmを測り、⅕程度を遺存する小破片である。口縁部をヨコナデ、体部を指オサエにより調整し、口唇部は丸く納めている。体部と口縁部の境の稜はみられない。淡褐色を呈し、胎土の破粒は少ない。焼成は良好。Ⅸ期～Ⅹ期（田嶋）の資料と推定されるが、時期の特定は難しい。

７号掘立柱建物　須恵器杯身（４）、底部糸切り調整による土師器小型甕、土師器杯破片の他、土師器、須恵器の小破片がある。４は器高 4.7cm、口径12.7cm、高台径 7.5cmを測り、約⅓を遺存している。底外面に判読に疑問を残すが「年」かと推定される墨書がみられる。青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好。４の時期については、II_1 期（吉岡1983）頃と推定される。

８号掘立柱建物　須恵器杯蓋（３）、フイゴ羽中の小片の他、土師器・須恵器の細片が出土しているが、遺物量は少ない。３は口径12.0cm、器高 2.4cmを測り、約⅖を遺存している。天井部から肩の一部にかけヘラケズリ調整。胎土は砂粒を多量に含む。濁青灰色を呈し、焼成良好。当該建物の年代は、遺物が少なく特定には保留の余地を残すが、３から推定すれば II_1 期（吉岡1983）頃とみられる。

９号掘立柱建物　須恵器杯身（５）、赤彩土師器椀小片、土師器小型甕小片の他、土師器、須恵器の細片若干がみられるが、遺物量は少ない。５は高台径 8.0cm程度に復元できるが、遺存率⅙程度の小破片である。胎土には砂粒を比較的多く含む。暗灰色を呈し、焼成良好。当該建物の時期の特定は難しいが、出土遺物はII期（吉岡1983）の資料からなる。

10号掘立柱建物　須恵器無台杯身（６）３個体分と土師器細片若干がある。６は復元底径 8.3cmを測るが、⅕程度の小破片である。出土遺物から当該建物の時期を特定するのは難しい。

11号掘立柱建物　土師器、須恵器の小破片若干がある。土師器甕には V_2 期（田嶋1986）の小破片がみられる。

12号掘立柱建物　須恵器杯蓋（７～10）杯身（14）盤（11～13）薬壺蓋（15）土師器甕（16・17）等がある。７・13・14、８～12・16はそれぞれ同一の柱穴より出土したもの（第36図）である。７は口径12.3cm、器高 2.4cmを測り、⅖を遺存する。天井はヘラケズリを施す。暗褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。８は口径12.1cm、器高 2.5cmを測り、⅘を遺存する略完形品。天井部はナデ調整により平滑に仕上げている。胎土・焼成・色調は７に類似する。９は口径12.0cm、器高 3.0（復元値）cmを測り、⅘を遺存する略完形品。天井部ナデ調整。淡青灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。10は口径17.8cmを測る。⅓を遺存。天井部はやや狭い範囲でヘラケズリ調整を施す。淡灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。11は口径15.6cm、

器高 1.5cmを測り、½を遺存する。体部と底部の境は外面では丸く仕上げているが、内面は明瞭に屈曲している。内底面に明瞭な使用痕を認める。底外面はナデにより丁寧に調整している。暗青灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。12は口径14.7cm、器高 1.7cmを測る。½を遺存する。形態の特徴、外底面の調整、胎土・焼成・色調は11に類似する。13は口径15.8cm、器高 2.0cmを測り、⅘を遺存する。底部はナデ調整で、ヘラ切りからみたロクロ回転は右回転。淡灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はやや甘い。14は口径12.0cm、器高 4.0cm、高台径 8.2cmを測り、½を遺存する。暗青灰色を呈し、胎土に含まれる砂粒は少ない。焼成良好。15は口径11.7cm、器高 3.7cmを測り、½を遺存する。暗青灰色を呈し、胎土は砂粒を比較的多く含む。焼成良好。16は口径13.8cmを測り、体部の⅓を遺存する。体部はヨコナデ調整を施し、器肉は薄い。口縁部端をつまみ上げた特徴的な形態をもつ。黄褐色を呈し、胎土には比較的大粒の砂粒を含む。焼成良好。17は口径14.0cm、底径 7.2cmを測る。略完形品。器壁が剥離しており、調整の詳細は明らかでないが、体部内外面にはハケ調整が確認できる。内底部はヨコナデ調整。外底部は糸切り痕が確認できず、二次的に調整を加えている可能性もある。二次的加熱により部分的に赤化している。黄褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含む。焼成良好。当該遺物は II_2期（吉岡1983）と推定されるもの（8・9・14）と、若干古相をもつもの（11・12）とがみられるが、両者を時期差ととらえうるかどうかは今後の課題である。いずれにせよ当該建物の時期は II_2期と特定して大過ないと推定される。

13号掘立柱建物　須恵器、土師器の小破片が出土している。遺物の時期はⅢ期を上限とする。

16号掘立柱建物　須恵器杯蓋(19)、皿(20)、鉢(22)、土師器有台椀(21)、鉢(24)、甕（23）の他、須恵器甕・盤・杯、土師器甕等の小破片があり、遺物量は多い。19は鈕を欠失した遺存率⅕程度の破片。口径15.2cmを測り、天井部に墨書？を認める。淡青灰色で、胎土の砂粒は目立たない。焼成良好。20～22、24の資料より時期的に先行すると推定される。20は有台皿で底部を欠失。⅕程度を遺存。底部糸切り。側底部にはロクロ削りを施していない。口径13.4cm。濁灰色を呈し、砂粒は比較的多い。焼成良好。21・22・24とともに当該建物に対応する資料と推定される。21は土師器有台椀。高台を欠失しているが、½程度の大型破片。内面黒色、外面は底外面も含め赤彩している。底側面に粗いロクロ削りが認められ、底外面も糸切り調整後、ロクロ削りを施している可能性が高い。色調は淡褐色で胎土には砂粒若干を含む。焼成良好。22は口径26.0cmを測る鉢形土器。形態的には実測図よりやや立つ可能性がある。遺存率⅕程度の小破片である。胎土には砂粒を含み、外面上半部に自然釉が付着、その部分は黒灰色を呈す。焼成良好。23は土師器中型甕で口径21.5cmを測る。口縁部の⅖を遺存する。口縁部ヨコナデ、頸部下端より円外面ともカキメ調整を施す。色調は淡褐色で、胎土の砂粒は同器種の内では相対的に少ない。焼成良好で、口縁部を中心に二次的に火を受け、赤化している。24は口径26.5cmを測る鉢で、小破片。須恵器と判断されるが、色調は淡褐色。胎土には破粒含む。体部は内外面ともカキメ調整。当該建物の時期については、20・21・22・24等から推定して V_2期（田嶋1986）と推定して大過ないと考えられる。

17号掘立柱建物　須恵器盤(25)、土師器高台付皿（26）の他、須恵器杯身・杯蓋、土師器甕等

の細片と、鉱滓が出土している。25は口径16.1cm、器高 2.4cmを測り、⅖程度を遺存。外底部は粗くヘラケズリ調整を施している。色調は青灰色を呈し、胎土の砂粒は少ない。焼成良好。26は有台皿で、約⅜を遺存した大型破片。口径13.8cm、器高 3.2cm、脚径 7.5cmを測り、内面黒色処理、外面は外底部、高台内側を除き赤彩を施している。細部の調整は磨耗により明らかでないが、比較的調整の入念なものと推定される。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含むが精選されている。焼成良好。当該建物の時期は、時期的に新らしい26によれば V_1期頃（田嶋1986）かと推定される。

18号掘立柱建物　須恵器盤(29)、土師器甑(30)、の他須恵器杯身・甕、土師器椀(赤彩)・甕の小破片がある。29は口径17.2cm、器高 2.3cmを測り、¼を遺存。外底部はヘラケズリ調整後ナデ調整を施している。色調は青灰色を呈し、胎土の砂粒は少ない。焼成良好。30は口縁部の小破片、口径は26.0cmを測る。外面はタテ方向はハケ調整、内面はヘラケズリ調整を施している。胎土には比較的大きな砂粒を多く含み、色調は黄褐色で、焼成は良好。当該遺物の年代観は小破片のため特定は難しいが、Ⅰ期（吉岡1983）でも新らしい時期のものと推定しておきたい。

19号掘立柱建物　須恵器杯身(28)、杯蓋（27）の他、須恵器杯身、土師器椀（赤彩）・甕等の小破片がある。28は遺存度⅕程度の小破片で、口径12.0cm、器高 3.5cmを測る。淡灰色を呈し焼成はやや甘い。胎土には少量の砂粒を含む。27も遺存度⅕程度の小破片。口径11.8cmを測る。天井部をヘラケズリ調整する。天井部には「年」と判読できる墨書がみられる。青灰色を呈し焼成は良好。胎土に含まれる砂粒は少ない。当該遺物の年代観は小破片のため特定は難しいが、Ⅱ期（吉岡1983）の内に含めて大過ないと判断できよう。

20号掘立柱建物　須恵器無台杯(35)、有台杯(31・32)、盤(33)、土師器鍋（34）の他、把手付鍋と推定される把手がある。35は口径12.5cm、器高 3.9cmを測る略完形品である。外傾した口縁部をもち、外底部に「年」と推定される墨書がみられる。ロクロは右回転。淡灰色を呈し、焼成はやや甘い。胎土には少量の砂粒を含む。31は口径12.5cm、器高 3.7cm、高台径 7.5cmを測り、¼を遺存する。胎土には砂粒を多く含み、暗灰色呈す。焼成良好。32は口径11.7cm、器高 4.4cm、高台径 6.1cmを測り、¼を遺存する。高台が底部内側に入り込んでいる点を除けば、31に類似した形態をもつ。胎土・焼成・色調も31に酷似する。33は口径16.5cm、器高 2.1cmを測る。遺存度⅕程度の小破片である。口縁部は屈曲、外底部はナデ調整を施している。胎土には少量の砂粒を含む。色調は青灰色で、焼成良好。34は口径29.0cmの鍋で、小破片である。体部は内面カキメ調整、外面はカキメ調整とヘラケズリを併用している。黄褐色を呈し、焼成良好。胎土にはこまかい砂粒を多く含む。その他、把手付鍋の把手と推定される把手破片がある。当該遺物の時期は把手付鍋は先行するが、他はⅢ(新)～Ⅳ期（吉岡1983）と幅をもたせて理解しておきたい。

21号掘立柱建物　須恵器高台付椀(36)、杯(37)、土師器椀(38)、甑（39）の他、須恵器杯、瓶土師器甕、椀等の小破片があり、遺物量は多い。36は口径19.0cm、器高 6.5cm、高台径 9.0cmを測る大型品で、⅖を遺存する。椀形の形態をもち、大きな高台を付けた類例の少ない器種といえる。底部はヘラ切り、高台底部に圧痕をもつ。黒灰色を呈し、焼成良好。胎土には砂粒若干を含む。37は口径13.2cm、器高 3.2cmを測る略完形品である。底部はヘラ切り未調整で、ロクロは右

回転。外底部に「年」かと推定される墨書がある。灰白色を呈し、焼成良好。胎土の砂粒は少ない。38は高台椀かと推定される口縁部の小破片。内面黒色処理、外面は赤彩している。外面にはヨコナデによるヒダを顕著に残す。口径20.0cm。淡褐色を呈し焼成良好。比較的大粒の砂粒若干を含む。39は甑底部かと推定されるが、器種は明らかでない。小破片である。底径は17cmを測り、外面にはカキメ調整を認める。胎土の砂粒は少なく、黄褐色を呈し焼成良好。須恵器の焼成不良品の可能性もある。当該遺物の時期は、37からⅥ(新)～Ⅴ期（吉岡1983）の年代観が得られよう。36は類例が乏しく、38は小破片のため特定は難しいが、上記の年代と大きく錯誤するものではなかろう。

22号掘立柱建物　須恵器杯身(41・42)、盤(43)、土師器有台皿(40)、土錘(45)の他、縁釉小壺小片、須恵器杯身・杯蓋・盤・甕、土師器椀・甕等の小破片があり、遺物量は多い。40は高台径7.2cmを測り、底部の⅖を遺存する。内面は黒色処理、外面は赤彩が施されていたと推定されるが摩耗により不明。胎土には砂粒を少量含み、色調は淡褐色。焼成は良好。41は高台径10.5cmを測り、底部の¼を遺存する。胎土には多量の砂粒を含み、色調は青灰色。焼成良好。42は無台杯底部の小片である。黄褐色を呈するが須恵器の焼成不良品と推定される。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好。43は口径19.3cm、器高 2.2cmを測り、⅖を遺存する。口縁部はヨコナデにより２段に弱く屈曲している。底外面はナデ調整で、ほぼ中央に墨書痕を認める。胎土に少量の砂粒を含み、濁青灰色を呈するが、部分的に黄褐色に発色している。焼成良好。45は土師器の土錘。長さ 2.9cm、径 1.4cm、孔径 0.4cm、重さ 5.5ｇを測る。完形品。当該資料中もっとも新らしいと推定される資料は40で、Ⅳ期ないしⅤ期（吉岡1983）でも古い時期と推定される。

24号掘立柱建物　須恵器杯身(48)、杯蓋(49)、土師器椀(46)、皿(47)の他、須恵器杯身・甕、土師器椀・甕の小片と鉄片１点がある。遺物量は少なくない。46は赤彩土師器椀で、口径13.0cmを測る。小破片である。淡褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。47は口径13.8cm、器高 2.3cmを測り、½を遺存している。調整は摩耗により明らかでない。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。48は底部の⅓を遺存する破片。丸い体部をもち、外底部に丁寧なナデ調整がみられる。青灰色を呈し、胎土には砂粒を比較的多く含む。焼成良好。49は口径18.8cmを測る。¼を遺存する。天井部は広くヘラケズリを施す。青灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。当該遺物も２時期以上の遺物を含み、測図したものでは II_1期前後（吉岡1983）と推定される46・48・49と、Ⅴ期（吉岡1983）頃と推定される47からなる。

26号掘立柱建物　須恵器杯蓋(52)、土師器椀(53)、鉢(54)、甕（55・56）の他、須恵器有台杯、土師器甕等の破片がある。52は口径17.3cm、器高 3.0cmを測り、½を遺存する。扁平で大きな鈕をもち、天井部をヘラケズリする。淡青灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。53は高台径 7.0cmを測る。口縁部を除き底部のすべてを遺存する。外面赤彩。外底部はナデ調整を施しており、糸切り痕を留めない。黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成良好。54は赤彩土師器鉢で、⅖を遺存する。口縁部をわずかにつまみ上げている。外底部は回転ヘラケズリ調整で、暗文の有無は判然としない。口径17.7cm、器高 4.5cm。黄褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。55は小型甕で、⅖を遺存する。口径12.0cm、器高は11～12cm程度に復元できる。体部外面

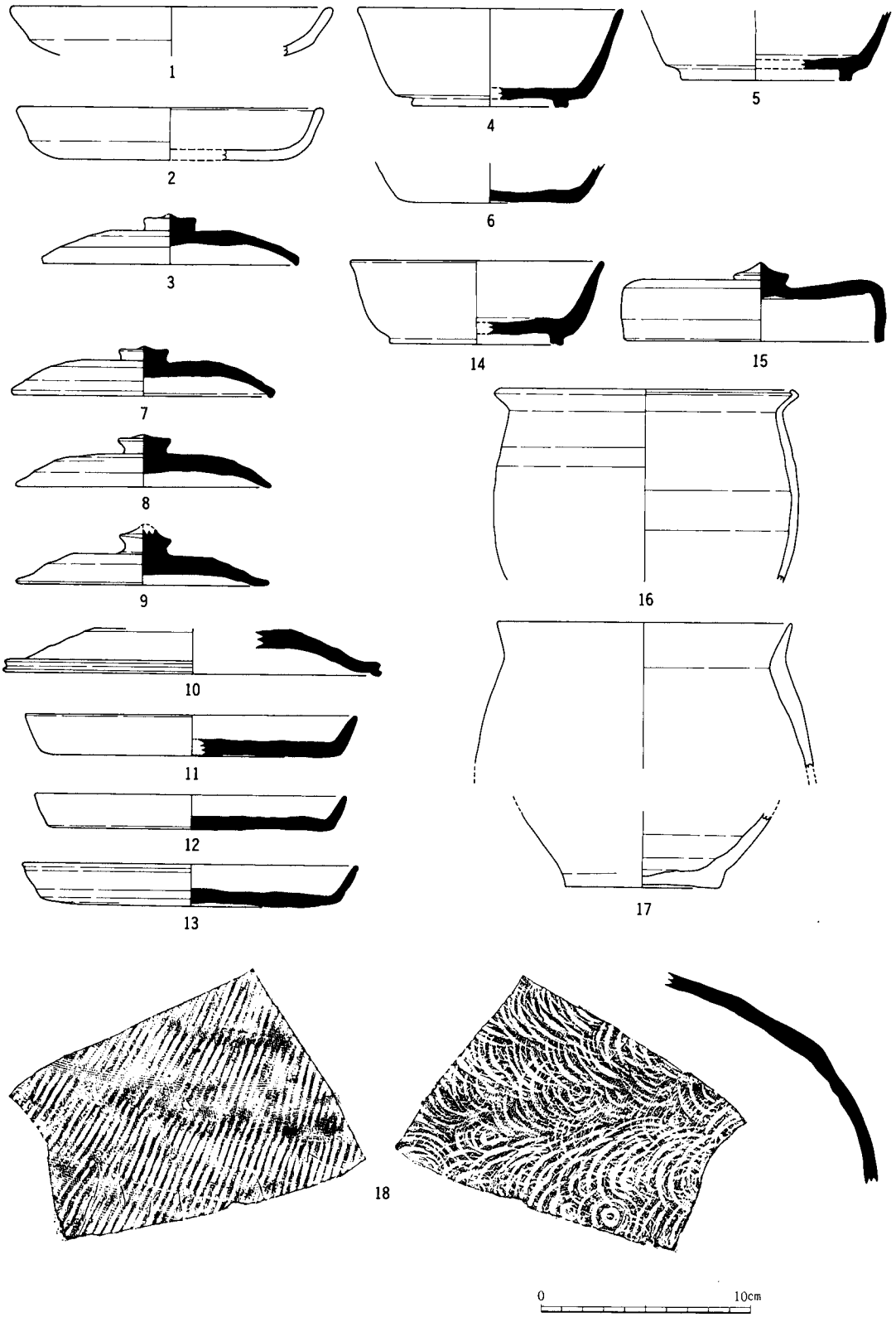
は上半部をハケ、下半をヘラケズリ調整。内面は上半をハケ、下半部は部分的にヘラケズリ調整を施している。黄褐色を呈し、胎土には比較的大粒の砂粒を含む。焼成良好。56は口縁部の⅖を遺存する。口径19.5cm。調整は摩耗により明らかでない。黄褐色を呈し砂粒を若干含む。焼成は甘い。当該建物出土遺物は I_2期(吉岡1983)と推定されるもの(52・54～56)と、V期(吉岡1983)と推定されるもの（53）に大別できる建物の時期は保留部分を残すが、52・54～56が大型破片であることからI_2期と想定しておきたい。

27号掘立柱建物　須恵器杯蓋(57)、杯身(58)、薬壺蓋(59)、有孔の土製品（60）の他、須恵器杯、土師器甕等の小破片がある。遺物量は多い。57は口径12.9cm、器高 2.6cmを測り、略完形品である。鈕は形態的にやや崩れ、天井部は粗いナデ調整を施す。青灰色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成良好。58は底部の½を遺存する。胎土に砂粒を多く含み、暗青灰色を呈すが、部分的にセピア色に近く発色している。焼成良好。59は遺存度⅕程度の小破片。天井部に自然釉付着。口径12.2cmを測る。胎土には比較的多くの砂粒を含み、色調は暗青灰色。焼成は良好。60は土師器の有孔の土製品。長さ 6.3cm、径 4.0cm、孔径 0.8cm、重さ 100ｇを測る。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。当該資料についても時期差が認められる。最新と推定される57はIII期（吉岡1983）が上限と推定される。

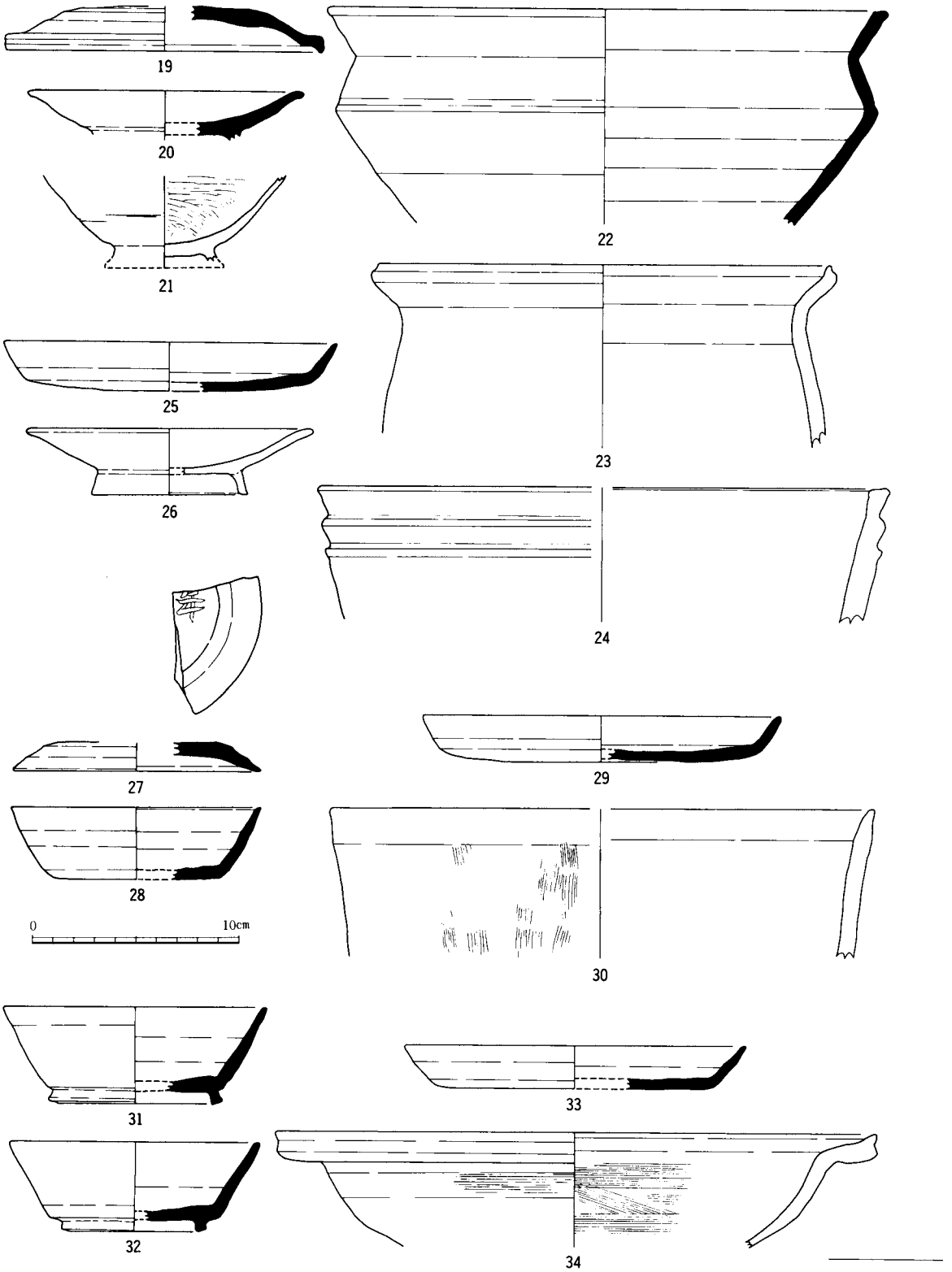
28号掘立柱建物　須恵器杯身（51・52）の他、須恵器杯蓋・甕、土師器甕等の細片がみられる。50は口径12.8cm、器高 3.3cmを測り、遺存度は⅕。外底部は丁寧なナデ調整を施す。青灰色を呈し、焼成良好。胎土の砂粒は少ない。51は口径13.0cm、器高 4.0cmを測り、⅖を遺存する。外底部は50と同様丁寧なナデ調整を施す。青灰色を呈し焼成良好。胎土の砂粒は少ない。50･51はII_2期（吉岡1983）頃と推定され、小破片であるが共伴する須恵器杯蓋も当該期のものと推定される。

29号掘立柱建物　須恵器杯身（61）の他、土師器甕破片があるが、遺物量は少ない。61は底部の½を遺存する。外底部はヘラケズリ後、粗くナデ調整している。外底部に黒痕を認めるが判読できない。青灰色を呈し焼成良好。胎土には砂粒を多く含む。61はIII期（吉岡1983）頃と推定しておきたい。

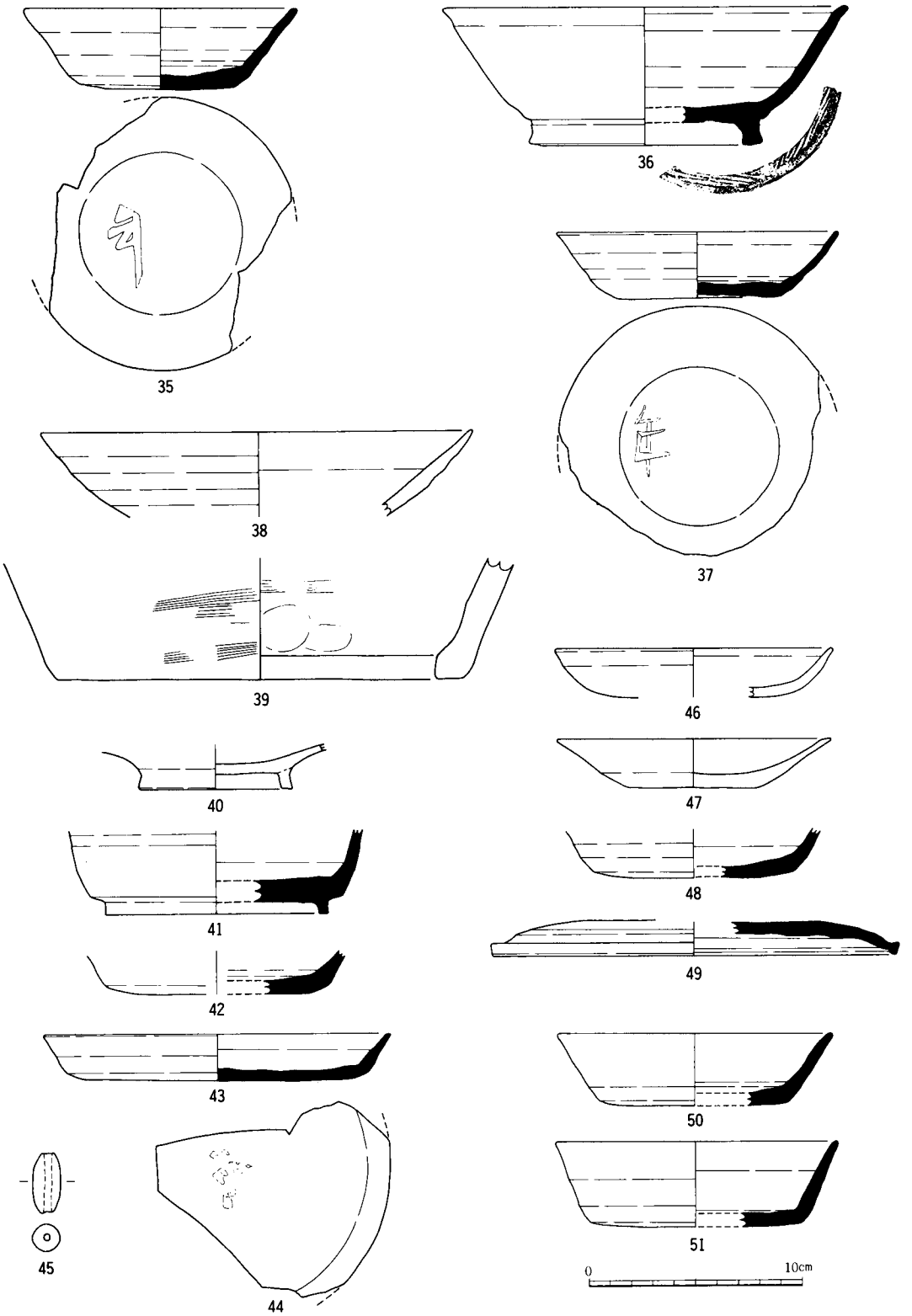
その他の柱穴出土遺物　62～70は建物との関係を特定できない柱穴より出土した遺物である。



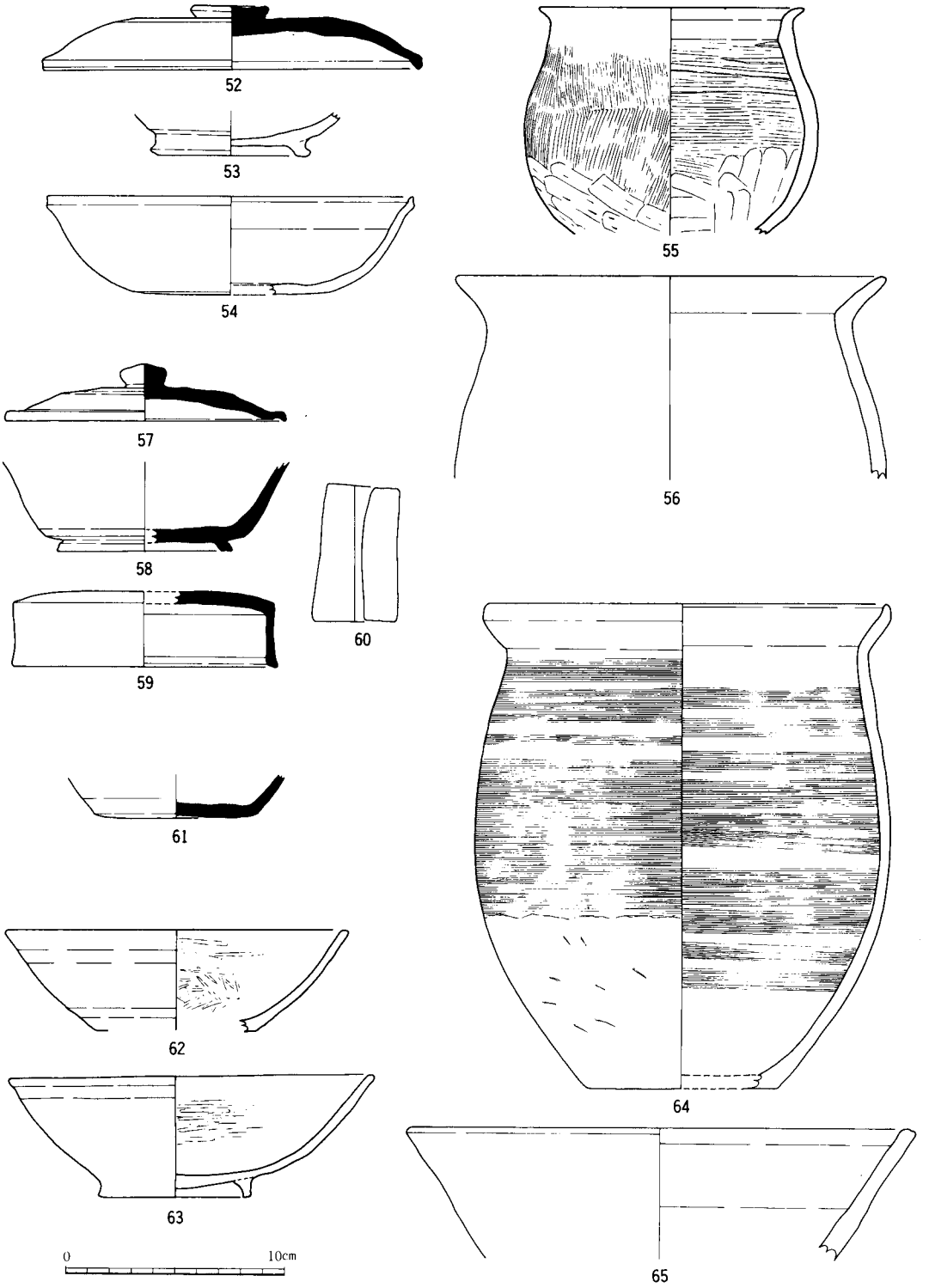
第31図　掘立柱建物出土遺物実測図（1　2号建物、2　3号建物、
4　7号建物、5　9号建物、6　10号建物、7～18　12号建物）



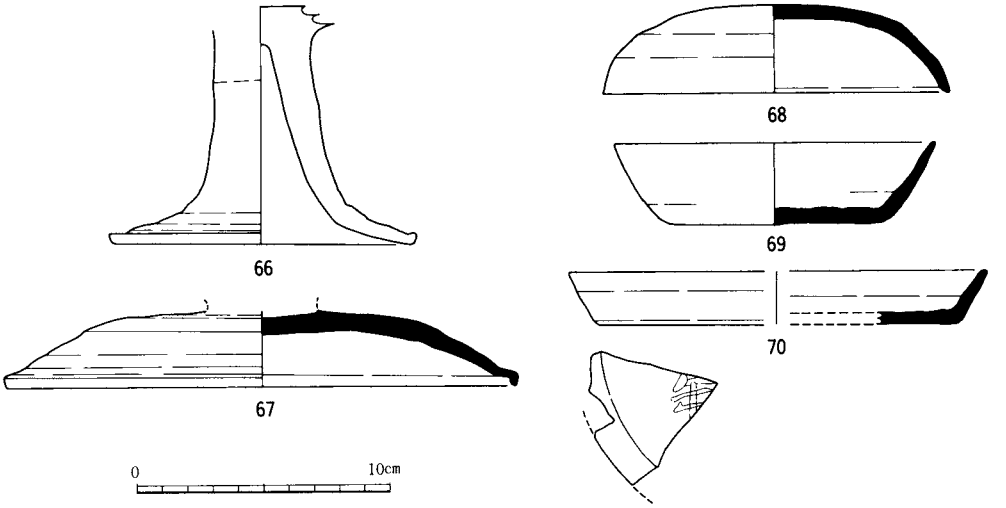
第32図　掘立柱建物出土遺物実測図（19～24　16号建物、25・26　17号建物、27・28　19号建物、29・30　18号建物、31～34　20号建物）



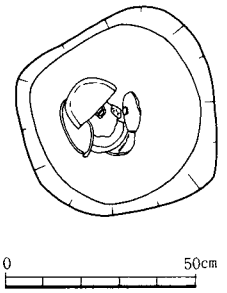
第33図　掘立柱建物出土遺物実測図（35　20号建物、36～39　21号建物、40～45　22号建物、46～49　24号建物、50・51　28号建物）



第34図　掘立柱建物出土遺物実測図（52～56　26号建物、57～60　27号建物、61　29号建物、62～65　柱穴出土品）



第35図　掘立柱建物出土遺物実測図（60～67　柱穴出土品）



第36図　12号掘立柱建物（Ｐ431）遺物出土状態

第2節　土　　坑

1号土坑

F－3区の円筒形井戸状遺構。検出面で径140～150cm、中位で径100cm、深さ110cm。水溜部は径約60cm、深さ20cm。埋め戻しを受けており（Ⅳ～Ⅵ層）、最下層のⅥb層上位から土師質小皿・皿が出土している。

本遺構の出土遺物は I_2期～Ⅲ期（吉岡1983）の土器多数を含むが、帰属時期を示す遺物は、埋め戻しに伴い投棄されたとみられる、最下層から出土した非ロクロの土師質小皿等である。9は口径 7.2cm、器高 1.3cm。胎土はM砂1、海綿の骨片S1。色調は淡黄褐色。10は口径 7.2cm、器高 1.2cm。胎土はM砂2。色調は橙白色。11は口径 7.8cm、器高 1.6cm。胎土は9と同じ、海綿の骨片S2。色調は暗黄褐色。ほかに径12～13cmの皿（胎土S砂0、淡橙褐色）もある。時期はⅩ期（田嶋1986）、13世紀初め頃とみられる。

2号土坑

C－7区。220×85～100cmの長方形、深さ5cm。埋土は淡褐色土で灰色粘土ブロックを若干含む。検出面では多量の灰色粘土が観察された。出土土器は土師器細片が僅かにあるに過ぎない。時期は特定できないが平安末から中世初か。

3号土坑

C－9区の円筒形井戸状遺構。検出面で径150～160cm、中位で径135cm、深さ150cm。水溜とみられる部分は深さ約20cm。埋め戻しを受けており（Ⅲ～Ⅶ層）、Ⅳ層中位より土師器椀（12）が出土している。Ⅱb層中央下位には厚さ約4cmの焼土面および多量の炭化物が認められた。

12は口径15.0cm、器高4.8cm、底径8.6cm。胎土は円～亜角のL・M砂2、にぶい赤褐色粒L～S4。色調は淡橙褐色。13は台径 5.8cm、外底回転糸切り。胎土・色調とも12と同じ。14は白磁皿で底径 7.4cm. 外面の釉は体部下位には及ばない。釉調は透明感があり、素地の色調は灰色～白色。本土坑の時期はⅨ期（田嶋1986）、12世紀後半。1号棟ないしは2号棟の付属施設とみられる。

4号土坑

E－6区。規模不明。遺物少なく時期の特定できず。

5号土坑

C・B－12区。14号棟に西接する。約290×300cmの不整隅円方形、深さ10cm。土器の出土状況では、須恵器杯BⅡと蓋のセットが3組正立した状態で出土した点が注目される。

出土遺物は須恵器蓋5、杯BⅡ4、杯A1、盤A1、土師器甕2などがある。15は口径10.7cm、器高 2.3cm。胎土はA－3。色調は暗灰色。完形。16は口径11.7cm、器高 2.9cm。胎土はA－1。色調は淡灰色。完形。17は口径12.0cm、器高 3.0cm。胎土はA－3。色調は暗灰色。口縁部が僅かに欠ける。18は口径12.0cm、器高 2.8cm。胎土はA－3。色調は暗灰色。完形。19は口径13.0cm、器高 3.1cm。胎土はA－3。色調は暗灰色。完形。蓋は何れも天井部外面はロクロケズリ。20は口径10.8cm、器高 4.2cm、底径 8.6cm、高台径 7.9cm。胎土はA－B。色調は暗灰色。完形。

21は口径11.2cm、器高 4.1cm、底径 9.0cm、高台径 8.4cm。胎土はA－3。色調は暗灰色。完形。22は口径11.7cm、器高 4.1cm、底径 9.4cm、高台径 8.4cm。胎土はA－3。色調は暗灰色。完形。23は口径10.9cm、器高 4.1cm、底径 8.8cm、高台径 8.1cm。胎土はA－3。色調は暗灰色。完形。なお、この杯には図示してないが、口径12.9cmのセットになる蓋がある。24は口径12.6cm、器高3.8cm、底径8.8cm。胎土はA－1。色調は灰色。内底やや滑。25は検出面で出土したもので、口径17.8cm、器高 2.1cm、底径15.8cm。26は口径14.4cm。内外ともロクロナデ。胎土はL・M砂2(S5)。色調は淡褐色～黄灰色。¼残。27は口径23.3cm。体部内外ともカキメ。胎土はM砂2。色調は淡橙灰色。小片。時期はII_1期(吉岡1983)。

本土坑のセットで出土した杯類は生産と供給・消費の問題を考える上で重要な資料を提供している。17～23(および23とセットの蓋)は、色調・胎土・焼成・作りとも共通しており、肉眼観察の限りでは同時期に生産された可能性がかなり高いとみられる。19の蓋は22の杯の上で逆位で重ね焼きしていることが、溶着部の接合から確認され(他のセットでも可能性のあるものを含む)、出土状態を使用時の状況を反映したものとすれば、消費の場でもそのままセットとして使われたといえる。但し、23とセットであったとみられる蓋は杯に比して口径が大きくセットで焼かれた可能性は少ない。18と19の蓋の天井部内面には橙褐色の顔料?および淡褐色の付着物がある。23の杯体部とそのセットの蓋の内面には(杯の口縁に合わせて)暗褐色の付着物がある(写真参照)。

生産と供給の関係は依然として不明な点が多いが、本土坑の資料からは、生産の場でのセットがそのまま集落に持ち込まれ、消費の場でもそれを踏襲することが基本であったと言えよう。今後各集落遺跡での検討が必要となろう。

8号土坑

D－13区付近。310×340cmの不整形、深さ30cm。規模は5号土坑に類似し、16号棟に東接する。

出土遺物は須恵器では、端部に折り返しのない蓋(口径12.3cm、器高 2.8cm、胎土A－1、灰色、⅖欠)、通常の蓋(口径17.0cm)、長頸瓶(肩部完形)などがある。土師器は甕が4個体以上ある。28は口径25.4cm。内外とも細かいハケ。⅕以上残。32が底部、外面赤化。胎土は亜円～亜角のM砂4～5、風化した赤褐色砂粒4。色調は淡黄褐色～黄灰色。29は口径21.3cm。内外とも細かいハケ。⅓以上残。31が底部。胎土は亜円～亜角のL～S砂3、赤褐色粒MS2。色調は暗黄褐色～褐色。33の底部は32と調整、胎土、色調が類似する。30は口径20.6cm。内外ともヨコ(ロクロ)ナデ。⅙残。34が底部。平底で外底回転糸切り、赤化。胎土は亜角～亜円のM砂3。色調は淡黄橙色。時期はII_1期(吉岡1983)。

9号土坑

D－11区。260×190cmの隅円長方形、深さ130cm。地下式横穴状遺構。肥前系の陶磁器類3点、凸面施釉の丸瓦1点が出土している。35は口径23.0cm。内面及び体部外面は褐釉で、外底は釉を掻き取る。胎土は橙灰白色。時期は近世から近代。

10号土坑

E－11区。9号土坑に類似した地下式横穴状遺構。規模は不明。深さ約100cm。

103は染付で、口縁下に雷文のくずれた文様がはいる。時期は近世から近代。

11号土坑

B・C－15区。15号棟の北に近接する。270×170cmの不整形。土坑２基の可能性あり。埋土は暗茶褐色土の単層で、南東隅では焼土が検出された。遺物は北西部に偏在し（36のみ離れる）、ほとんどが検出面で出土した。須恵器蓋２、杯ＢⅠ・杯ＢⅡ各１、杯Ａ２、盤Ａ１、赤彩土師器椀１、土師器甕３がある。

36は口径12.5cm、器高 1.9cm。外天ロクロケズリ、内天中央ナデ。口縁端部がやや欠けるのみ。37は口径17.6cm、器高 3.7cm。口縁端僅かに欠。38は口径 9.8cm、器高 3.6cm、底径 8.0cm、高台径 7.5cm。内底中央ナデ。⅓欠。39は口径16.3cm、器高 6.6cm、底径12.8cm、高台径12.0cm。内底中央ナデ。口縁部僅かに欠。40は口径12.3cm、器高 3.2cm、底径 9.7cm。口縁端2ヶ所に(対)タール状の付着物。口縁部僅かに欠。41は口径11.8cm、器高 2.9cm、底径 8.5cm。⅕欠。42は口径17.6cm、器高 2.1cm、底径15.9cm。口縁部僅かに欠。胎土は総てＡ－１。色調は36、38、41が灰色。39は暗灰～黒灰白色。39は暗灰～黒灰色。43は口径17.2cm、器高 3.2cm、底径 6.1cm。摩耗調整不明。胎土はＭ砂０、Ｓ～ＳＳ砂４。自形のカクセン石Ｓ２。砂粒の混和はない。色調は淡橙灰色。44は口径14.5cm、器高(15.0)cm、胴部最大径15.4cm、底径 9.5cm。口縁から体部内外ともハケ。外底赤化。色調は外底・内底～体下が黄灰色、他は暗褐色。¾以上残。45は口径14.3cm、器高13.0cm、胴部最大径14.0cm。内外ともハケ。口縁部は僅かにヨコナデ。外底赤化。色調は橙褐色。ほぼ完。46は口縁部に面を持ち先端をつまみ上げる。口径17.2cm。口縁から頸部内外ともヨコナデ、肩部内外ともヨコハケ。色調は橙褐色。⅙残。胎土は44、46が亜円のＭ、Ｌ砂４。46は赤褐色粒Ｍ、Ｓ３。45はＬ、Ｍ砂１、Ｓ砂４～５(混和したものかは不明)。時期はII_1期(吉岡1983)。

12号土坑

Ｂ－15区。　15号棟の北に位置する。平面形は検出面で140×110cmの楕円形。深さは15cmで浅い皿形を呈する。埋土は暗茶褐色土の単一層で炭化物を少量含み、下位には地山質土を多く含む。遺物は遺構検出面のレベルで須恵器大形破片がまとまって出土している。出土土器の器種及び個体数は蓋２、杯ＢⅡ（有台杯小）４、杯ＢⅠ（有台杯大）２、杯Ａ（無台杯）１、盤Ａ２、盤Ｂ１である。組成は須恵器供膳器のみで土師器は細片が僅かに混じるに過ぎない。

47は口径12.2cm、器高 3.0cm。天井部外面ロクロケズリ。ほぼ完。48は端部に折り返しのない蓋で、口径11.4cm、器高 2.6cm。天井部外面ロクロケズリ。完形。49は口径10.6cm、器高4.2cm、底径8.8cm、高台径8.3cm。½欠。50は口径10.8cm、器高4.4cm底径8.0cm、高台径 7.0cm。外底(２重）及び底体部境に爪状圧痕が巡る。口縁部⅙欠。51は口径11.9cm、器高4.5cm、底径7.9cm、高台径 6.8cm。口縁から底部¼欠。52は口径10.6cm、器高4.3cm、底径7.9cm、高台径 6.8cm。外底及び底体部境に爪状圧痕が巡る。⅗欠。53は口径（14.8）cm、器高10.9cm。口縁部外反。外底ロクロナデ、内底中央ナデ。口縁から体部½欠。55は口径12.6cm、器高 3.2cm、底径 9.0cm。ほぼ完。56は口径15.8cm、器高 2.9cm、底径13.7cm。内底滑。⅕残。57は口径16.1cm、器高 2.4cm、底径15.0cm。体部は短く外反して立つ。外底に墨書あるが判読不可、「年」か。ほぼ完。58は口径18.4cm、器高 3.9cm、底径15.0cm、高台径13.2cm。底体部の境が明瞭で体部は内湾。内底全面

ナデ、やや滑。

本土坑出土須恵器の胎土は以下のとおり。A－1…48、50、51，52、55、56、57。色調は灰色、57は黄灰白色。A－2…53、54、58。色調は54が淡青灰色、53、58が暗灰色。A－3…47、49。色調は暗灰色。47の蓋と49と杯BIIは共通して特徴的な胎土・焼き・色調を示しており（5号土坑の杯類と同じもの）、セットとして生産・供給・消費がなされたと考えられる。蓋がほぼ完形であるのは、杯の破損に際してセットという点から共に廃棄されたと推測される。出土土器の時期は、総体的にはII_1期～II_2期（吉岡1983）の過渡的様相を持つ。50～52、55、56はII_2期的なものと考えられる。

13号土坑

C－17区。205×90cmの長方形、深さ10cm。18号溝より新。時期不明。

14号土坑

E・F－16区。230×160cmの隅円長方形、深さ15cm。出土遺物は須恵器小片が僅か。時期の特定不能、奈良・平安期。

15号土坑

F－19区。130×110cmの不整円形、深さ15cm。上位より須恵器杯A 2点が出土している。59は口径14.8cm、器高 3.5cm、底径10.7cm。内底¾ナデ。½欠。60は口径13.2cm、器高 2.9cm、底径10.3cm。内底中央ナデ。口縁部⅙欠。胎土は共にA－1、色調は灰色。時期はII_1期(吉岡1983)。

16号土坑

B－20区。1号溝に切られる。90×？、深さ6cm。出土遺物は須恵器・土師器小片若干。時期の特定不能、奈良・平安期。

17号土坑

C－22区。150×75cm、深さ55cmの長方形箱形。15～30cmの角礫4個が出土。出土土器は奈良から平安の須恵器・土師器小片多数と中世陶器（越前）の小片1点がある。時期は特定しがたい。

18号土坑

D－22区。170(150)×85cm、深さ75cmの長方形箱形。15～30cmの角礫10個が出土。8個は南側底近くに集中し、北側の2個は上位にあった。土器は須恵・土師小片若干と白磁片1点、近世とみられる？陶器片1点がある。時期は特定しがたい。本土坑は17号土坑と並列し、1a号溝(堀)の掘り残し部分（館への入り口）に対応するように位置している。礫を根がためとした門柱穴の可能性が考えられる。

19号土坑

F－22区の井戸状遺構。上面は215×185cmの不整円形。深さは 115cm。底は青白色粘土を掘り抜かない。底より50～60cmの高さまで150×120cmの範囲に径5cm前後の円礫を井戸側の裏込めとしてつめている。底面にも同様の円礫を敷き詰める。縦板組みの構造で8～9枚の板材を使用したとみられ、5枚の断片が残存した。埋土のⅥa層下位中央から須恵器杯A(63）と赤彩土師器椀（64）が重なって出土した。

61は口径16.1cm、器高 3.5cm。扁平鈕。外天ロクロケズリ、内天中央ナデ。ヘラ記号「×」。

胎土はA－1。色調は灰色。口縁3/5欠。62は底径11.8cm、高台径 9.4cm。内底中央ナデ。胎土はA－1。色調は黒灰色（断面紫灰色）。1/4残。63は口径(12.1)cm、器高(3.4)cm、底径8.7cm。胎土はA－1。色調は灰白色。体部1/4欠。

64は赤彩土師器椀で口径12.1cm、器高 3.3cm、底径 7.4cm。外底～体部下位ロクロケズリ、内底ナデ。胎土はS砂1～2で砂粒の混和はない。水簸された可能性がある。色調は灰白色。完形。65は赤彩土師器杯（皿）で本土坑掘方部と一部20号土坑から出土している。口径15.1cm、器高2.5cm、底径10.0cm。外底ロクロケズリ、内底ナデ。体部内面斜放射暗文、内底ラセン暗文。胎土はS砂1で砂粒の混和はない。水簸か。色調は灰白色。1/3残。66は口径19.3cm。口縁端部は丸みを帯びた面を持ち、先端は丸く内上方に伸びる。内外ともロクロナデ。円～亜円のL・M砂2、風化した白色棒状の海綿の骨片2点、赤褐色粒S・M4。色調は淡橙褐色。1/4残。時期は61がI_1期（吉岡1983）、62・65がI_2期(同)。63・64がII_1期(同)で本土坑の廃絶時期を示すとみられる。

20号土坑

F－23区。140～130cmの不整円形、深さ20cm。出土遺物は19号土坑65の小片のみで、時期は特定しがたい。

21号土坑

F－24区。径120cmの略円形、深さ70cmの円筒状。出土土器は須恵器・土師器小片が一定量あるが、時期の特定はできない。平安中期以降か。

22号土坑

C－22区。150×120の不整楕円形、深さ10cm。浅い皿形で遺物はほとんどが検出面で出土している。67は口径15.0cm、器高 2.5cm、底径13.3cm。胎土はM・S砂をほとんど含まず水簸した可能性がある。色調は灰、茶灰色。内外に火だすき跡。1/4残。ほかに口径約30cmの土師器鍋がある。口縁端部は面を持ち先端は上方につまみ出す。外面ロクロナデ、体部内面細かいタテハケ。胎土は亜円から亜角のM砂4。色調は橙灰白色。時期はII_1期（吉岡1983）。

23号土坑

D－21区。1a溝に切られる。幅50cm、深さ25cm。出土遺物無し。

24号土坑

C－23区。130×115cmの楕円形、深さ30cm。68は口径13.8cm、器高 2.9cm、底径10.9cm。胎土はA－1。色調は灰色。1/3残。ほかに土師器甕底部片（丸底で外面体部下位から底部にかけてケズリ、内面粗いハケ）、同体部片（内外ともタタキ）などがある。68の時期はII_1期(吉岡1983)。ただタタキの甕は時期を特定できず本土坑の時期についても若干の保留部分を残す。

25号土坑

C－23・24区。110×65cmの隅円長方形、深さ15cm。出土遺物は須恵器・土師器・赤彩土師器の小片若干量で時期の特定はできない。

26号土坑

B－23・24区の井戸状遺構。検出面は径約 230cmの円形。深さは 125cm。掘り方の断面は逆台形状で、底は径60cm。土器はIII層を中心に多量出土している。

69は法量不明。天井部外面粘土紐のつなぎめ明瞭。胎土はA－1。色調は灰色。¼残。70は口径13.5cm、器高 4.6cm、底径 9.7cm、高台径 8.0cm。胎土はA－3。色調は暗灰～黒灰。⅓残。71は底径12.1cm、高台径11.3cm。胎土はA－1。色調は灰色。⅔残。72は口径15.4cm、器高 2.0cm、底径11.8cm。内底中央ナデ。胎土はA－1。色調は灰色。⅔残。73は高台径(6.0)cm。 外底ロクロナデ。内底滑。胎土はA－3。色調は灰色。口縁部は全欠。74は高台径 7.0cm。外底ロクロケズり。内底やや滑。胎土はA－1。色調は灰色。½残。75は頸部径 5.0cm。胎土は砂粒を含まない。色調は灰色。⅔残。76は胴部最大径17.0cm。上から穿孔した幅1～1.5cm、長6～7cmの耳（把手）を2個以上持つ。胎土はA－3。色調は茶灰色。⅓残。77は三角形状の把手(鉢・盤)。胎土はA－1。色調は灰色。

78は口径13.6cm、器高4.2cm、底底6.4cm。色調は灰白色。口縁一部を欠く。79は口径12.6cm、器高3.7cm、底径5.6cm。色調は灰白色。口縁一部を欠く。80は口径13.3cm、器高3.9cm、底径5.7cm。色調は淡褐色。⅔残。81は口径（13.2）cm、器高（3.6）cm、底径5.3cm。色調は橙灰色。⅔残。82は口径9.0cm、器高2.6cm、底径 5.8cm。外底静止糸切り？。色調は灰白色。体部外面の一部に橙色に発色。口縁部½欠。83～85は摩耗のため底部調整不明。83は高台径 7.0cm。色調は灰白～暗褐色。体部欠。84は高台径 7.7cm。色調は淡橙褐色。体部欠。85は高台径 7.7cm。色調は淡黄橙色。体部欠。86は赤彩土師高杯。内面も中位まで赤彩。色調は灰白色。½残。87・88は甕底部。87は底径7.7cm。内底ロクロナデ、外底回転糸切り。色調は淡黄橙色。88は底径9.5cm。内面に焦げ付きあり。色調は褐色。⅕残。土師器の胎土はほとんどが類似する。角～亜角の長石・石英を主体にしたS砂・SS砂が4～5含む。81は砂粒が少ない。87は亜角～亜円のM砂2含む。概して須恵器の胎土と共通する。土坑の廃絶時期は、Ⅲ層からまとまって出土したほぼ完形の土師器供膳器からⅤ$_3$～Ⅵ$_1$期（田嶋1986）、11世紀初め前後とみられる。須恵器はⅠ$_2$期～Ⅴ期までのものを含む。鉄器1点あり。

27号土坑

D－25杭付近の井戸状遺構。径160cmの円形、深さ120cm。底径は60cm。89は白磁皿で底径 3.8cm。釉は黄オリーブ色で、体部外面下位以下はつかない。95～99は加賀大甕肩部から体部片で同一個体とみられる。肩部には押印がある。胎土はM～Lの長石・石英4。径5㎜に達するような大粒の長石もかなり含み、混和材として岩石を破砕したものを用いた可能性がある。色調は灰色～暗灰色。100は加賀で外表面は茶褐色、内表面は茶オリーブ色（断面灰色)。押印がある。胎土はL・M砂3。長石粒は融けて吹き出す。101は珠洲。外面はタタキ(間3㎜）。内外とも灰色で断面は淡灰色（縞状）。胎土はSS砂5で砂粒は混和しない。黒色粒（カクセン石か）S5融けて吹き出す。海綿の骨片M2。 102は珠洲大甕肩部片。瓦質。色調は灰色。胎土はS砂1で砂粒は混和しない。海綿の骨片M・S3。珠洲はほかにすり鉢体部下位の破片（海綿の骨片M・S5）がある。土師器は底部回転糸切りの椀がある。時期はⅨ～Ⅹ期（田嶋1986）、12世紀後半～末。

28号土坑

B－25区。 140×85cmの楕円形、深さ5cm。奈良時代に属する須恵器片2点が出土しているが遺物量が少なく時期の特定はできない。

32号土坑

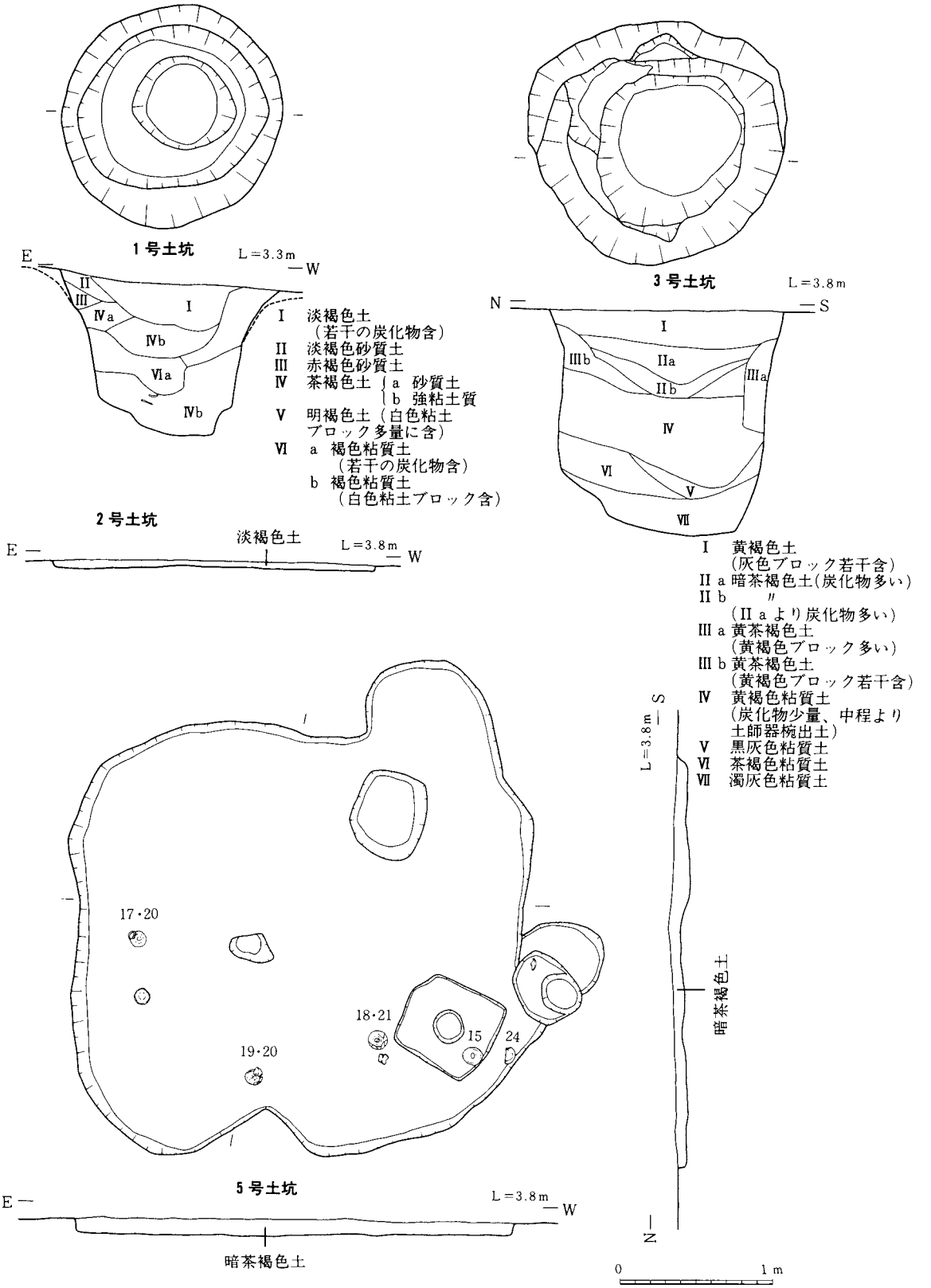
Ｅ－22区。110×100cmの不整楕円形、深さ15cm。90は口径15.4cm、器高 3.6cm、底径13.0cm、高台径12.1cm。外底ロクロナデ（中央除く）。墨書判読不可。胎土はＡ－１。色調は淡灰～灰色。½残。91は長頸瓶で肩部径20.0cm、頸部径 8.4cm、高台径13.2cm。外底ロクロナデ、ナデ。高台基部の透かし穴４箇所。胎土はＡ－１（３）。色調は黒灰～灰色。体部ほぼ完。92は把手。胎土は亜角～亜円のＭ砂５。色調は橙灰色。時期はI_2期（吉岡1983）。

34号土坑

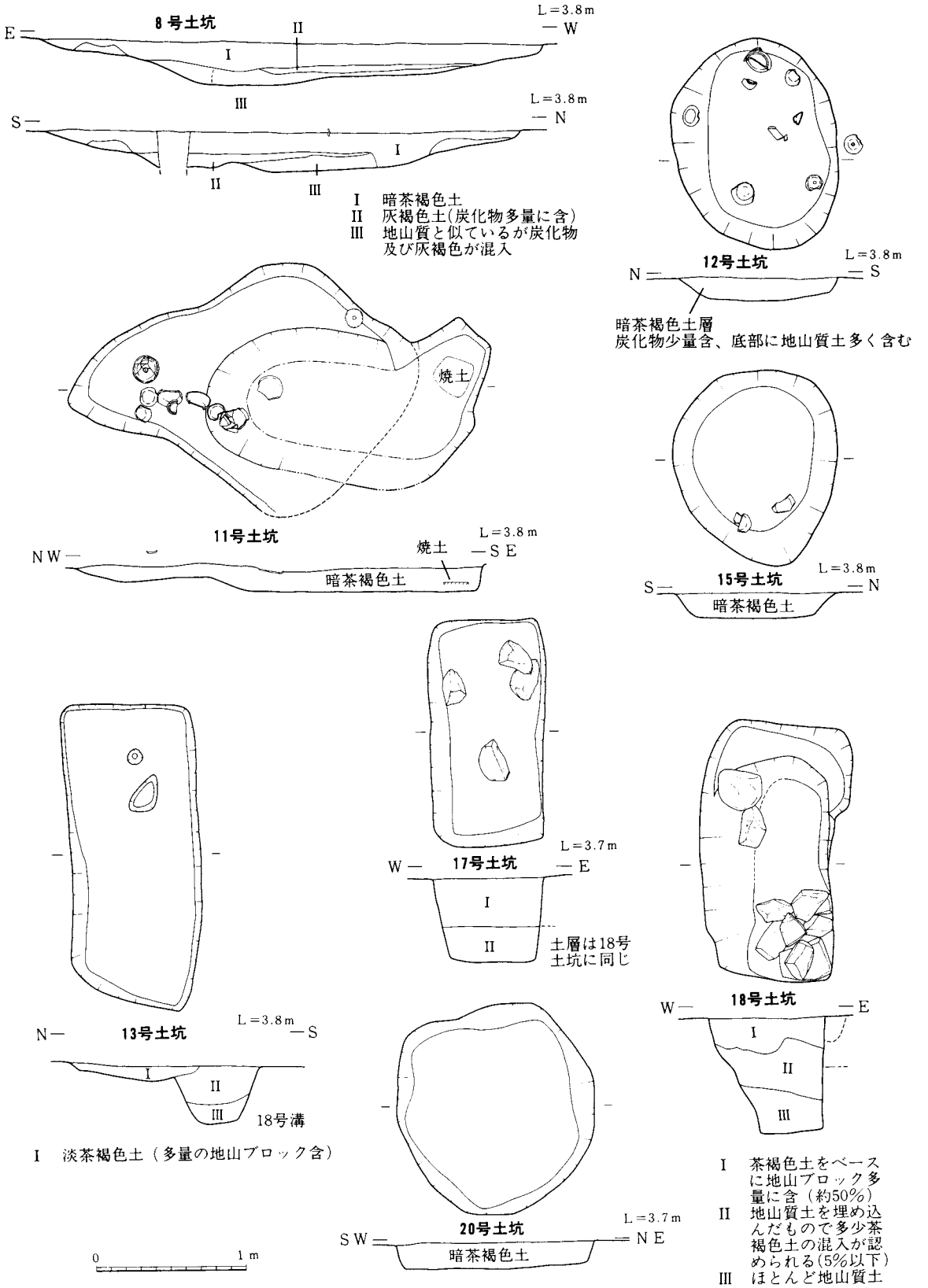
Ｃ－31区の井戸状遺構。径約150cmの円形、深さ165cm。93は須恵器椀。高台径 5.5cm。胎土はＡ－１。色調は灰白色。94はⅣ層出土。白磁口禿げ皿で底径 4.9cm。釉は全面にかかる。ほかに中世陶器片（加賀）若干がある。時期は13～14世紀頃。

註

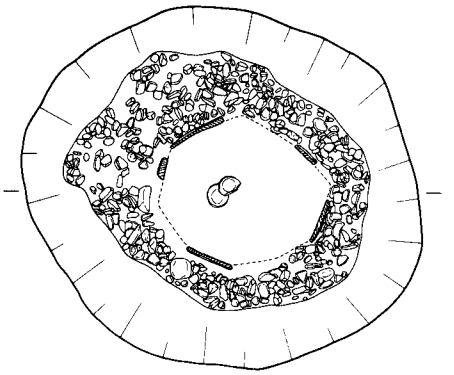
土坑出土遺物の観察、表記方法は『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987 に準ずる。須恵器の胎土の特徴は以下のとおりである。Ａ群……素地に角のＳ砂（石英・長石・カクセン石等、）を４～５含む。Ａ－１：砂粒は比較的細かくやや風化したものがある。堅固な焼きのものには黒色粒が融けて吹き出すものが多い。Ａ－２：Ａ－１に近いがＬ・Ｍ砂を１～２含む。Ａ－３：砂粒は角で径はＳでもＡ－１より大きくＭに近い。量は５。長石が特に目だつ。Ａ群は、県内では南加賀古窯跡群産の土器の胎土に近いが、福井県東部坂井郡周辺のものも肉眼観察では現在の所判別しかねるので保留しておきたい。

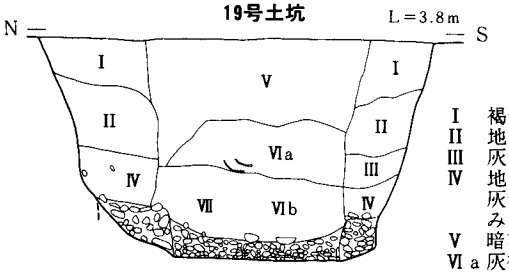

1号土坑
L=3.3m
E
W
II
III
IVa
I
IVb
VIa
IVb
I 淡褐色土
(若干の炭化物含)
II 淡褐色砂質土
III 赤褐色砂質土
IV 茶褐色土 a 砂質土
b 強粘土質
V 明褐色土(白色粘土
ブロック多量に含)
VI a 褐色粘質土
(若干の炭化物含)
b 褐色粘質土
(白色粘土ブロック含)
2号土坑
淡褐色土
L=3.8m
E
W
3号土坑
L=3.8m
N
S
I
IIIb
IIa
IIb
IIIa
IV
VI
V
VII
I 黄褐色土
(灰色ブロック若干含)
II a 暗茶褐色土(炭化物多い)
II b 〃
(II a より炭化物多い)
III a 黄茶褐色土
(黄褐色ブロック多い)
III b 黄茶褐色土
(黄褐色ブロック若干含)
IV 黄褐色粘質土
(炭化物少量、中程より
土師器椀出土)
V 黒灰色粘質土
VI 茶褐色粘質土
VII 濁灰色粘質土
17・20
18・21
19・20
15
24
5号土坑
L=3.8m
E
W
暗茶褐色土
S
L=3.8m
暗茶褐色土
N
0
1m

第37図　土坑実測図(1)

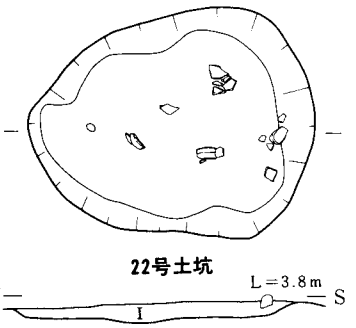

8号土坑
E
W
L=3.8m
I
II
III
S
N
L=3.8m
I
II
III
I 暗茶褐色土
II 灰褐色土(炭化物多量に含)
III 地山質と似ているが炭化物及び灰褐色が混入
12号土坑
N
S
L=3.8m
暗茶褐色土層
炭化物少量含、底部に地山質土多く含む
焼土
11号土坑
NW
SE
L=3.8m
焼土
暗茶褐色土
15号土坑
S
N
L=3.8m
暗茶褐色土
17号土坑
W
E
L=3.7m
I
II
土層は18号土坑に同じ
13号土坑
N
S
L=3.8m
I
II
III
18号溝
I 淡茶褐色土（多量の地山ブロック含）
18号土坑
W
E
I
II
III
I 茶褐色土をベースに地山ブロック多量に含（約50%）
II 地山質土を埋め込んだもので多少茶褐色土の混入が認められる(5%以下)
III ほとんど地山質土
20号土坑
SW
NE
L=3.7m
暗茶褐色土
0
1m

第38図　土坑実測図(2)

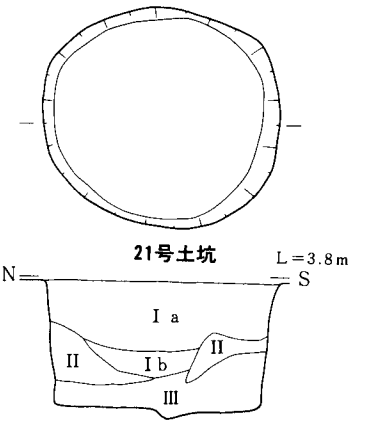




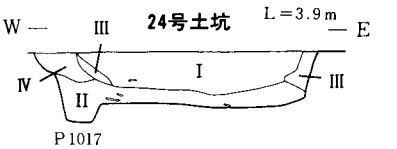
I　褐色土層
II　地山質土（黄褐色）
III　灰色粘質土
IV　地山質土(黄褐色)に灰色粘質土を若干含みレキも含む
V　暗茶褐色土
VI a 灰褐色粘質土
VI b　〃
レキを含み粘性は a より強い
VII　暗黄褐色土層
レキを敷きつめている



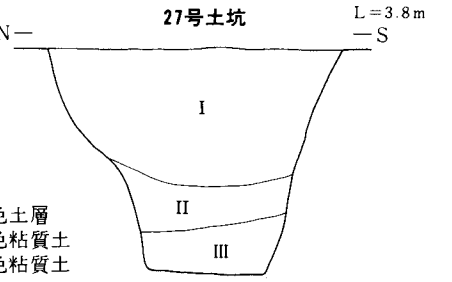
I 黒灰色土（炭化物と焼土含む）



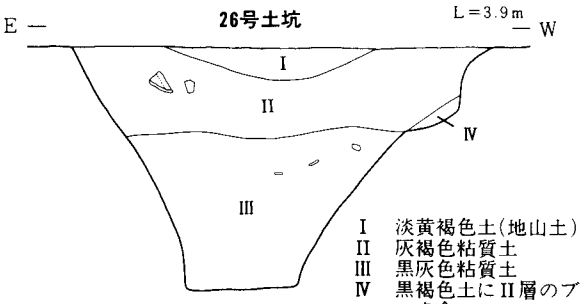
I a 暗茶褐色土(地山ブロック若干含)
I b　〃　(灰色土ブロック含)
II　濁黄褐色粘質土
III　暗茶褐色砂質土(灰色土ブロック含)



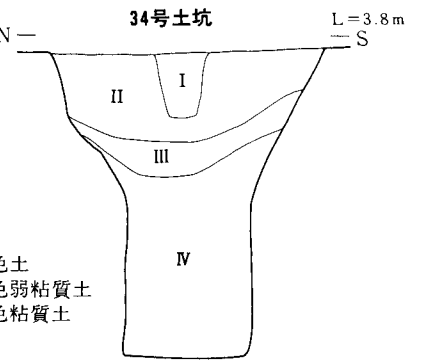
I　暗灰色褐色土
II　暗茶灰色土
III　I層とII層の混じったもの
IV　黄色ブロック



I　暗茶褐色土層
II　黄茶褐色粘質土
III　暗灰褐色粘質土

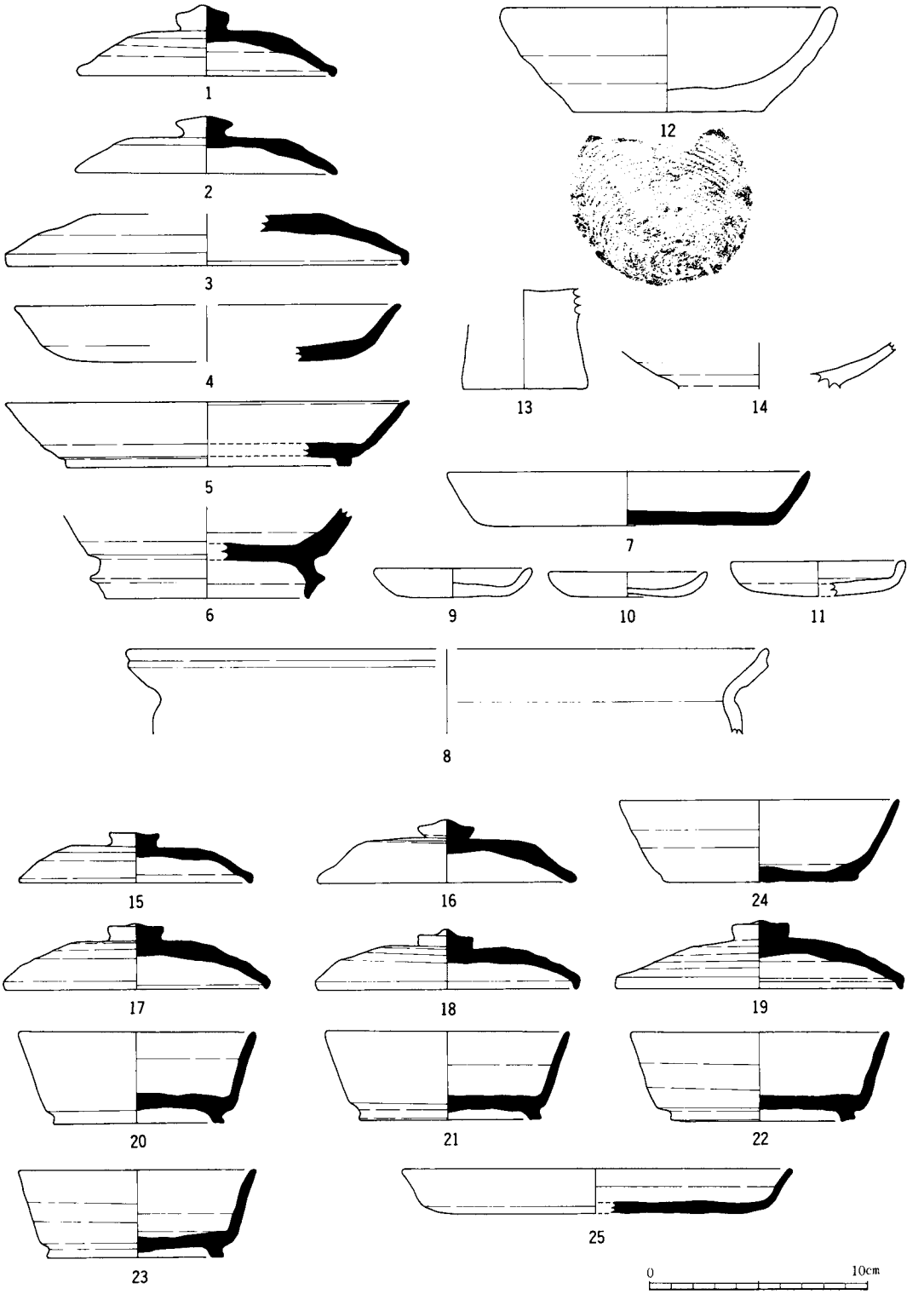


I　淡黄褐色土(地山土)
II　灰褐色粘質土
III　黒灰色粘質土
IV　黒褐色土にII層のブロック含

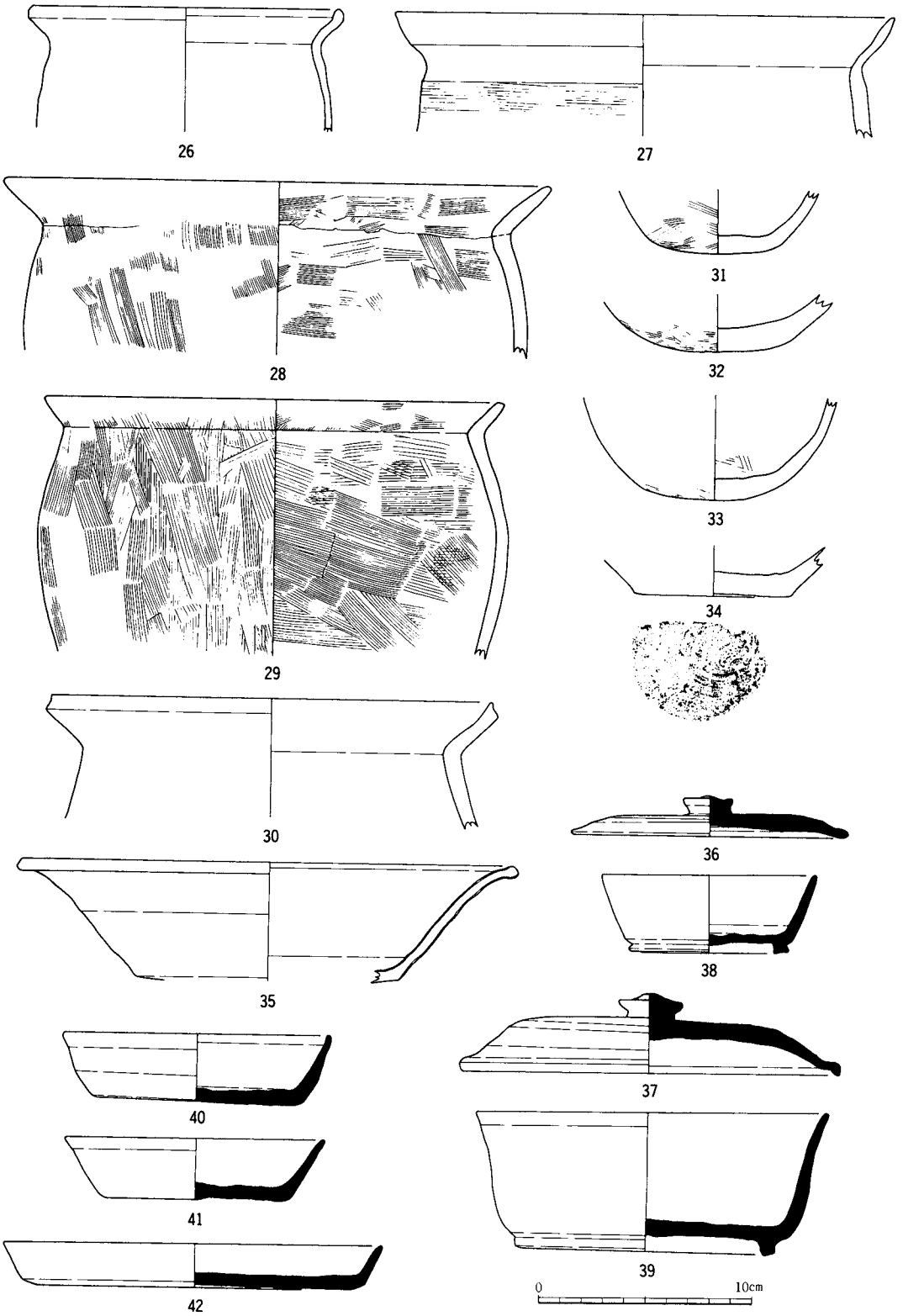


I　暗渠
II　茶灰色土
III　淡灰色弱粘質土
IV　暗灰色粘質土

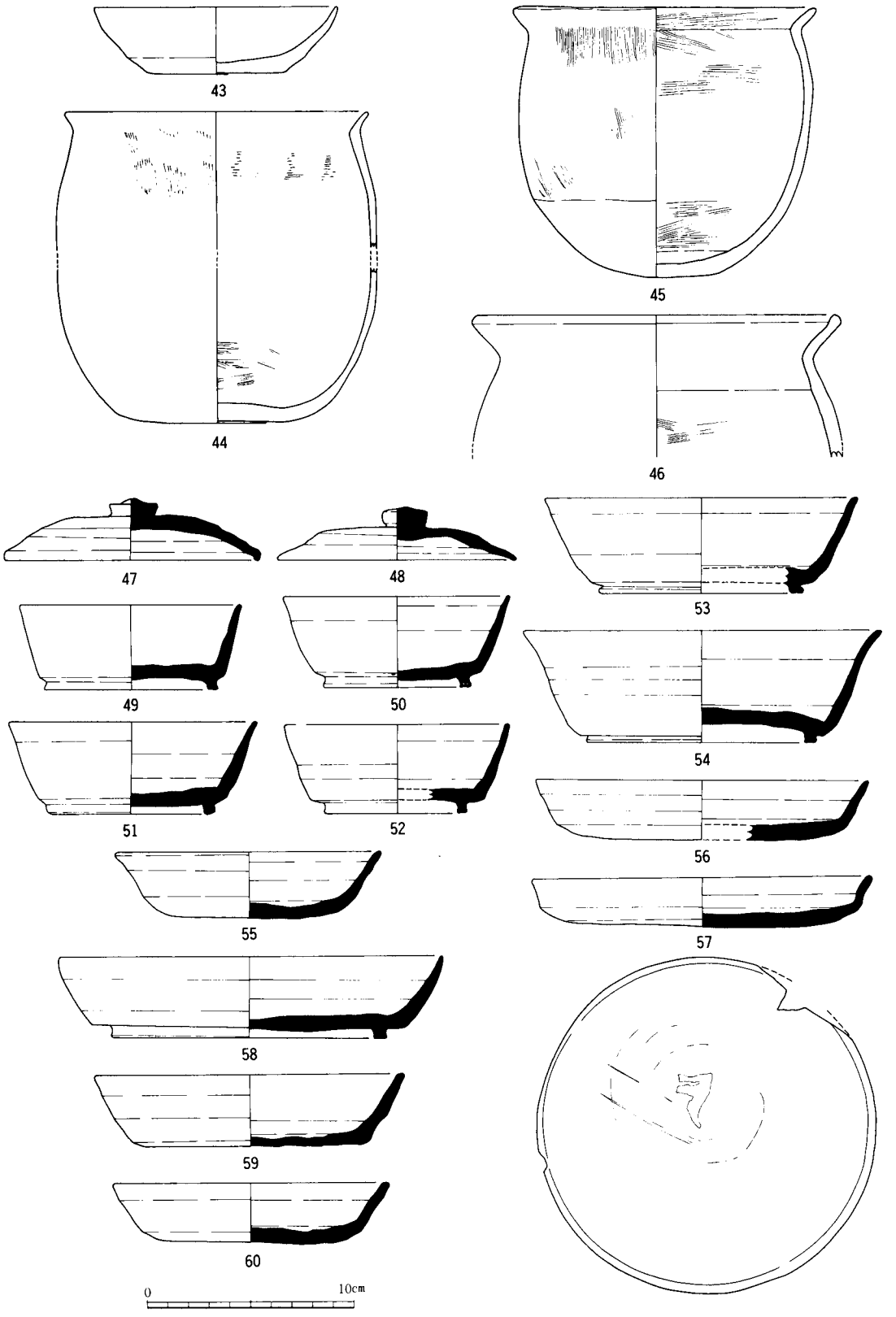
第39図　土坑実測図(3)



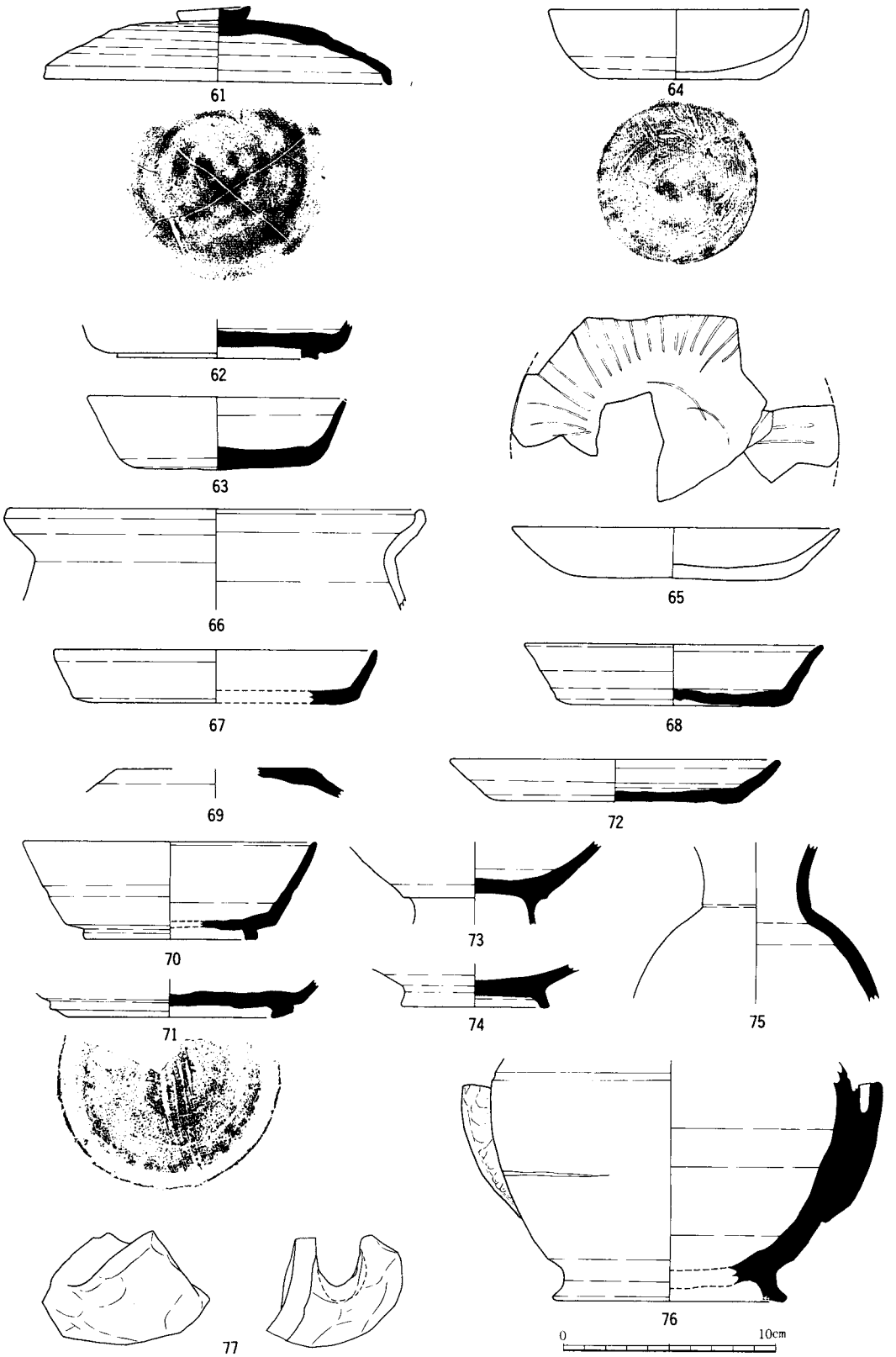
第40図　土坑出土土器(1)　1号土坑（1～11）、3号土坑（12～14）、
5号土坑（15～25）



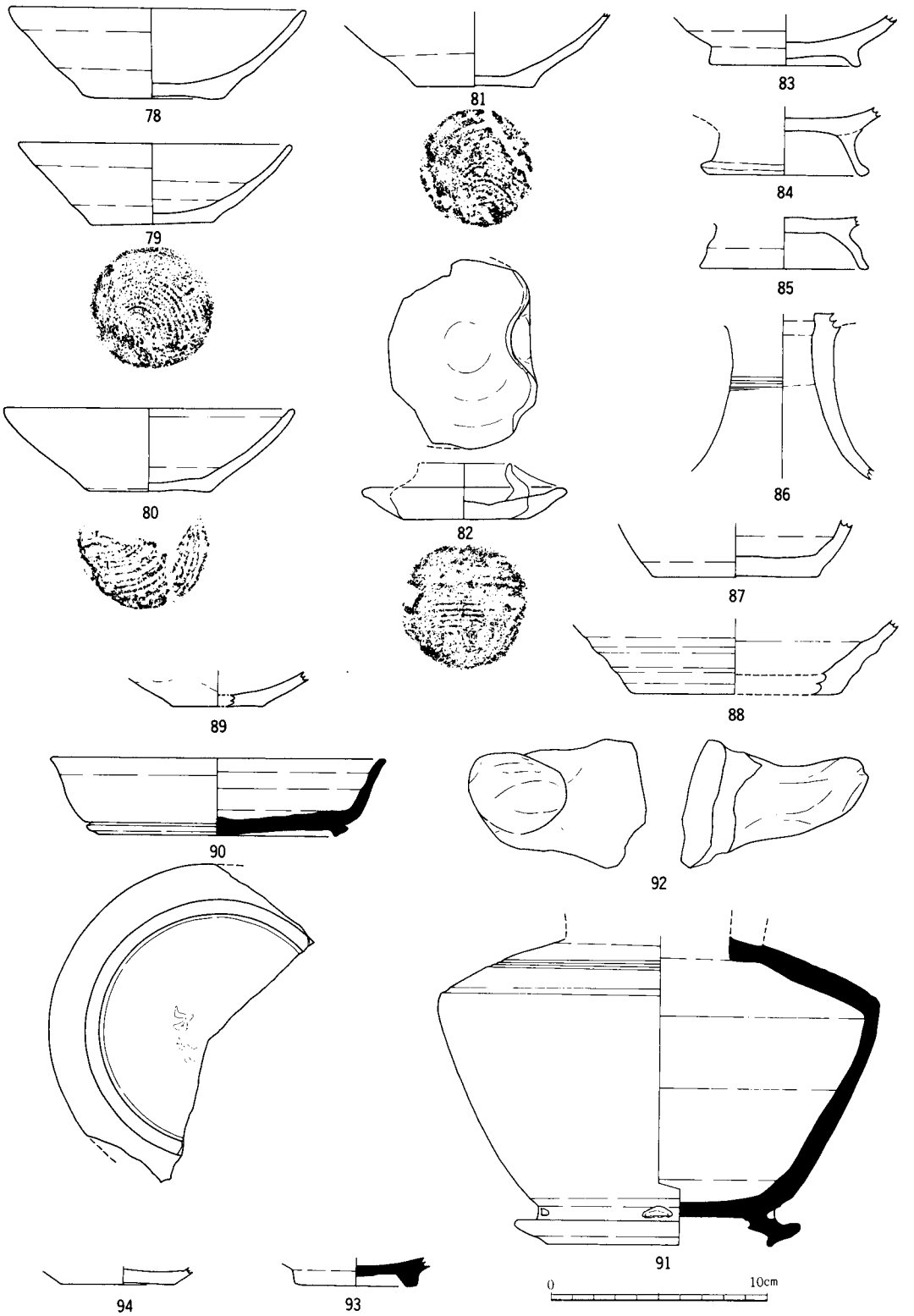
第41図　土坑出土土器(2)　5号土坑（26・27）、8号土坑（28～34）、
9号土坑（35）、11号土坑（36～42）



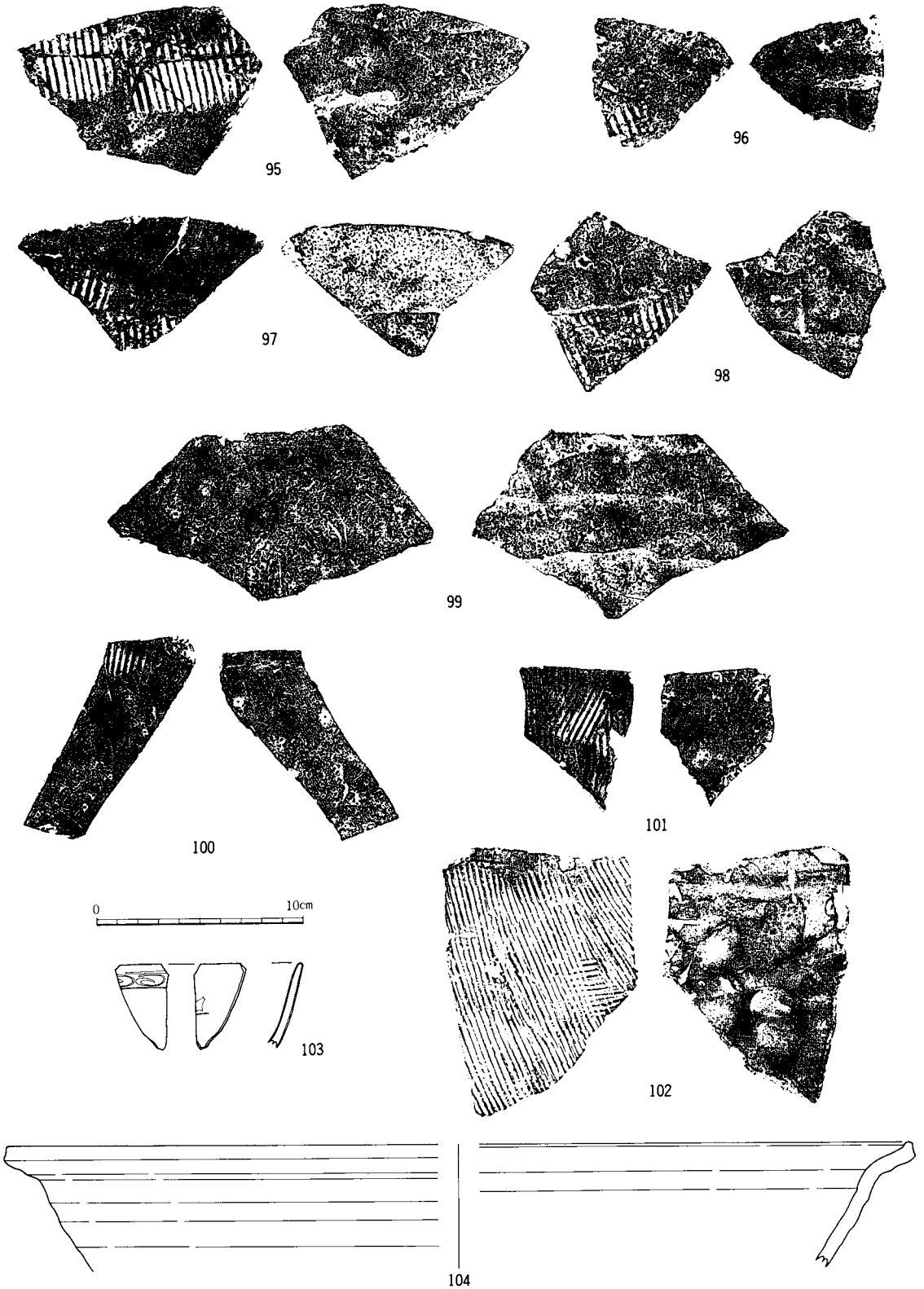
第42図　土坑出土土器(3)　11号土坑（43～46）、12号土坑（47～58）、15号土坑（59・60）



第43図　土坑出土土器(4)　19号土坑（61～66）、22号土坑（67）、
24号土坑（68）、26号土坑（69～77）



第44図　土坑出土土器(5)　26号土坑（78～88）、27号土坑（89）、
32号土坑（90～92）、34号土坑（93・94）



第45図　土坑出土土器(6)　27号土坑（95～102）、10号土坑（103）、22号土坑（104）

第3節　　溝

33以上の溝および溝状遺構が検出され、整理箱に4箱の遺物が出土している。まとまった量の遺物が出土する溝は少なく、混入品を明確に識別することは困難であった。図示した土器や溝の推定年代が、必ずしもその溝の使用年代を示しているとは限らない。

1a号溝　21ラインに沿う東西方向の溝。E－21付近で一度途切れ、幅4mの陸橋を作り出している。発掘区内では溝底の高低差は顕著でなくどちらの方向に流れたのか不明確だが、おそらく東・西のそれぞれの方向に流れていたのだろう。

1b号溝　北側が若干西に傾く南北方向の溝。北から南へ流れており、南端で流れを西へ直角に転じている。

1号溝出土遺物　1号溝ではa、bとも遺物のほとんどを奈良・平安時代の須恵器・土師器が占め、ごくわずかに中世の遺物が含まれている。1は鉄釉をつけがけした瀬戸の天目茶椀で胎土は白灰色である。15世紀代のものと思われる。2は須恵器杯蓋片と思われるが、周囲を打ち欠いている可能性がある。3は青磁で近世以降の瓶の口縁部と思われる。4は白磁の椀で、12世紀頃のものと思われる。5は「瀬戸・美濃」の灰釉皿で16世紀代のものと思われる。以上のように、中世以降の遺物は年代的にまとまっておらず、かつ、量も少ない。もっとも新しい遺物は3の青磁で、その年代を考慮すれば、1a・b溝の掘削・使用は近世以降である可能性が高くなる。なお、出土遺物の大半を占める奈良・平安時代の遺物は当溝掘削などにより混入したものと思われる。この他に1a号溝から木器椀が出土している。

2号溝　調査区をななめに横切る溝。溝底の高低差が顕著でなく、どの方向に水が流れていたのか不明。当溝からは古墳時代の土師器高杯と6の須恵器有台杯が出土している。6は吉岡編年I_2～II_1期頃のものと思われる。出土遺物が少ないため、当溝の年代は奈良時代以降としか判断しえない。

3号溝　2号溝とななめに交差する溝。北側は1号溝に切られている。出土遺物は吉岡編年II_2期によくまとまっている。7は口径16.7cm、器高2.7cmの須恵器無台盤で、胎土は極めて精良である。底部外面はロクロナデと、削りもしくはなでつけ状調整によりヘラ切り痕を消している。8・9は須恵器有台杯で、高台部径はそれぞれ、9.0cm、8.8cmである。8・9とも胎土に砂粒を多く含んでいる。この他、肩の丸いIII期以降に盛行する須恵器長頸壺片も出土している。

4号溝　弥生時代の土器が出土している。10・11は法仏式の有段口縁中形壺である。11は擬凹線を施す部分が欠落している可能性が高い。10はほぼ完形に近く復原され、口径12.4cm、器高13.9cm、胴部最大径15.1cmを計る。外面には赤彩とススの痕跡が認められる。頸部には2個の焼成前刺突穴が貫通している（通常、この穴は口縁のむかい側にも対になってあけられるが、この場合欠落しており不明）。

5号溝　底が東から西へ低くなる東西方向の溝状遺構。出土遺物は年代不詳の土師器細片が少量出土しているだけである。

6号溝　くの字に曲がる溝状遺構。奈良・平安時代の他、近世以降の磁器片が1片含まれている。

7号溝　須恵器短頸壺が1点出土している。12は口径9.6cm、器高7.4cm。青灰色で胎土に砂粒を多く含んでいる。6～7世紀のものと思われる。

8号溝　出土遺物なし。

9号溝　14号溝を切り、12号溝に合流する溝。位置的には19号溝に連続する可能性があるが、その場合、9号溝底は19号溝底より30cm近く低く、両溝とも溝底の両端の高低差がほとんどないことを考慮すると、著しく不自然である。19号溝とは連続しない可能性がある。吉岡編年II期の須恵器と年代不詳の土師器が出土している。

10号溝　東西方向の溝状遺構。長さ約 3.2m。出土遺物なし。

11号溝　東西方向の溝状遺構。長さ約3m、西端は15号建物の柱穴に切られている。出土遺物なし。

12号溝　調査区のほぼ中央部を東西方向にくの字状に流れる溝。溝底の高低差は顕著でなく、水がどちらに流れていたのか不明。西端は1号溝と交差するが、そのまま調査区外にのびている。出土遺物は13を除き、吉岡編年I期頃にまとまる。13は口径14.9cm、受部径16.6cmの須恵器杯身である。白灰色で焼成はやや甘い。胎土には砂粒を多く含む。14は小形の短頸壺で、口頸約 9.1cmを計る。器種は3mm程度で薄い。自然釉のかかり方から無蓋の状態で窯詰めされたことがわかる。焼成は堅緻。色調は灰色で断面中央はクリーム色を呈し、サンドイッチ状である。胎土に砂礫を少量含む。15は平瓶で、口径 7.1cmを計る。口縁部にはカキ目状の調整がめぐるが、同様の調整は接合部～肩部にも施されている。16は土師器の長甕で、口縁端部に面をもち、上方にややつまみあげている。体部外面は縦ハケののち、カキ目調整を施している。体部内面は横なでを施している。色調は肌色で焼成はやや甘い。17は甕底部で、外面はハケ目調整を施している。内面底部はラセン状のなでを施している可能性がある。色調は淡橙色で、外面が部分的に2次熱を受けてピンク色に変色している。焼成は甘い。18は土師質の土錘。色調は赤橙色で焼成は甘い。重量9.3g、最大径1.8cm、全長5.1cm。

13号溝　出土遺物なし。

14号溝　9号溝に切られる南北方向の溝状遺構。溝底は南端が低い。出土遺物なし。

15号溝　東西方向の小溝。16・17・23号溝と同規模・同方向の溝。16・17・23号溝は1b号溝と直交して合流するが、15号溝は途中で途切れている。おそらく、15号溝も他と同様に1b溝に合流していたのだろう。これらの溝は、いずれも水は西へ流れ、1号溝に流れ込む。15号溝から遺物は出土していない。

16号溝　18号溝・19号溝を切る東西方向の小溝。吉岡編年II期頃の須恵器と時期不詳の土師器片が出土しているが、15～17、23号溝がすべて同時期で1b号溝に接続する溝と考えるならば、これらの遺物は量が少ないこともあり、必ずしも当溝の年代を示すとは限らない。19は須恵器有台杯で、底径 9.5cmを計る。青灰色を呈し焼成は堅緻。底部外面はヘラ切り痕が残っている。内面の見込み部分はなめらかであり、使用の痕跡と思われる。

17号溝　19号溝を切る東西方向の小溝。出土遺物なし。

18号溝　1b号溝に西端を切られ、東端では12号溝に合流する東西方向の溝。溝底は東へと低くなり、水は12号溝に流れ込んでいたと思われる。吉岡編年I期頃の須恵器甕片、古墳～奈良・平

第2表　溝　一　覧　表　（年代のⅠ・Ⅱ等は吉岡編年による）　（単位はcm）

番号	推定年代	遺物の年代	遺物の種類	幅	深さ	流れの方向	比高
1a溝	中世	Ⅱ～Ⅲ（多）、中世（少）	須恵器、土師器、越前、珠洲、石鏃、瀬戸、白磁、青磁、スラッグ状品、カマド、赤彩土師器	410～460	70～100	西←→東	0？
1b	〃	Ⅰaと同じ	Ⅰaとほぼ同じ	200～240	50～85	北→南	40
2	$Ⅱ_1$か？	古墳(少)、$Ⅱ_1$(少)	須恵器、土師器	100～130	30～40	北東←→南西	0？
3	$Ⅱ_2$	$Ⅱ_2$	〃	60～80	10～40	西←→東	0？
4	法仏か？	法仏	弥生				
5	？	？	土師器細片	40	5	東→西	12
6	近世以降	弥生末～近世以降	弥生、須恵器、土師器、磁器	50～80	40	東→西、北→南	10、10
7	？	6～7C	須恵器				
8	―（遺物なし）	―	―				
9	Ⅱ	Ⅱ	須恵器、土師器	60～80	30～40	北西←→南東	0？
10	―	―	―	45	10	西→東	6
11	―	―	―	30～50	5	東→西	6
12	Ⅰか？	6C、Ⅰ	須恵器、土師器	200～300	50～60	東→西	0？
13	―	―	―				
14	―	―	―	40	3	北→南	2
15	1b号溝と同じか？	―	―	20～24	5	東→西	6
16	〃	Ⅱ頃	須恵器、土師器	30	15	東→西	7
17	〃	―	―	25～40	10	東→西	7
18	Ⅰか？	古墳、Ⅰ	須恵器、土師器	75～80	35～50	西→東	10
19	？	？	須恵器、土師器細片、スラッグ状品	40～50	10～15	南東→北西	10
20	―	―	―	45	7	北西→南東	3？
21	―	―	―				
22	？	12C後半	土師器	40	10	西←→東	？
23	1b号溝と同じか？	―	―	35～40	10	東→西	3
24	Ⅴ～Ⅵか？	$Ⅰ_2$～Ⅱ、Ⅴ～Ⅵ	土師器、赤彩土師器、須恵器	約400	？	東←→西	？
25	Ⅰ～Ⅱ	弥生末、Ⅰ～Ⅱ	弥生、土師器、須恵器	140～170	30	西→東	30
26	―	―	―	25～30	8	西←→東	0？
27	―	―	―	35～40	8	北←→南	0？
28	中世	Ⅱ～Ⅲ、中世(少)	須恵器、土師器、珠洲、加賀、青磁	360～380	70～120	西←→東	0？
29	Ⅱか？	Ⅱか？	土師器、須恵器、フイゴの羽口、スラッグ状品	？	？	西←→東	？
30	平安以降	古墳～平安	須恵器、土師器、赤彩土師器				
31	Ⅰ～Ⅱか？	Ⅰ～Ⅱか？	土師器、赤彩土師器	28	6	南西←→北東	4
32	？	？	土師器細片	30～35	5～10	西←→東	0？
33	―	―	―	30	5	西→東	5

安時代の土師器片が出土している。

19号溝　15～18・23号溝に切られ、12号溝に交わる溝。時期不詳の須恵器・土師器細片、スラッグ状品がごく少量出土している。

20号溝　長さ約 2.6mの溝状遺構。出土遺物なし。

21号溝　出土遺物なし。

22号溝　1号建物に伴う可能性がある南北方向の溝状遺構。12世紀後半代の土師器小皿が1点出土している。

23号溝　19号溝を切り、1b号溝に合流する小溝。出土遺物なし。

24号溝　東西方向の溝。西端は途切れている。ほとんど溝底しか残っていない。吉岡編年I_2～II期の須恵器・土師器と1片だけだが吉岡編年V～VI期の土師器有台椀が出土している。21は土師器長甕で、口径23.6cmを計る。口縁端部に面をもつ。体部外面はカキ目調整、内面はロクロナデを施す。22は須恵器高杯で、杯部口径25.3cmを計る。脚部には2条の沈線がめぐる。色調は青灰色で焼成は堅緻。胎土には砂粒を多く含む。21・22とも吉岡編年II期のものと思われる。

25号溝　東西方向の溝で24号溝の北側肩部を切る。

26号溝　長さ3.2mの東西方向の溝状遺構。出土遺物なし。

27号溝　長さ3.0mの南北方向の溝状遺溝。北端は攪乱のため、削平されている。出土遺物なし。

28号溝　東西方向の溝。西端は攪乱のため削平されているが、さらに西へのびていたと思われる。溝底の高低差は顕著でなく、水がどちらに流れていたか不明。規模・方向とも1a号溝と共通している。出土遺物の大半は吉岡編年II～III期の土器であるが。珠州・加賀古陶や青磁などの中世の遺物が少量含まれている。22は須恵器横瓶の口頸部片で、口径12.7cmを計る。青灰色で焼成は堅緻。胎土に砂粒を多く含む。24は須恵器有台杯で高台径11.1cmを計る。青灰色で焼成は良好。底部外面はヘラ切り後軽い静止削りなどを施している。内面の見込み部分は、体部内面に比べて手ざわりが明らかになめらかで、使用の痕跡と思われる。このような「使用痕」は、焼成がとくに堅緻な製品（その中でもとくに砂粒の多いもの）には認めにくく、24のような堅緻でないものによく認められる。「使用痕」の有無や程度は、使用方法や使用頻度によってだけ異なるのではなく、製品の焼成具合による摩耗のしやすさにも左右される。25・26は非ロクロの土師質土器。25は口径8.4cm、器高1.6cmを計る。色調は肌色で、断面内部は淡黒色を呈する。26は口径11.8cmで口縁端部に一条の沈線がめぐらされている。色調は肌色がかった橙色。25・26は13世紀前半から中葉頃のものと思われる。27は越前焼で、押印が認められる。褐色を呈する。28は珠州焼で青灰色を呈する。

29号溝　東西方向の溝。28号溝と同じ方向で、重複している。28号溝が29号溝を切っている。出土遺物は吉岡編年II期頃の遺物とフイゴの羽口、スラッグ状品が少量認められる。

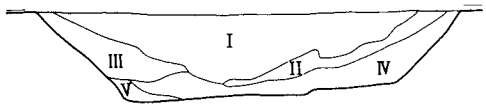
30号溝　古墳～平安時代の遺物が出土している。

31号溝　28・29号溝に隣接する溝状遺構。奈良時代頃の遺物が出土している。

32号溝　東西方向の溝状遺構。土師器細片が出土しているが、時期不詳。

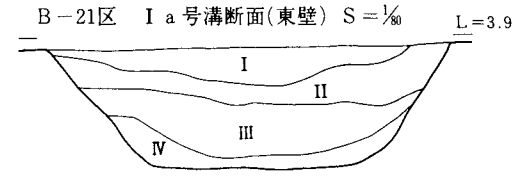
33号溝　32号溝に隣接した東西方向の溝。西端は北へ屈曲している。出土遺物なし。

E－20区　16号溝断面図　S＝1/80



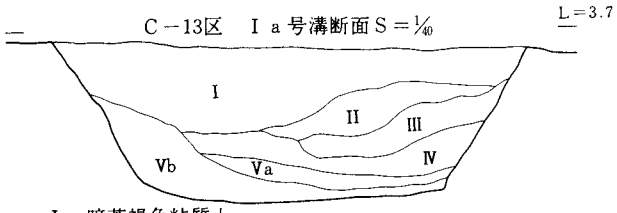
人為的埋土
- I　暗茶褐色粘質土（2～3cm黄色土ブロック含）
- II　白黄色粘質土（7～8cm大の灰白色粘質土ブロック多量に含む
- III　黄褐色粘質土ブロック層
- IV　暗茶褐色土（微量の白色粘土ブロック（1～2cm）数個含む）
- V　淡茶褐色砂層

B－21区　I a 号溝断面(東壁)　S＝1/80



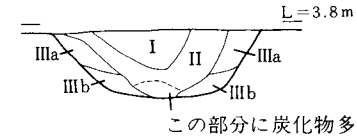
I　淡灰色土層（黄褐色ブロック多量に混入）
II　濁灰色土層（黄褐色ブロック多量に混入）
III　濁青灰色粘質土（黒灰色ブロック混入）
IV　暗灰色粘質土層

C－13区　I a 号溝断面 S＝1/40



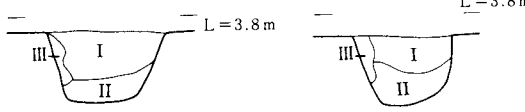
I　暗茶褐色粘質土
（3～4cm大の灰白色粘質土ブロックを多量に含有する）
II　白黄粘質土
（7～8cm大の灰白色粘質土ブロック少量含有）
III　黄褐色粘質土ブロック層
（淡黄灰色粘質土ブロックを多量に含有する）
IV　暗灰色粘質土
（灰白色粘質土を微量に含有）
V a 暗茶褐色土
（5cm大の灰白色粘質土ブロックを多量に含有）
V b 暗茶褐色土
（やや V a より灰白色粘質土ブロックが多い）

B－9区　2号溝断面(北壁)　S＝1/40



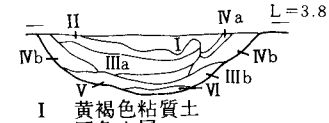
I　黒色土（少量褐色ブロック含む）
II　暗茶灰色土（炭化物を含む）
III a 明茶灰色土（粘質）
III b　〃　（砂質）

B－14区　9号溝断面(東壁)　S＝1/40　左に同じ



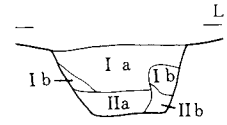
I　黒褐色土
II　暗茶褐色土（地山ブロック含）
III　黄灰色土

B－17区　12号溝断面(東壁)　S＝1/40



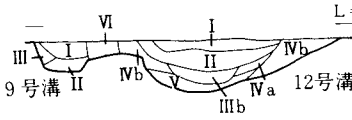
I　黄褐色粘質土
II　灰色土層
III a 黒灰色弱粘質土
（若干の炭化物を含む）
III b 黒灰色弱粘質土
（多量の炭化物を含む）
IV a 茶灰色土
IV b 茶灰色土
（地山、黄褐色ブロック含）
V　灰色弱粘質土
（若干の炭化物含）
VI　明灰色微砂層

E－7区3号溝断面(南壁)　S＝1/40



I a 暗茶褐色土(炭化物少量含)
I b　〃　（I a に地山ブロックを含んだもの）
II a 淡茶褐色土
II b　〃　（地山ブロック含）

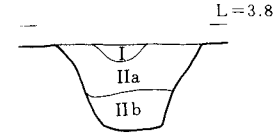
D－16区9・12号溝断面(東壁)　S＝1/80



I　黒褐色土
II　暗茶褐色土
（地山ブロック含）
III　黄灰色土

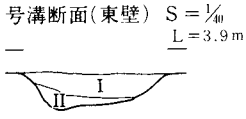
I　黄褐色粘質土
II　灰色土層
III b 黒灰色弱粘質土
IV a 茶灰色土
IV b　〃
（地山、黄褐色ブロック含）
V　灰色弱粘質土
VI　黒灰色土

E－17区　18号溝断面図(東壁)　S＝1/40



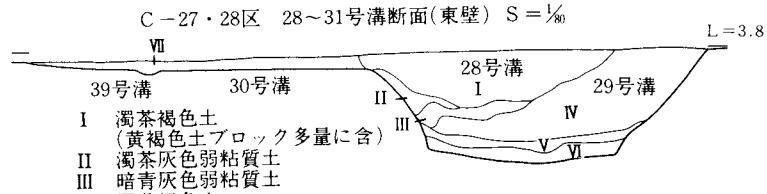
I　黒褐色土
II a 暗茶褐色土
II b　〃　（炭化物含）

6号溝断面(東壁)　S＝1/40



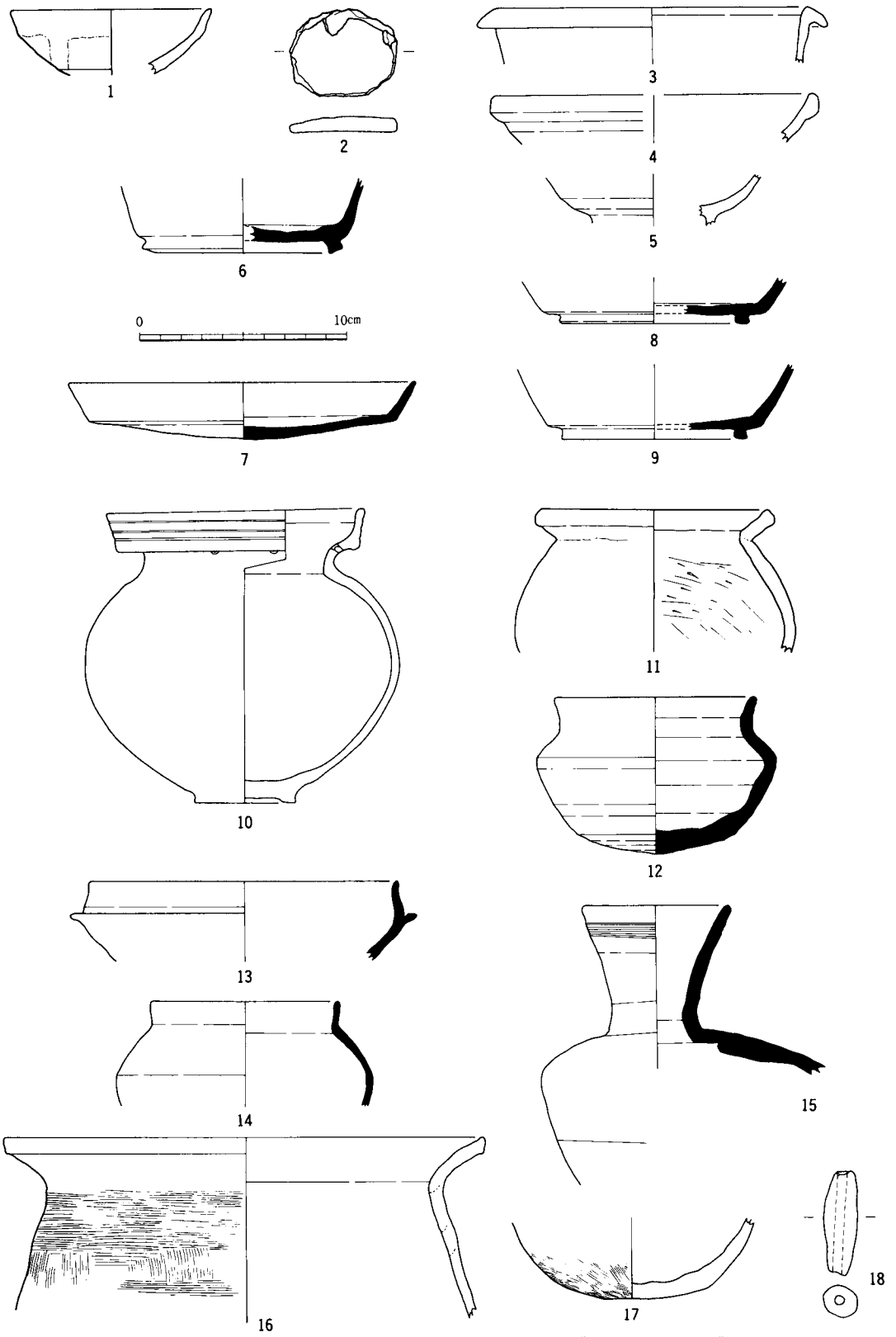
I　灰白色砂質土
II　暗褐色砂質土

C－27・28区　28～31号溝断面(東壁)　S＝1/80

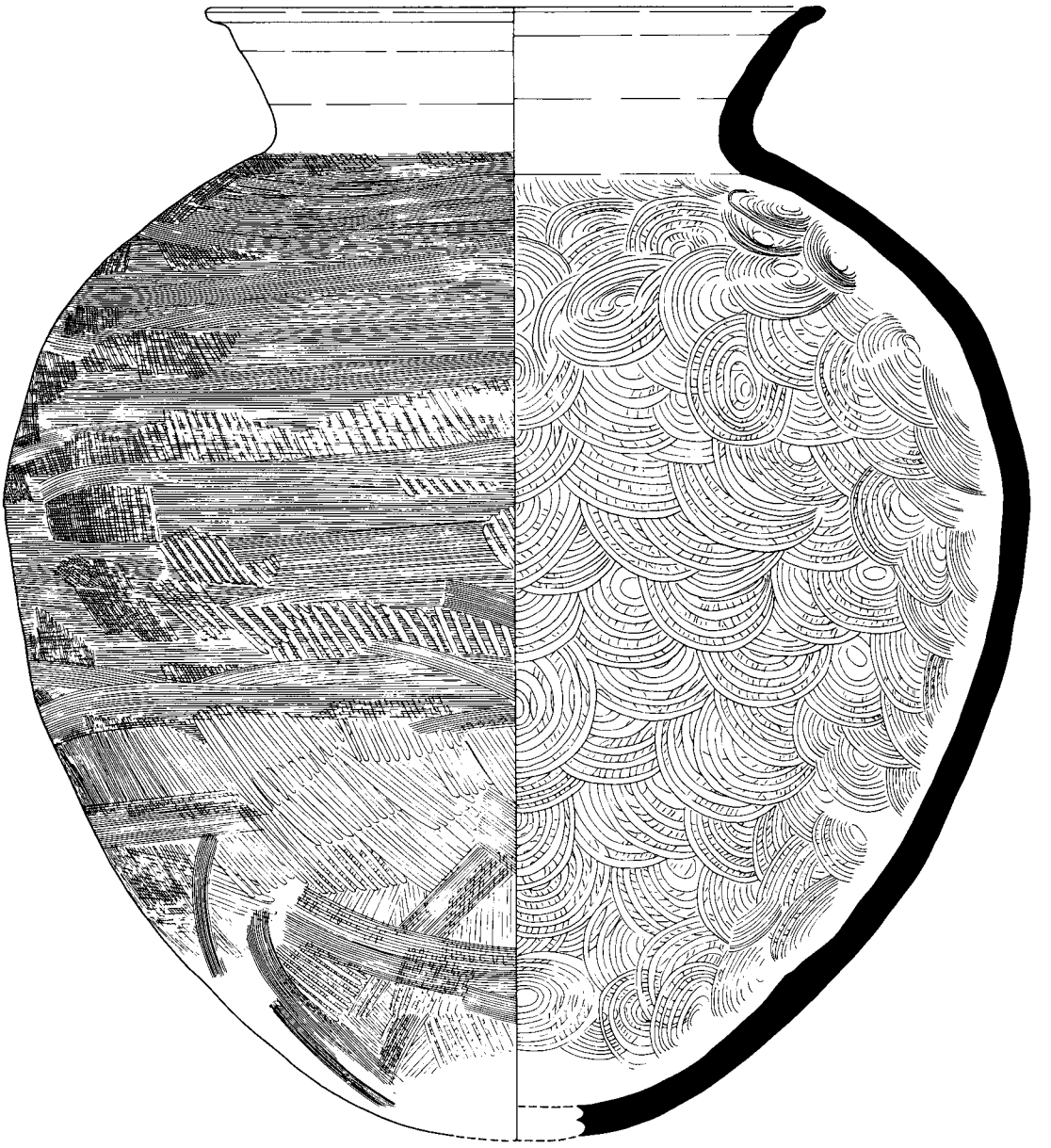


I　濁茶褐色土
（黄褐色土ブロック多量に含）
II　濁茶灰色弱粘質土
III　暗青灰色弱粘質土
IV　濁黄褐色土
（地山埋土、灰色土ブロック含）
V　灰色粘土層
VI　淡黄灰色弱粘質土
（多量の5層を含）
VII　黒褐色土

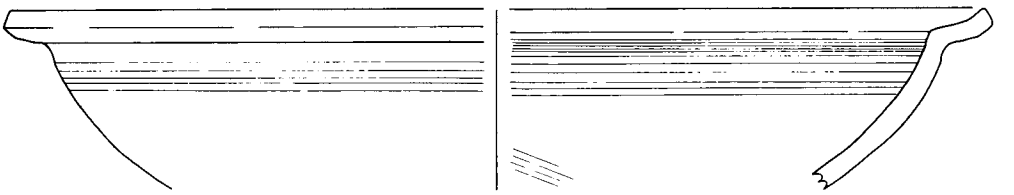
第46図　溝断面実測図



第47図　溝出土遺物(1)　1～5は1号溝、6は2号溝、7～9は3号溝、10・11は4号溝、13～18は12号溝



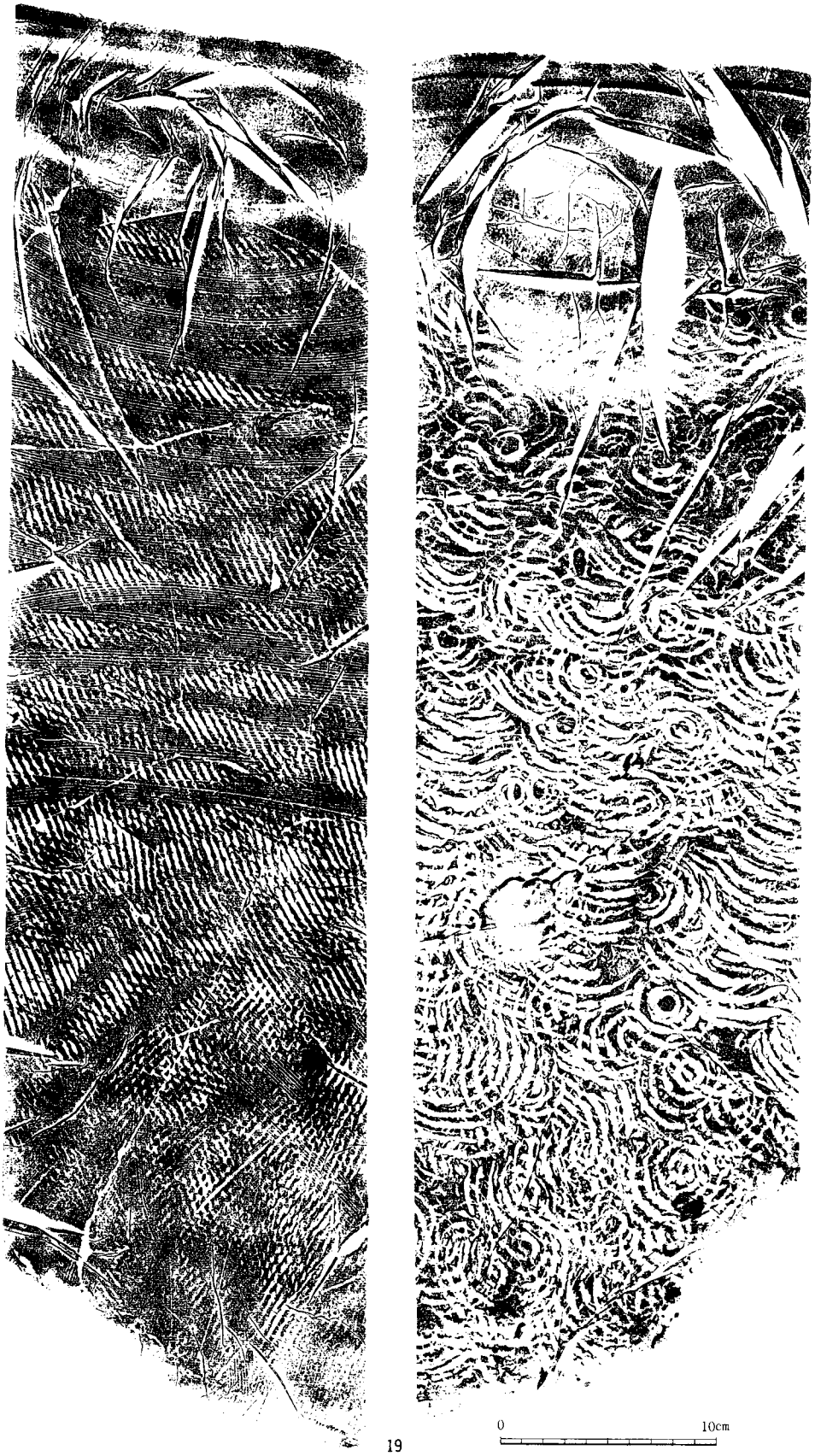
19



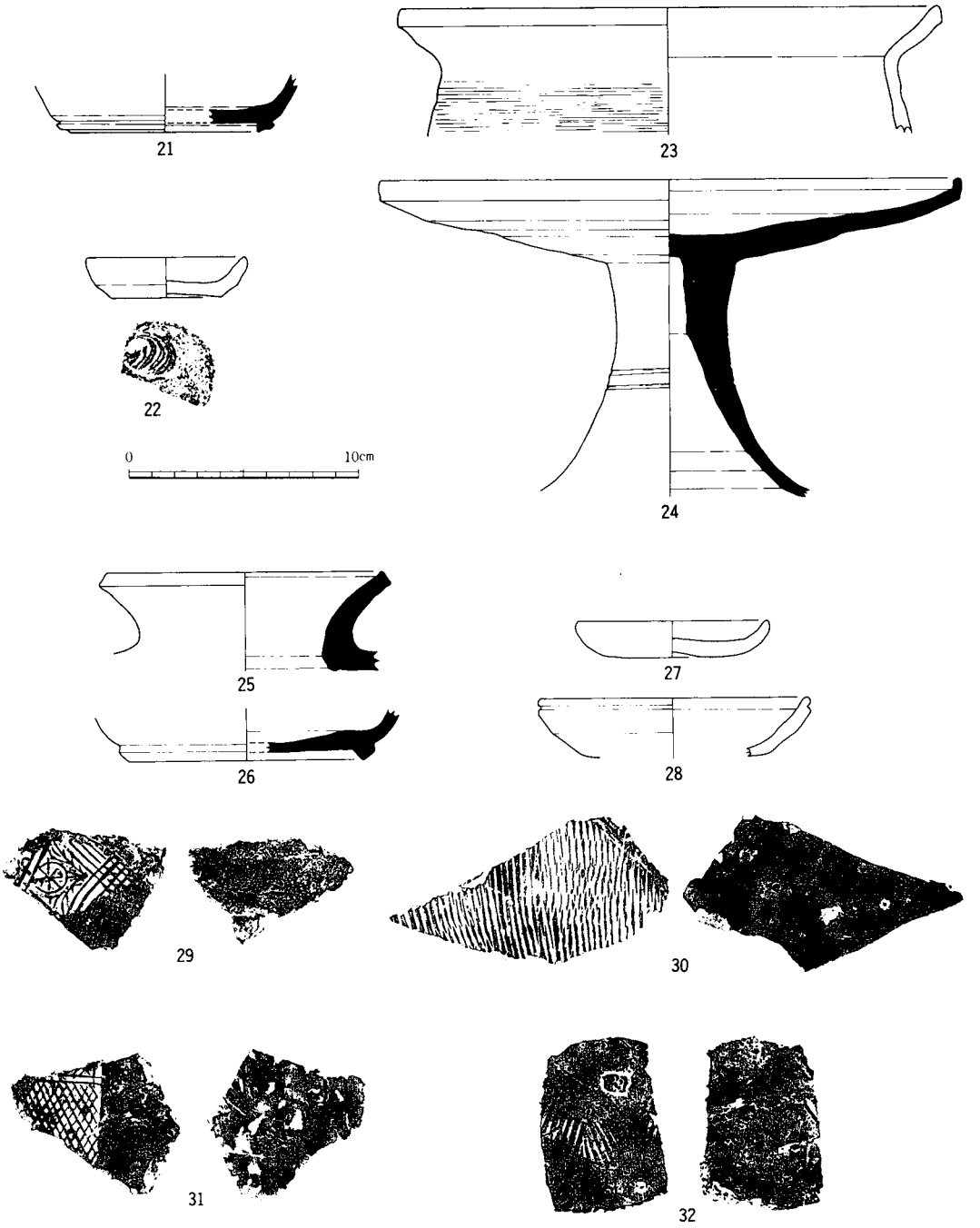
20

0　　10cm

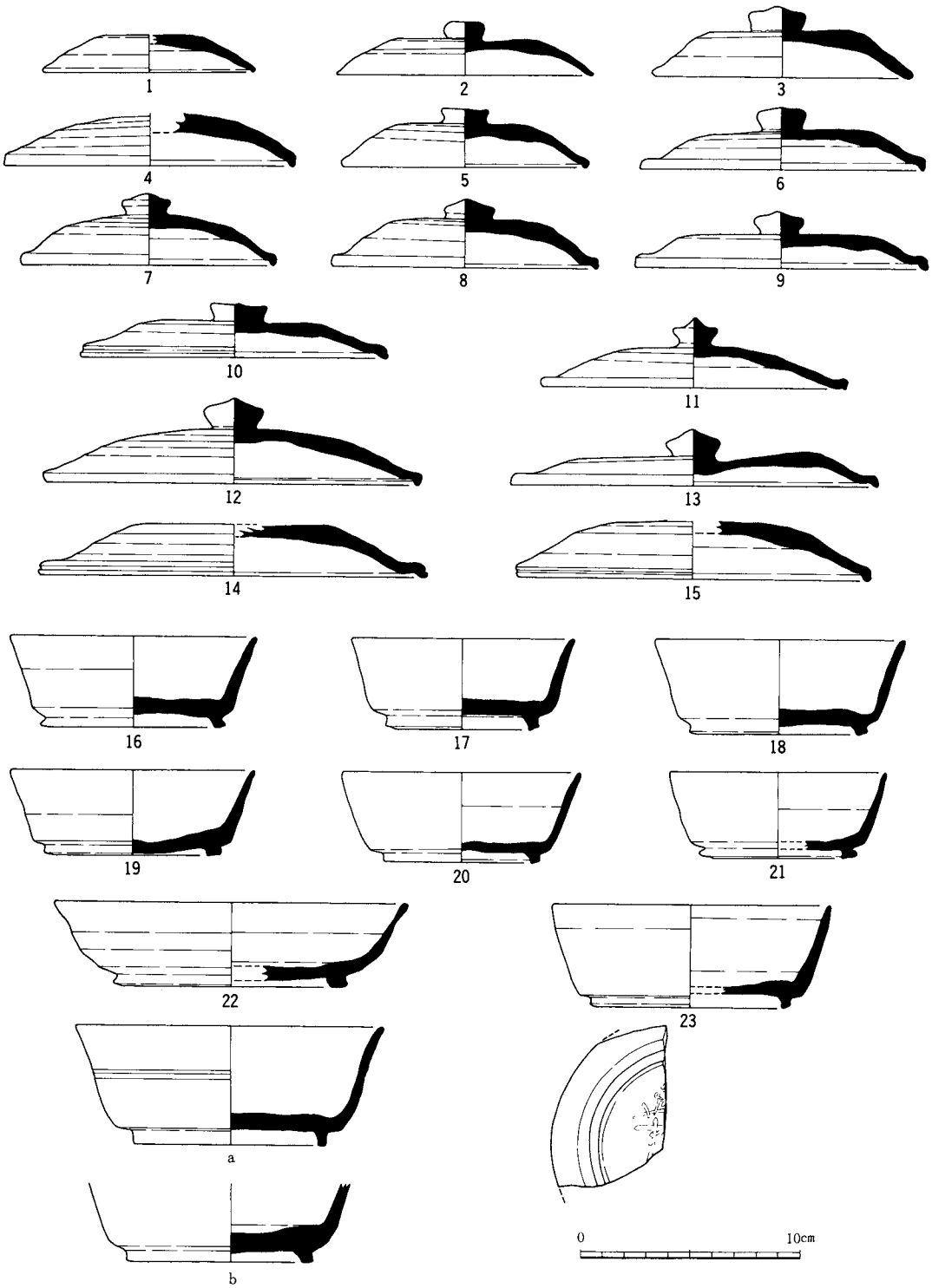
第48－１図　溝出土遺物(2)　19は12号溝上面、20は包含層



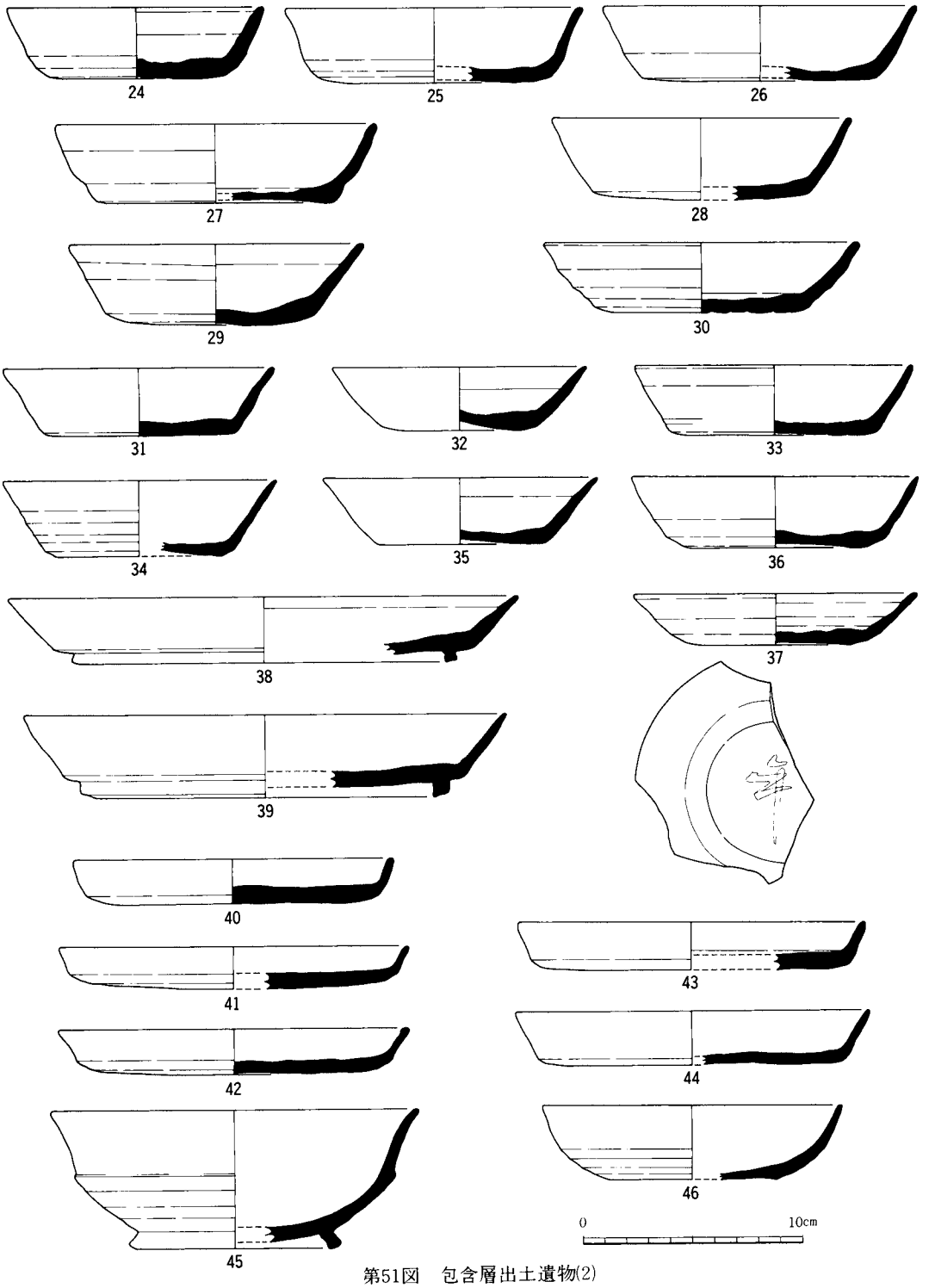
第48－２図　溝出土遺物(3)　19の拓本



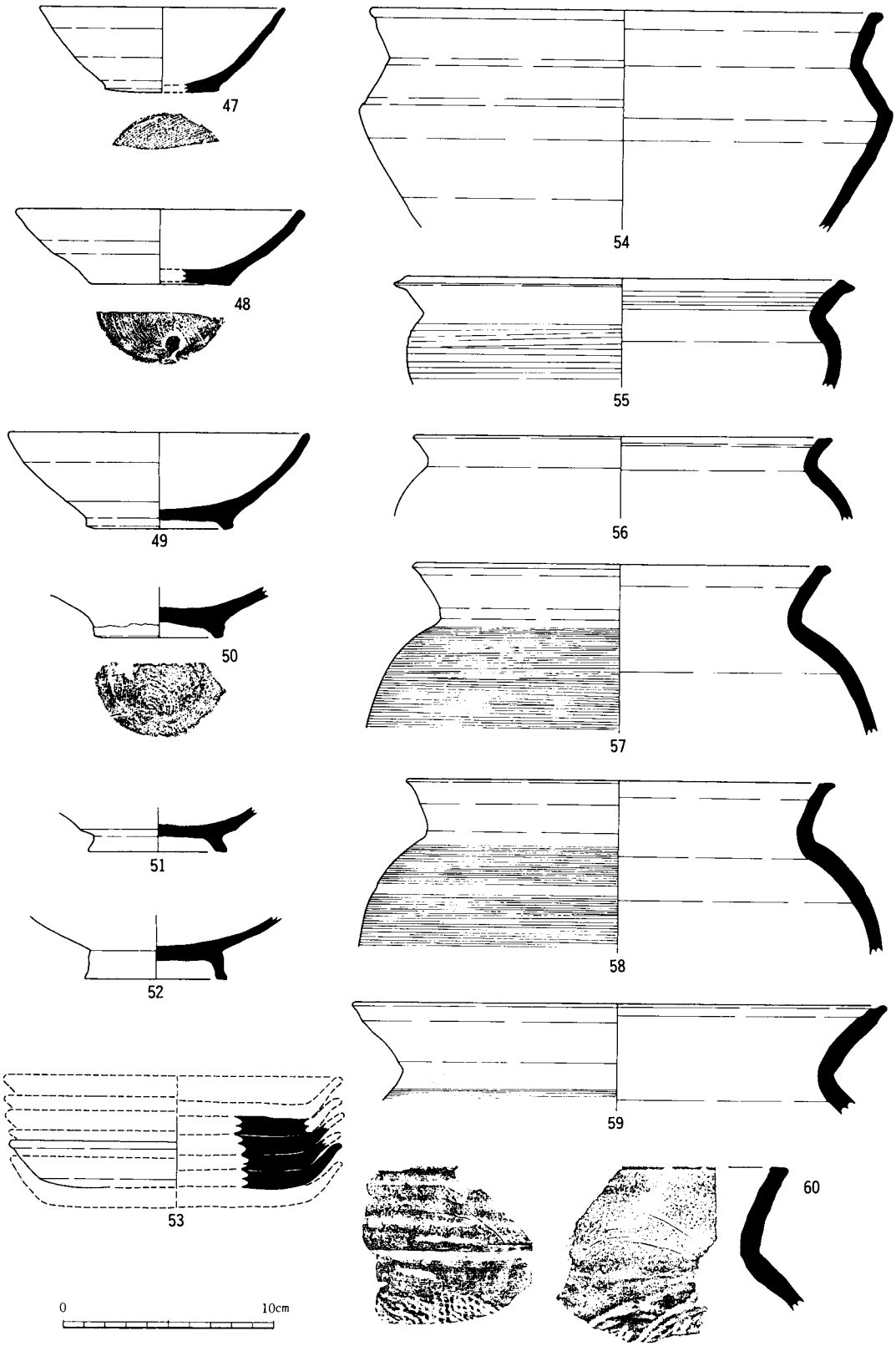
第49図　溝出土遺物(4)　21は16号溝、22は22号溝、23・24は24号溝、
25～30は28号溝、31・32は包含層



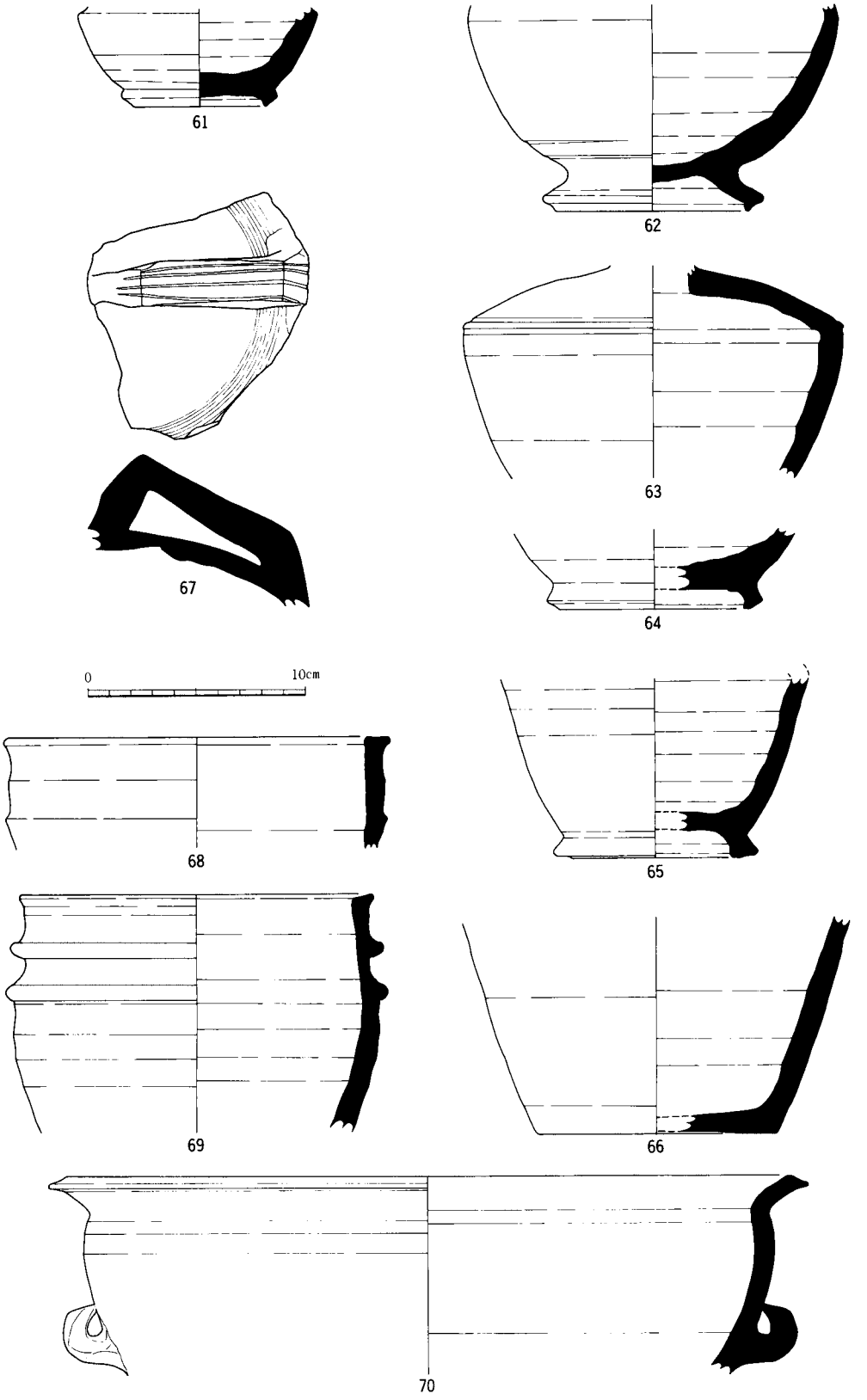
第50図　包含層出土遺物(1)



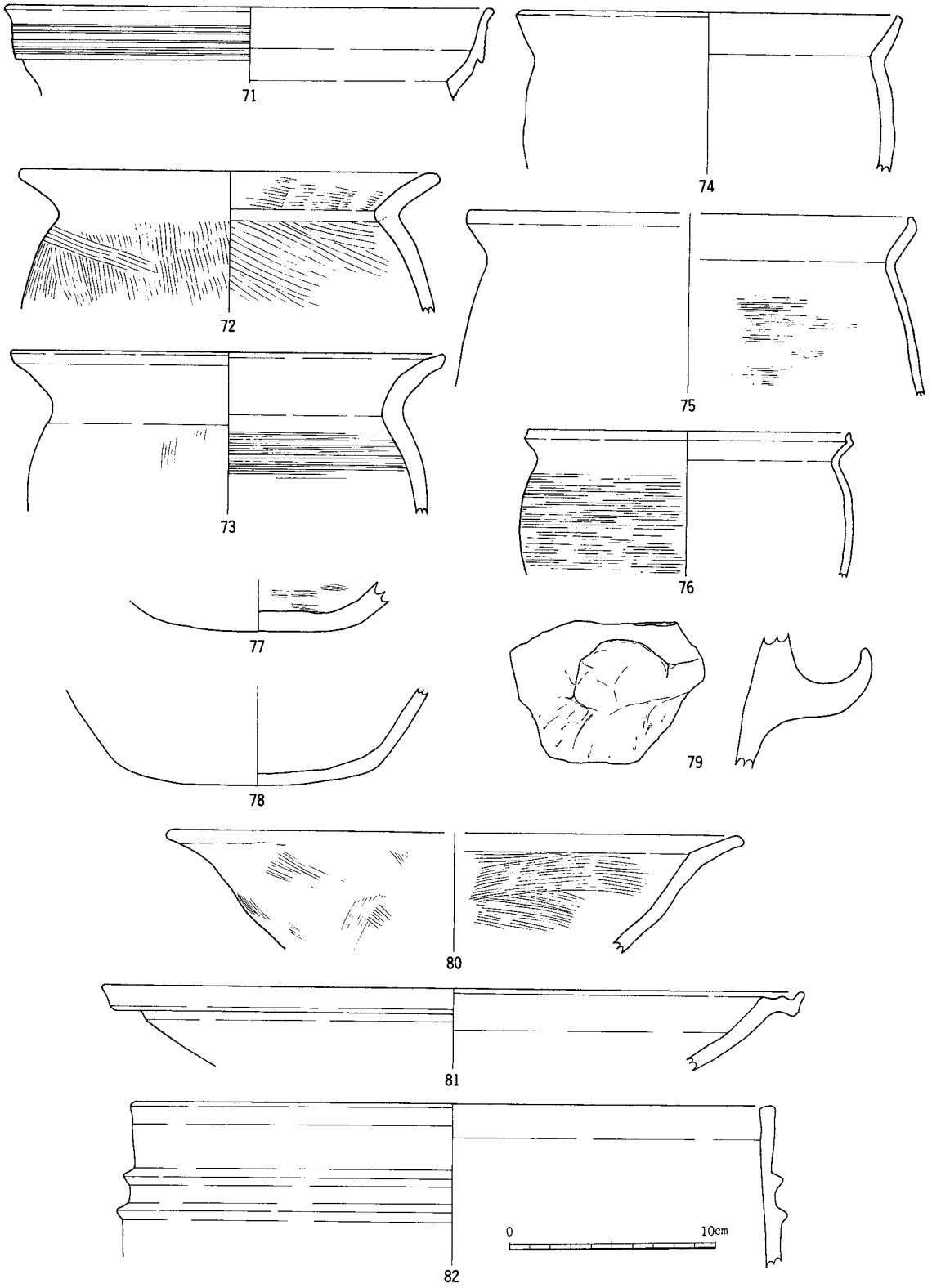
第51図　包含層出土遺物(2)



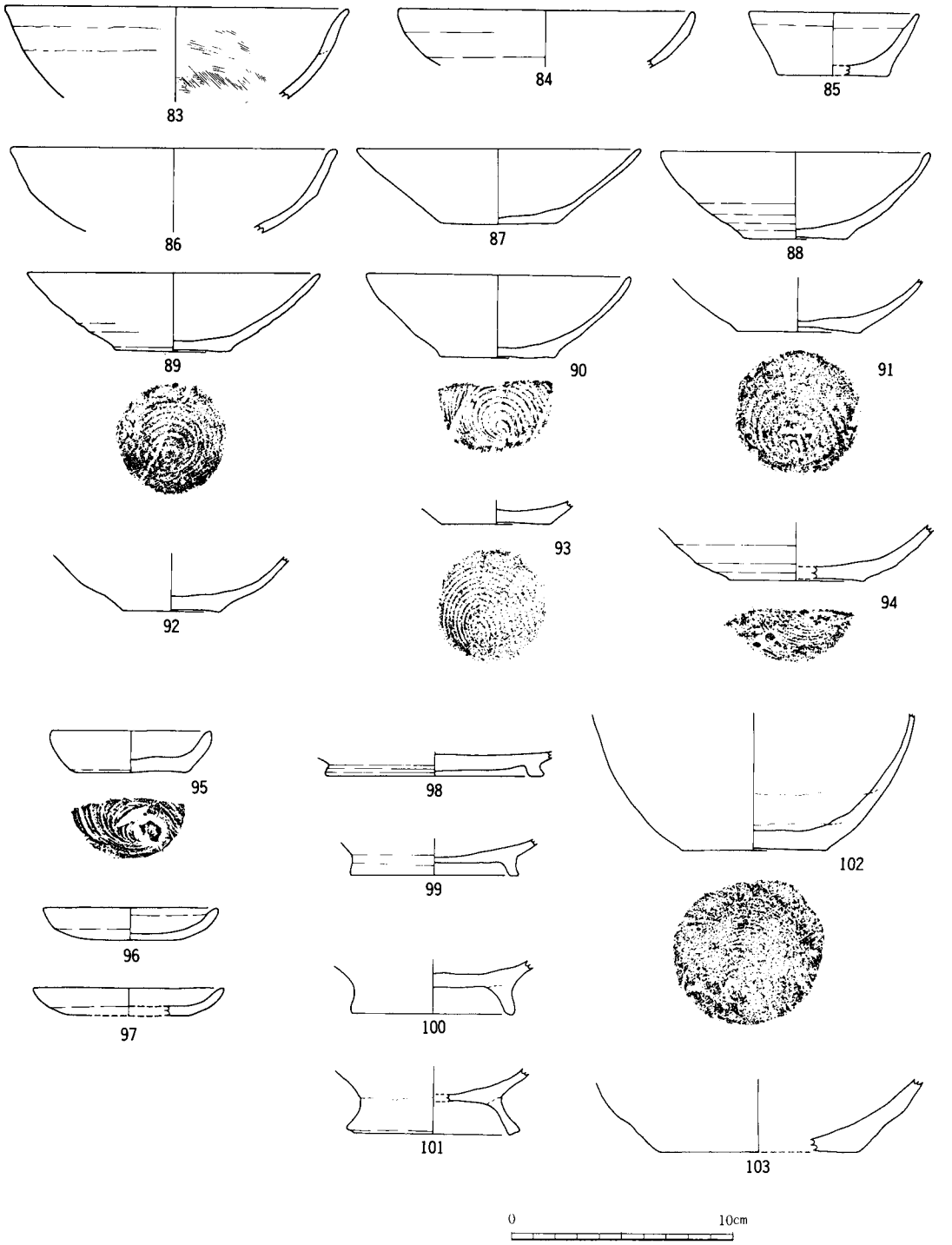
第52図　包含層出土遺物(3)



第53図　包含層出土遺物(4)



第54図　包含層出土遺物(5)



第55図　包含層出土遺物(6)

第4節　銭　　貨

出土概況

本遺跡の調査から総数で9種62枚の銅銭が検出された。その大半は皇朝十二銭が占め、銭種は「和同開珎」から「隆平永寶」までの4種37枚と不明銭19枚の計56枚である。その他に北宋銭5枚と近世の「寛永通寶」1枚が出土している。

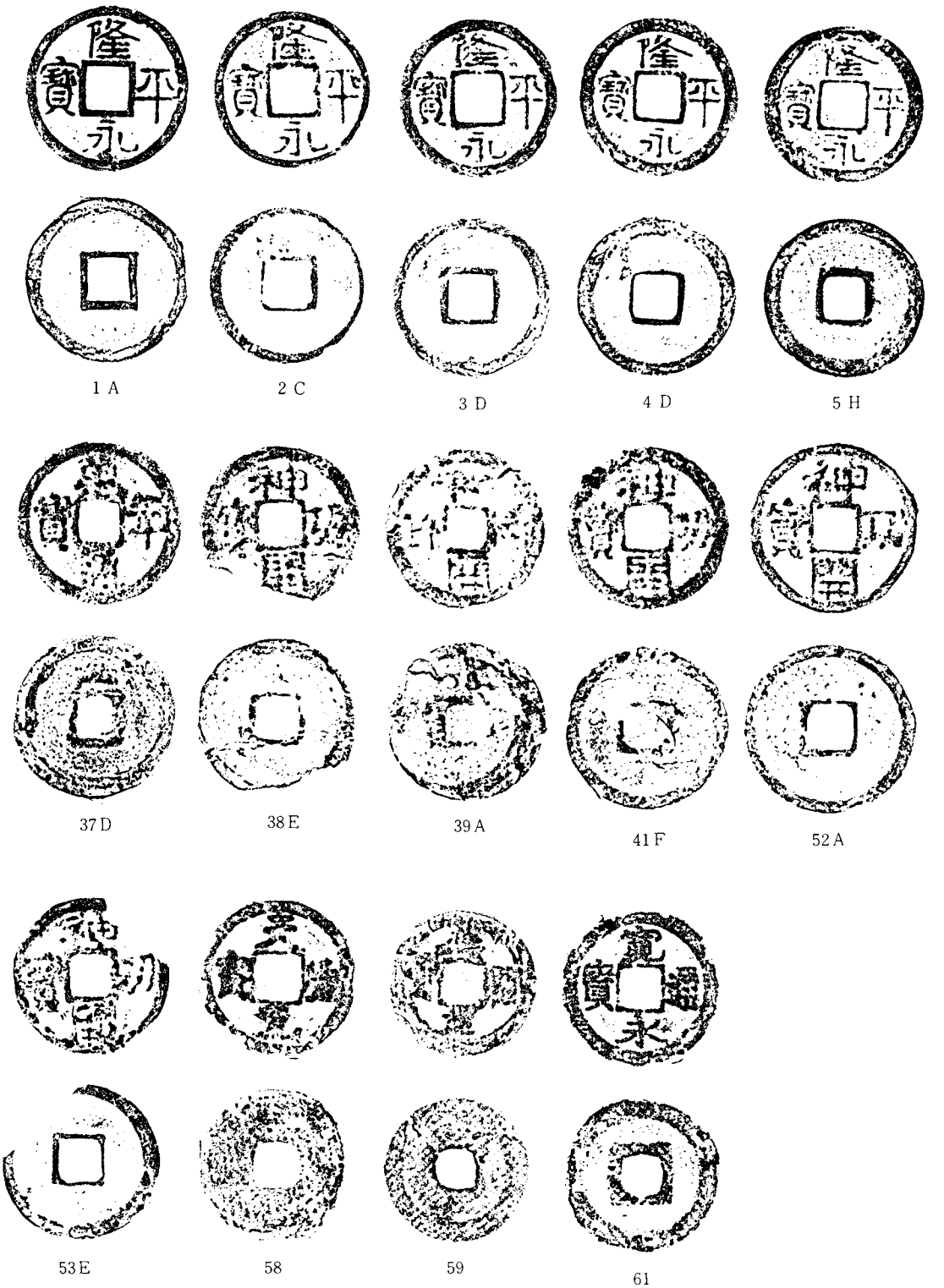
皇朝十二銭の出土地点は5ヶ所からであるが、その出土地点は調査区のほぼ中央付近に比較的偏在した地区のピット内や包含層からの出土である。北宋銭は中世の1号溝内2ヶ所の地点より出土、そして「寛永通寶」は23区包含層からの出土である。

銭貨の遺存状態はピット648から出土した完形品の「隆平永寶」5枚をはじめ、B－15・16区付近出土の焼土塊から検出した数枚が良好であったが、その他の銭貨では腐蝕・錆化が著しく、欠損・細片が相当数みられた。また錆着しているものも数例ある。こうした遺存状況から拓本に耐える程度のものは僅か16枚であった。（第56図参照）以下では、出土銭貨について埋納ピット、包含層別に説明したい。（番号は、第3表・図版36・37の番号と符合する）

銭貨状況

B－18区ピット648「隆平永寶」11枚と不明銭1枚の計12枚。1～5は完形品、6～11は欠失部が顕著。1は銭型、文字ともに大きく、各文字の配置が均衡を保っている。遺存度は良好である。計測値は外径2.59cm、内郭径0.66cm、厚み0.16cm、重量 2.7gである。2は、銭型は中型、文字はやや細字である。遺存度は良好。外径2.42cm、内郭径0.68cm、厚み0.18cm、重量 2.2gである。3は銭型が中型、内郭孔がやや広い。「平」の第1画と4画の間隔が狭く末画が長い。「広穿長平」とよばれるものである。外径2.49cm、内郭径 0.7cm、厚み0.18cm、重量 2.3gである。4の銭型は3と同様に中型、「平」の末画が長いことは3に酷示するが、文字は全体的に小さく濶縁である。遺存度は良好。外径2.48cm、内郭径0.66cm、厚み0.17cm、重量 2.2gである。5の文字は4と比較的酷似する。やや損傷ぎみではあるが良好。外径2.49cm、内郭径0.64cm、厚み0.16cm、重量 1.8gである。6は約¼を欠失する。やや磨滅ぎみで5個体に破損。「隆」・「永」の一部と「平」・「寶」の文字は確認できる。「平」字は「長平」である。7は約½を欠失する。各文字が部分的に確認できる。8、9の文字も7と同様、部分的に確認できる。10・11は約¾を欠失する、残存文字から辛うじて識別できる。12は腐蝕・磨滅が著しく数10片の細片であるが、先のいずれも「隆平永寶」であることから、この銭貨も同種の「隆平永寶」の可能性が高い。7～12の遺存状態は劣悪である。

E－18区包含層　「和同開珎」・不明銭各1枚と「萬年通寶」・「神功開寶」各3枚の計8枚。13は「和同開珎」で約⅕を欠失する9個体の破片である。「和」字と「同」・「開」・「珎」字の一部分が確認できる。文字の鋳あがりはよく比較的鮮明である。14は外輪部若干が遺存するだけで銭種不明。15は「萬年通寶」で約⅙を欠失する。「萬」字はかなり不鮮明、「年」の字画は直線的である、「通」字の「辶」の末画の跳ね方に特徴があり、「寶」字の大半が欠失する。銭型、文字は大きい。16は「萬年通寶」で「年」字と「通」字の間のハダ部分を欠失し、3個体の



第56図　銭貨拓影（原寸）

第３表　敷地鉄橋遺跡出土銭貨一覧表

番号	遺　構・包含層	銭 貨 名	時代	初 鋳 年　（西暦）	備　　考
1	Ｂ－18区、ピット648	隆平永寶	平安	延暦15年　（796）	完 形 品
2	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
3	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
4	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
5	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
6	〃	〃	〃	〃　（〃）	破損部多く、遺存状態は不良
7	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
8	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
9	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
10	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
11	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
12	〃	銭種不明	不明	不　明	細片
13	Ｅ－18区、包含層	和同開珎	奈良	和銅元年　（708）	「同」、「珎」の一部と「開」破損
14	〃	銭種不明	不明	不　明	外輪若干遺存
15	〃	萬年通寶	奈良	天平寶字４年（760）	破損部若干あり、遺存状態はやや不良
16	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
17	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
18	〃	神功開寶	〃	天平神護元年（765）	〃
19	〃	〃	〃	〃　（〃）	〃
20	〃	〃	〃	〃　（〃）	細片遺存部若干
21	Ｆ－18区、包含層	鋳種不明	不明	不　明	〃
22	Ｄ－22区、ピット840	萬年通寶	奈良	天平寶字４年（760）	完形品、錆顕著
23	〃	銭種不明	不明	不　明	〃
24	〃	〃	〃	〃	〃　錆着
25	〃	〃	〃	〃	〃
26	〃	〃	〃	〃	約⅚欠失
27	〃	萬年通寶	奈良	天平寶字４年（760）	約⅛欠失　錆着
28	〃	銭種不明	不明	不　明	約⅓欠失
29	〃	〃	〃	〃	約½欠失
30	〃	〃	〃	〃	完形品　錆着
31	〃	〃	〃	〃	約½欠失
32	〃	〃	〃	〃	約¾欠失　□□開□
33	〃	〃	〃	〃	約⅓欠失　錆着
34	〃	〃	〃	〃	〃
35	〃	〃	〃	〃	約¼欠失
36	〃	〃	〃	〃	約⅓欠失　錆着、腐蝕顕著
37	Ｂ－15･16区（包含層）	萬年通寶	奈良	天平寶字４年（760）	完形品（面）
38	〃	神功開寶	〃	天平神護元年（765）	約⅓欠失（背）
39	〃	和同開珎	〃	和銅元年　（708）	ハダ若干欠失（背）
40	〃	神功開寶	〃	天平神護元年（765）	約⅓破損（背）神□開寶
41	〃	〃	〃	〃　（〃）	完形品（背）
42	〃	萬年通寶	〃	天平寶字４年（760）	約⅓欠失（背）
43	〃	神功開寶	〃	天平神護元年（765）	完形品（面）
44	〃	銭種不明	不明	不　明	完形品（不明）
45	〃	神功開寶	奈良	天平神護元年（765）	完形品（背）神□□寶　錆着
46	〃	〃	〃	〃　（〃）	完形品（面）□□開寶
47	〃	鋳種不明	不明	不　明	完形品（面）
48	〃	和同開珎	奈良	和銅元年　（708）	若干破損
49	〃	神功開寶	〃	天平神護元年（765）	約¼破損
50	〃	〃	〃	〃　（〃）	約⅔欠失
51	〃	和同開珎	〃	和銅元年　（708）	約⅔欠失、和同□□
52	〃	神功開寶	〃	天平神護元年（765）	完形品
53	〃	〃	〃	〃　（〃）	約⅙欠失
54	〃	銭種不明	不明	不　明	約⅚欠失
55	〃	〃	〃	〃	〃
56	Ｅ－８区、１号溝	元祐通寶	北宋	元祐元年　（1086）	若干破損
57	Ｄ-10･11区、9号土壙	銭種不明	不明	不　明	磨滅顕著、一部破損
58	Ｆ－20区、１号溝	天聖元寶	北宋	天聖元年　（1023）	完形品（楷）
59	〃	嘉祐元寶	〃	嘉祐年間（1056～63）	約¼欠失（篆）
60	〃	至道元寶	〃	至道年間（995～7）	若干破損（行）
61	Ｄ－23区、包含層	寛永通寶	江戸	寛永13年　（1636）	完形品（古寛永）

破片である。「萬」字を「冊」につくり、文字はやや肉太である。比較的腐蝕しており遺存度はやや不良。17は「萬年通寶」で約¼部分的に欠失、7個体の破片である。「通」字の「辶」末画が跳ねている。「年」字は欠失するが、文字の画線は比較的に明瞭。やや濶縁ぎみである。18は「神功開寶」で8個体の破片である。「神」字の申は「短申」、「功」・「開」字の一部が不明瞭。文字は大きい。19は「神功開寶」で上部位を部分的に若干欠失する9個体の砂片である。「功」・「開」字は確認できるが、「神」と「寶」字は不明瞭。20は「神功開寶」の「神」と「功」字の小片である。

F－18区包含層　不明銭1枚。21は約¾を欠失、7個体の破片である。上部は断片的、左部の「寶」字の一部が残存するが、上部文字部分が欠失しているので看取できない。

D－22区ピット840「萬年通寶」2枚と不明銭13枚の計15枚。22は「萬年通寶」である。「年」・「通」字は確認できるが、「萬」・「寶」字は錆化が著しいため不明瞭。「萬」と「年」の外輪若干欠失する遺存度不良。外径2.56cm、内郭径0.55cm、厚み0.18cm、22～25は錆着しているので4枚付着の重量は 9.3gを測る。23～25は錆着のため銭種不明。26は約⅚欠失、銭種不明。27は「萬年通寶」である。腐蝕・錆化が著しく「萬」・「年」・「寶」字が微かに看取できる。「年」から「寶」字にかけ、外輪とハダ若干が欠失する。外径 2.6cm、厚み0.22cm、26～28は錆着しているので3枚付着の重量は3.45gである。28は約⅓欠失、銭種不明。内郭径は0.65cmである。29は約½欠失、銭種不明。内郭径0.65cm。30は完形品であるが錆化が顕著なため銭種不明。外径2.55cm、厚み 0.2cmである。31は約½欠失、銭種不明。厚み0.19cmである。29～31は錆着しており重量は4gである。32は約¾の欠失、下部の「開」字が認められるだけで銭種不明。内郭径0.65cm。33は約⅓欠失、厚み0.15cm。34は約⅓欠失、ともに銭種不明で腐蝕が著しい。31～33の錆着の重量は1.95gである。35は約¼欠失。内郭径0.57cm、厚み 0.2cm。36は約⅓欠失、腐蝕が著しい、ともに銭種不明である。35・36の錆着状態の重量は 2.8gである。

B－15・16区付近　「和同開珎」4枚と「萬年通寶」2枚、「神功開寶」10枚、不明銭4枚の計20枚。37は「萬年通寶」の完形品である。銭型は普通、文字はやや肉太で遺存度は良好。外径2.58cm、内郭径0.51cm、厚み0.22cm、重量 6.7gである。38は「神功開寶」で約⅐欠失する。「刀」の第2画が長く延びるところから「長刀」とよばれるものである。「開」は「開」につくる。錆化はしているがやや良好。外径2.51cm、内郭径0.62cm、厚み0.19cm、重量 3.3gである。39は「和同開珎」である。「和」と「珎」字間のハダ若干欠失する。画線は比較的細字に書かれ、「開」は「開」につくる。背の外輪、内郭にズレがみられる。外径 2.5cm、内郭径0.56cm、厚み0.15cm、重量 3.2gである。40は「神功開寶」で部分的に約⅓欠失、7個体の破片である。「開」字は読みとりやすいが、他の文字は付着物、破損などのため微かに看取できる程度である。遺存状態は不良。41は「神功開寶」の完形品。「神」字の「申」の縦棒がやや短かい。「刀」の第2画が長く「長刀」である。「開」は「開」につくられている。中縁で比較的文字が小さい。外径2.56cm、内郭径0.63cm、厚み0.15cm、重量 1.9gである。42～47は錆着。42は「萬年通寶」で約⅓欠失する。「年」字が認められる。外径2.58cm、内郭径0.64cm、厚み0.18cm。43は「神功開寶」である。「功」・「開」の一部分が認められる。 外径2.54cm、厚み0.19cm。44は銭種不明。外径2.46cm、

厚み0.17cm。45は「神功開寶」である。「神」・「寶」字の一部分が認められる。外径2.50cm、厚み0.15cm。46は「神功開寶」である。「開」・「寶」字の一部分と「神」字が微かに認められる。外径2.62cm、厚み0.17cm。47は銭種不明である。外径2.44cm、内郭径0.61cm、厚み0.17cm。6枚鋳着の重量は20.7gを測る。43～47はいずれも完形品である。48は「和同開珎」で2ヶ所若干欠失、9個体の破片である。「和」・「同」・「開」字はやや角張った文字である。「開」字は「開」につくる。遺存度やや不良。49は「神功開寶」で部分的に3ヶ所約¼欠失、9個体の破片である。「神」字は「短申」、「功」字は「長刀」で、やや不良。50は「神功開寶」で約⅔を欠失、4個体の破片である。「開」字と「功」字の一部が微かに認められる。51は「和同開珎」で約⅔を欠失、2個体の破片である。「和」と「同」字が鮮明に認められる。52は「神功開寶」の完形品である。銭型、文字が大きく、「功」字の力の上部がでないので「力功不力」とよばれている。「開」は「開」につくる。遺存度は良好。外径2.66cm、内郭径0.63cm、厚み 0.2cm、重量 4.7gである。53は「神功開寶」で約⅙を欠失。「功」は「長刀」、「開」は「開」につくる。52に比して銭型、文字が小さい。外径2.45cm、内郭径0.62cm、厚み 0.2cm、重量 2.6gである。54は「和同開珎」で約¾を欠失、2個体の破片である。「和」字の上位部分が認められる。55・56ともに約⅚欠失、数破片で銭種不明である。（以上、皇朝十二銭である）。

E－8区1号溝　北宋銭1枚。57は「元祐通寶」（げんゆうつうほう）（篆書体）で部分的に若干欠失、4個体の破片である。やや磨滅ぎみである。

D－10・11区9号土壙　不明銭1枚。58は腐蝕・磨滅が顕著なもので、ハダが薄くなっているため一部欠失している。外径2.32cm、内郭径0.64cm、厚み 0.1cm、重量 1.5gである。

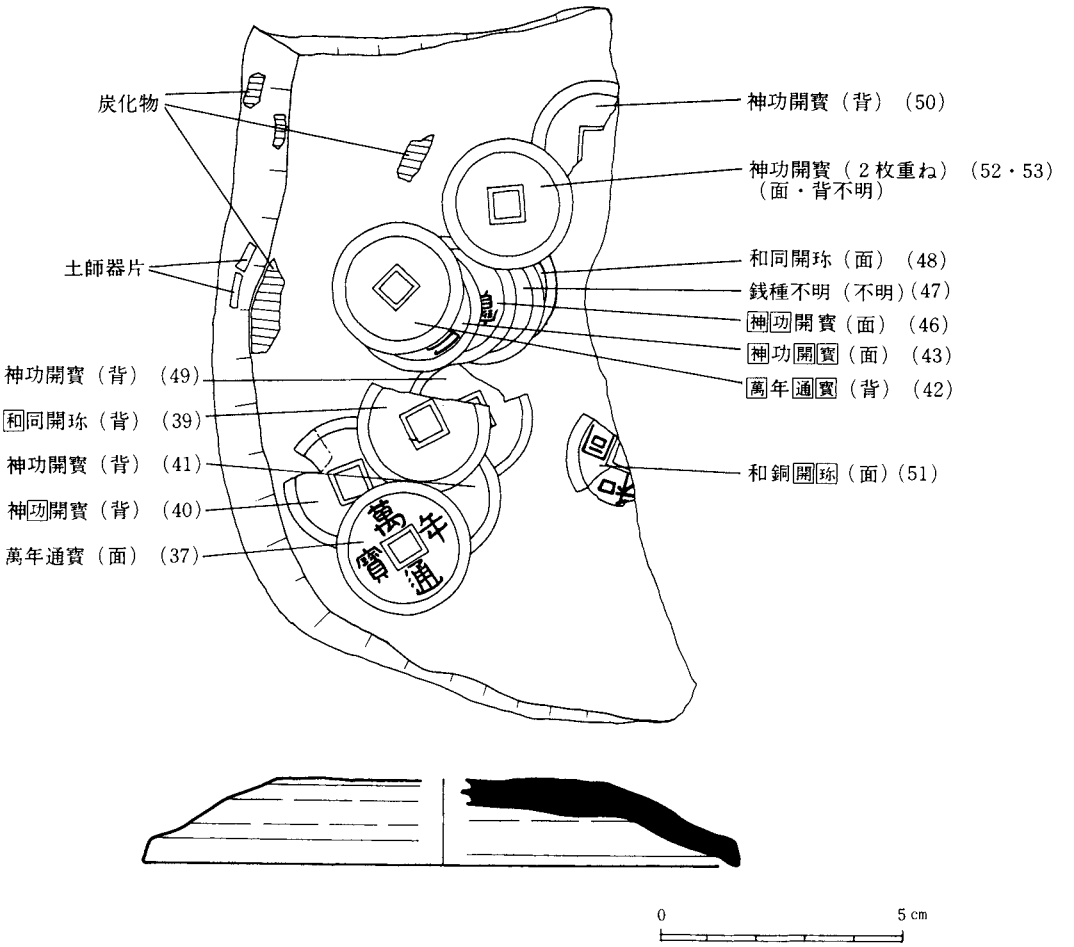
F－20区1号溝　北宋銭3枚。59は「天聖元寶」（てんせいげんほう）（楷書体）の完形品である。外径2.46cm、内郭径0.69cm、厚み0.12cm、重量 2.2gである。60は「嘉祐元寶」（かゆうげんほう）（篆書体）の完形品。外径2.34cm、内郭径0.61cm、厚み0.11cm、重量 1.7gである。61は「至道元寶」（しどうげんほう）（行書体）で約⅒を欠失する。外径2.44cm、内郭径0.61cm、厚み0.14cmである。（以下、中世の渡来銭である）。

D－23区包含層　近世銭1枚。62は「寛永通寶」の完形品。一般的に「古寛永」とよばれているものである。外径2.46cm、内郭径0.61cm、厚み0.12cm、重量2.3gである。

B－15・16区出土の皇朝十二銭（焼土塊）

皇朝十二銭は他の遺物とともに焼土塊（注1）に含まれていたものである。これの出土については、調査地B－15・16区の包含層を掘進中に発見したというが、その出土地点については不明であるという。これの出土を包含層のみとすることについてはやや決めかねる面もある。それは、多量の銭貨が集中して含まれていることや他遺物との共存状態からみて、またピット648とピット840の両ピットの出土銭貨事例が示すように、B－16区内に存在するピット560から出土した可能性が高いと考えられるからである（注2）。

ところで、焼土塊には皇朝十二銭の他、須恵器片、土師器片、炭化物など多種の遺物が共伴していた。その側面には土師器片や炭化物の露出が認められ、また一方の側面端においては「和同開珎」・「神功開寶」の破損銭が残存していたことなどから、この焼土塊が遺物の総体でないことを示していると思われた。しかし、銭貨の埋置状態を調べるため土除去作業を行ったところ、



第57図　B－15・16区出土の皇朝十二銭・須恵器（焼土塊）
（番号は第３表の番号と符合する）

これが大半を占めていたことが推測できた。

第57図は焼土塊の土を上から順にとり除いて図示した銭貨の埋置状態である。これをみると、42～47の銭貨が大体重なって錆着状態となっている。このことは銭貨を重ねて置いたことを示すものと思われる。また、37～41・49ではほとんど重なった状態ではないが、重ねて置かれていたものが崩れたものと思われる。その他に、４枚の銭貨がこれらと分離してまとまりなく別々の位置にみられる。それでは、つぎに銭貨の面・背の置きかたが規則的に行なわれているかみてみたい。

37「萬年通寶」は面を上にして置かれている。（以下、面・背と略記）。38「神功開寶」(背)、39「和同開珎」（背）、40「神功開寶」（背）、41「神功開寶」（背）、49「神功開寶」（背）である。一方、42のブロックでは42「萬年通寶」(背）、43「神功開寶」（面）、44は不明銭（不明）、45「神功開寶」（背）、46「神功開寶」(面）、47は不明銭（不明）、48「和同開珎」（面）である。52・53の２枚は「神功開寶」が重なっていたが、観察する前に既に分離していたため（不

明）である。50「神功開寶」（背）、51「和同開珎」（面）である。

先にも述べたが、これが遺物の全体ではないが、この資料をみる限りでは「和同開珎」３枚、「萬年通寶」２枚、「神功開寶」10枚、不明銭４枚である。一応、ここでは不明銭を除外することとして、「和同開珎」、「萬年通寶」、「神功開寶」の３銭貨が同数ではなく、ばらばらの枚数であることがわかる。そして、銭貨の面・背の置きかたについても、何ら規則性がみられない。ただ、「萬年通寶」が両ブロックの一番上に置かれている点は偶然であるのか、意識上の行為なのか注意がひかれる。また、焼土塊から検出された銭貨の種類は皇朝十二銭のうちでも、奈良時代に鋳造された３銭貨で占められており、「隆平永寶」（796年鋳造）以降に鋳造された銭貨は埋置されていなかったこともあわせて注目される点である。

その他に共伴して検出されたものとしては、須恵器片、内面黒色土器片、土師器片、小礫、多量の炭化物、焼土である。第57図の須恵器蓋片は、銭貨のやや下位より出土したもので、口径は12.4cm、天井高 1.8cm（共に推定）をはかる小振りなものである。扁平なタイプを呈し、天井部はヘラおこしの後、ナデ回し調整がなされている。天井部平坦面から肩部へは明瞭な段が認められる。肩部は張りぎみに傾斜しつつ、口縁上部に狭い面をつくる。口唇部の立ちあがりはやや外方に開き屈曲しておさめている。天井部にヘラケズリ痕がみられず、口縁部の特徴などから、吉岡康暢氏[注3]の編年によれば、奈良時代後半の II_2期和気（わけ）第１号窯から平安時代前半 III_1期戸津（とつ）第５号窯の範疇に位置づけられるものと思われる。

地鎮

今日、我々が建物を建立するに先だち、その敷地内において一般的に行う祭祀を地鎮祭とよんでいる。こうした祭祀行為は古代においても行われていたことが発掘調査などからも窺える。[注4] しかし、古代における地鎮は寺院の基壇や官衙の柱の掘方などにみられることから、特定の建物の場合やそれを行う地域全体を対象として祭祀が行われていたと考えられている。[注5] 建物を建てる際、地の神を鎮め、そして工事の無事、安全および未来永劫の平安を祈願して祭祀供養の儀式が執り行なわれていたのである。

当遺跡においても、そのような祭儀が行われたことを窺わせる遺構などが調査区の中程に比較的近接して確認された、それは銭貨埋納ピット３ヶ所と包含層ではあるが８枚の銭貨が集中して出土した箇所、合せて４ヶ所が検出されている。それらの出土概要を記すと、D―22区ピット840は径26cm、深さ10cmの浅いピットである。22号掘立柱建物（３間×３間）のほぼ中心にあたる位置に穿たれており、「萬年通寶」２枚、不明銭13枚を埋納してあった。共伴遺物は確認されていない。B―18区ピット648は径30cm、深さ18cmの略円形を呈するピットで埋納銭貨は「隆平永寶」11枚、不明銭１枚であった。直接、これと結びつくと思われる特定の建物は現段階ではみられない。[注6] B―16区ピット560は径60cm、深さ20cmの略円形を呈するピットである。そこより出土した可能性が考えられる焼土塊から「和同開珎」３枚、「萬年通寶」２枚、「神功開寶」10枚、不明銭４枚が出土した。12号掘立柱建物（２間×２間）の東に近接する。E―18区包含層から「和同開珎」１枚、「萬年通寶」、「神功開寶」各３枚、不明銭１枚が出土している。

それでは、従来から検出されている銭貨埋納ピットを、掘立柱建物の埋納位置によって以下の

ように分類する。(注7)

Ⅰ類　掘立柱建物の柱穴内に埋納するもの。

Ⅰ－a類　身舎に埋納するものの内、四隅の柱穴に埋納するものを a^1類、桁行・梁行・間仕切りの中央にある柱穴に埋納するものを a^2類、それ以外の柱穴に埋納するものを a^3類とに細分する。

Ⅰ－b類　掘立柱建物廂部柱穴に埋納するもの。

Ⅱ類　掘立柱建物の敷地内に埋納するもの。

Ⅱ－a類　敷地内中央に埋納するもの。

Ⅱ－b類　中央以外に埋納するものの内、桁行・梁行の中心に埋納するものを b^1類、それ以外に埋納するものを b^2類とに細分する。

Ⅲ類　掘立柱建物の敷地外に埋納するもの。

Ⅲ－a類　掘立柱建物に近接して埋納するもの。

Ⅲ－b類　掘立柱建物と直接結びつかず離れて埋納するもの。

Ⅳ類　金堂・講堂・塔・伽藍に埋納するもの。

Ⅳ－a類　金堂・講堂の須弥壇に埋納するものの内、その中央に埋納するものを a^1類、縁辺に埋納するものを a^2類とに細分する。

Ⅳ－b類　塔心礎周辺に埋納するもの。

Ⅳ－c類　基壇築成土に埋納するもの。

Ⅳ－d類　それ以外の箇所に埋納するもの。

Ⅴ類　建物がともなわず多量の銅銭を一括埋納するもの。

以上の15分類にすることが可能である。そこで当遺跡の検出例をこの分類にあてはめると次のようになる。ピット840はⅡ－a類、ピット648はⅢ－b類、ピット560はⅢ－a類に対応する。さらにこの分類を県下において検出された銭貨埋納例と対応させると、七尾市能登国分寺跡塔心礎周辺の埋納はⅥ－b類(注5)、羽咋市寺家遺跡砂田地区01A建物の埋納はⅠ－a^2類(注8)、金沢市戸水C遺跡第16号掘立柱建物はⅠ－a^3類(注9)、同千木ヤシキ田遺跡第9号建物（SX11）はⅡ－b^2類、同第10号建物（SX14）はⅠ－a^3類、同第11号建物（SX12）はⅠ－a^2類、同第12号建物（SX15）はⅠ－a^1類、（SX13）はⅡ－b^1類、（SX16）はⅠ－b類である(注10)。同三小牛サコ山遺跡の埋納はⅤ類(注11)、小松市高堂遺跡06棟（60号）はⅠ－a^3類(注12)、117号、116号は各Ⅲa類(注13)にそれぞれ対応する。

上記した、これらの埋納例は15例と寡少ではあるが、分類ごとに整理して掲げてみる。

Ⅰ－a^1類　千木ヤシキ田第12号建物（SX15）……（以下、遺跡省略）

Ⅰ－a^2類　寺家砂田地区01A建物、千木ヤシキ田第11号建物（SX12）

Ⅰ－a^3類　戸水C第16号建物、千木ヤシキ田第10号建物（SX14）、高堂06棟建物

Ⅰ－b類　千木ヤシキ田第12号遺跡（SX16）

Ⅱ－a類　敷地鉄橋ピット840

Ⅱ－b^1類　千木ヤシキ田第12号遺跡（SX13）

Ⅱ－b^2類　千木ヤシキ田第9号遺跡（SX11）

Ⅲ－a 類　高堂117号、同116号、敷地鉄橋ピット560

Ⅲ－b 類　敷地鉄橋ピット648

Ⅳ－d 類　能登国分寺跡塔心礎

Ⅴ　　類　三小牛サコ山

以上のように11分類できた、Ⅰ類が7例、Ⅱ類3例、Ⅲ類4例、Ⅳ・Ⅴ類が各1例の内訳である。このなかで最も多いタイプはⅠa^3類とⅢa類で各3例みられる。次いで多いタイプはⅠa^2類で2例がみとめられ、残りの7タイプは各1例であった。この分類によると、県下では身舎の四隅の柱穴、桁行・梁行・間仕切りの中心の柱穴以外の柱穴に埋納するものと、特定の建物の敷地外に近接して埋納する例が多いことが認められた。これに対して、平城京内の官人の邸宅跡発掘調査では鎮物埋納例が5例確認されている。そのうちの3例が、身舎の四隅の柱穴に埋納されていると報告(注14)されている。このように、県下の埋納例と平城京内での埋納例とにおいて、若干の違いがみられる。

さて、当遺跡ピット840の埋納例は県下では初見である。22号掘立柱建物敷地内の中心に埋納ピットが穿たれていることは、この建物を対象に地鎮供養を行なったことは明らかである。埋納銭貨は15枚、うち「萬年通寶」が2枚みとめられることから、この埋納はすくなくとも鋳造年の西暦760年以前に遡りえないことは確かである。当建物の年代が奈良時代後半に位置づけられていることから、年代的な齟齬は生じないものと考えられる。

ピット560は高堂遺跡の2例につづき3例目である。12号掘立柱建物の約3ｍに東接して穿たれていることから、当建物を対象とした地鎮供養である可能性が考えられる。埋納銭貨は19枚、「和同開珎」・「萬年通寶」・「神功開寶」の15枚がみとめられ、残りは不明であるが、埋納銭貨は奈良朝3銭貨の可能性が高い。共伴の須恵器蓋片の帰属年代を奈良時代後半（II_2期）～平安時代前半（III_1期）の範疇に捉えている。12号建物の年代が奈良時代に比定されている。

ピット648は県下で初例のものである。南と北に偏在した建物跡群の頂度中程の位置に穿たれており、周囲に直接これと結びつくような特定の建物が存在しない。埋納銭貨は12枚、うち「隆平永寶」が11枚みとめられ、不明銭は1枚である。「隆平永寶」の同一銭貨埋納と考えられ、前2者より後出的な要素がみうけられる。建物跡群の時期については、配置や方位の変化からⅡ期以上の建替が行なわれたことが窺知でき、本地鎮は後期の建物跡群を対象にした可能性が考えられる。

以上のことから、ピット840、ピット560、ピット648の埋納時期について推測が許されるならば、若干触れてみたい。ピット840の所在する22号建物は奈良時代後半に位置づけられており、当該時期もこれに比定されよう。P560は共伴遺物や12号建物の年代から推して奈良時代後半～末頃に位置づけられよう。しかし、両埋納は同時期頃の可能性もあるが、時期差があってもそれほど有しないものと思われる。ピット648は前2者より若干時期的な隔たりが考えられ、平安前期～中頃に位置づけられよう。したがって、当埋納時期はピット840からピット560、ピット648の順に埋納されたと推測される。

ところで、埋納方法については同一遺跡においても一様でないことがわかる。すなわち、埋納

位置、ピットの形状、銭貨の多寡・種類、ピット内での銭貨の位置などである。これらの違いについては、建物の役割・規模的な相違、あるいは対象とするものの違い、時期・時間的な変化、さらに陰陽師(注15)の違いなどに起因するものと考えられるが、現段階ではその相違、詳細については不明である。

さて、今回本遺跡で発見された地鎮遺構の埋納時期を、埋納状況などから推して奈良時代後半～平安時代中頃の範疇に捉えることができた。それらは、本建物跡群の年代とおおむね符合すると思われる。建物跡群は南と北に群在しているが、その配置・方位において計画的、規則性がみられる、こうした秩序性を有する建物跡群は、一般的集落跡の可能性も充分考えられるが、むしろ寺院や官衙など特定のものを対象にして行なわれたといわれる地鎮供養の儀式が本遺跡においても数例行なわれていることや位置的環境(注16)を考慮するならば、本建物跡群は特定（公共性(注17)）の建物と考えたほうが妥当性が高いように思われる。そうすれば、本地鎮行為と建物跡群が比較的無理なく結びつき、理解もできよう。ともあれ、本地鎮遺構は律令期の祭儀研究を進めていくうえで貴重な資料であり、今後の類例の増加をまって検討・究明を重ねていきたいと考えている。

石川県内で出土した皇朝十二銭の出土例は、管見によれば現在までのところ26例を数える。下表はこれらの出土地を北部から順に掲げたものである。

第4表　県内の皇朝十二銭出土地一覧表

国	出土地（遺跡名）	和同 銀	和同 銅	萬年	神功	隆平	富壽	承和	長年	饒益	不明	合計	出土年次	備考
能登国	珠洲市三崎町・粟津小学校遺跡		1									1	昭10年	多量の土師器と共伴 (18)
	門前町深田・マエダ遺跡		25									25	昭48年	須恵器壺に内蔵(19)
	鹿島町武部・武部古銭出土遺跡				1							1	昭36年	備蓄銭中より(20)
	鹿西町金丸・杉谷川遺跡					11						11	昭32年	土師質壺に内蔵(21)
	鹿西町金丸・金丸宮地遺跡					11						11	昭35年	小壺に内蔵(22)
	七尾市国府町・能登国分寺跡		6									6	昭37年	塔心礎付近より須恵器に内蔵(23)
	富来町高田・高田遺跡					1						1	昭44年	包含層より(24)
	富来町田中・田中遺跡		1									1	昭61年	包含層より(25)
	志賀町坪野・坪野中世墳墓群					1						1	昭52年	蔵骨器に内蔵(26)
	押水町北川尻・ほしば山遺跡		2									2	昭49年	竪穴住居跡より(27)
	羽咋市吉崎・次場町・吉崎・次場遺跡		1									1	昭58年	発掘中より(28)
	羽咋市寺家町・寺家遺跡		14	6	13	7	3	1		1		45	昭54年	竪穴住居・井戸・柱穴・包含層などより(29)

国	出土地（遺跡名）	和同 銀	和同 銅	萬年	神功	隆平	富壽	承和	長年	饒益	不明	合計	出土年次	備考
加賀国	内灘町地内（地点不明）		1									1		(30)
	金沢市戸水町・戸水C遺跡		1		1						1	3	昭57年	掘立柱建物柱穴掘方より(31)
	金沢市千木町・千木ヤシキ田遺跡		5	10	24		6				5	50	昭59年	掘立柱建物柱穴、埋納ピットより(32)
	金沢市三小牛町・三小牛サコ山遺跡		580									580	昭32年	鉄鋌、金銅鈴、土師器片共伴(33)
	野々市町・末松廃寺跡	1										1	昭36年	金堂西側付近より(34)
	小松市高堂町・高堂遺跡		4	22	12	1					29	68	昭55年	柱穴・埋納ピットより(35)
	〃　漆町・漆町遺跡				1							1	昭56年	包含層より(36)
	加賀市西島町・西島遺跡		?									?	寛政年間	畠中より瓦に内蔵(37)
	〃　・　〃		50									50	明30年	甕に内蔵(38)
	〃　・　〃		?									?	昭6年	(39)
	〃宮地町・宮地火葬墓遺跡		13									13	昭32年	須恵器蓋杯に内蔵(40)
	〃篠原新町・篠原新遺跡		5									5	昭34年	須恵器、土師器、鉄製品、鉄滓共伴(41)
	〃　・　〃						1					1	昭36年	鉄製紡錘車、刀子、土器など共伴(42)
	〃敷地町・敷地鉄橋遺跡		5	7	13	11					20	56	昭58年	埋納ピット、包含層より(43)
合計		1	714	45	64	43	10	1	0	1	55	934		

（注）　本表の作成は、戸澗幹夫『高堂遺跡第Ⅲ次発掘調査概報』石川県立埋蔵文化財センター1982年、第4表を一部改訂し、加筆したものである。枚数の不明なものについては？を付した。（　）内の数字は注番号を示す。

（注）

(1)　土の塊には焼土と多量の炭化物、そして多種の含有物がみられ、火をうけたことは歴然とわかった。長さ約15cm、幅約7cm、厚み約7cmを呈した恰好で掘りあげられていた。

(2)　しかし、ピット560からの出土としても、その位置はピットの上位と考えたほうが穏当であろう。

(3)　吉岡康暢「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会　1983年。

(4)　地鎮にともなう鎮物埋納品と推定される銭貨・須恵器・土師器などの遺物が発見されている。

(5)　森　郁夫　「古代の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29　特集地鎮・鎮壇　元興寺文化財研究所　1984年。

(6)　調査区域の制限によって、埋納ピットの東側は発掘調査されていない。したがって、未調査地に掘立柱建物が遺存している可能性が充分考えられる。

(7)　今回の分類に際しては、ピットの形状を考慮せずに行った。また、外容器に皇朝十二銭を納入して出土したものも除外した。

(8)　桁行9間、梁行2間の東西廂付南北棟建物の間仕切りの中心柱穴より「隆平永寶」1枚出土。

(9)　桁行3間、梁行2間の南北棟西側柱列北第2柱穴掘方より「和同開珎」・「神功開寶」・不明銭各1枚、計3枚出土。

(10)　第9号建物、桁行8間以上、梁行4間の東西両廂付南北棟敷地内に埋納された可能性が高いＳＸ11より「萬年通寶」2枚、「神功開寶」3枚、「富壽神寶」4枚、不明銭1枚、計10枚出土。第10号建物は第9号建物の建替えで同規模である。西側柱列南第4柱穴ＳＸ14より「和同開珎」2枚、「萬年通寶」1枚、「神功開寶」4枚、計7枚出土。第11号建物、桁行2間以上、梁行2間の南北棟北側柱列の中心柱穴ＳＸ12より「和同開珎」

1枚、「萬年通寶」2枚、「神功開寶」7枚、不明銭3枚、計13枚出土。第12号建物、桁行5間、梁行3間の西廂付南北棟の身舎西北隅柱穴ＳＸ15より「萬年通寶」1枚出土。同建物敷地内の東側柱列寄りの中心ＳＸ13より「和同開珎」2枚、「萬年通寶」2枚、「神功開寶」6枚、「富壽神寶」1枚、計11枚出土。同西廂柱列北第2柱穴ＳＸ16より「富壽神寶」1枚出土。その他に、ＳＸ17より「萬年通寶」2枚、「神功開寶」4枚、不明1枚、計7枚が検出されているが、ＳＡ03ライン上の何れのピットから出土したものか不明である。

(11) 「和同開珎」が大量580枚出土。共伴遺物として、鉄鏃、金銅鈴、土師器片が出土している。

(12) 戸澗幹夫氏によれば、06棟桁行4間以上、梁行2間以上の建物東柱列南第2柱穴から出土。

(13) 石川県立埋蔵文化財センター　『高堂遺跡―第Ⅲ次発掘調査概報―』　1982年。

(14) 松村恵司　「平城京における地鎮」『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1984年。

(15) 「令義解」『国史大系』第二部2　36頁　（中務省陰陽寮の規定によると「天文、暦数、風雲気色を掌る」、陰陽師は「占い筮いて地を相ることを掌る」と示されている）

(16) 東約 4.5kmに郡衙もしくは庄園庄所と考えられている西島遺跡が所在する。

(17) 建物跡の規模、配置、陸上交通の要衝、また調査地の西に流れる河川の水運などの至便さから穀物などを収納する施設、すなわち、官衙に付随する倉庫施設群（郷倉）の可能性も考えられよう。

(18) 石川考古学研究会々員和嶋俊二氏より御教示を受ける。

(19) 石川考古学研究会　『石川考古』第139号　石川考古学研究会　1982年。

(20) 芝田悟整理中による。

(21) 石川考古学研究会　『石川考古学研究会々誌』第9号　石川考古学研究会　1965年。

(22) 鹿西町役場　『広報ろくせい』第246号　鹿西町役場　1981年。

(23) 七尾市史編纂専門委員会　『七尾市史』資料編第四巻　七尾市役所　1970年。

(24) 富来町史編纂委員会　『富来町史』資料編　富来町役場　1974年。

(25) 石川県立埋蔵文化財センター専門員平田天秋氏より御教示を受ける。

(26) 芝田　悟　『多太神社境内遺跡』　多太神社　1984年。

(27) 押水町史編纂委員会　『押水町史』　押水町役場　1974年。

(28) 注26に同じ。

(29) 注26に同じ。

(30) 注26に同じ。

(31) 石川県立埋蔵文化財センター　『金沢市戸水Ｃ遺跡』　金沢港泊地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告　石川県立埋蔵文化財センター　1986年。

(32) 金沢市教育委員会　『金沢市千木ヤシキ田遺跡』　金沢市・金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合　1987年。

(33) 石川県立埋蔵文化財センター保管の昭和32年度「埋蔵文化財提出書」

(34) 野々市町教育委員会　『史跡末松廃寺』―第一次（昭和41年度）調査概報―　野々市町教育委員会　1967年。

(35) 注26に同じ。

(36) 石川県立埋蔵文化財センター　『高堂遺跡』―第Ⅲ次発掘調査概報―　石川県立埋蔵文化財センター　1982年。

(37) 「加賀江沼志稿」・大聖寺藩領地誌天保年間。

(38) 石川県立大聖寺高等学校郷土研究部　『郷土』昭和25年より52年までの調査報告復刻集　石川県立大聖寺高等学校郷土研究部　1978年。

(39) 加賀市史編纂委員会『加賀市史』通史上巻　加賀市役所　1978年。

(40) 石川県教育委員会　『石川県遺跡地名表』　石川県教育委員会　1980年。

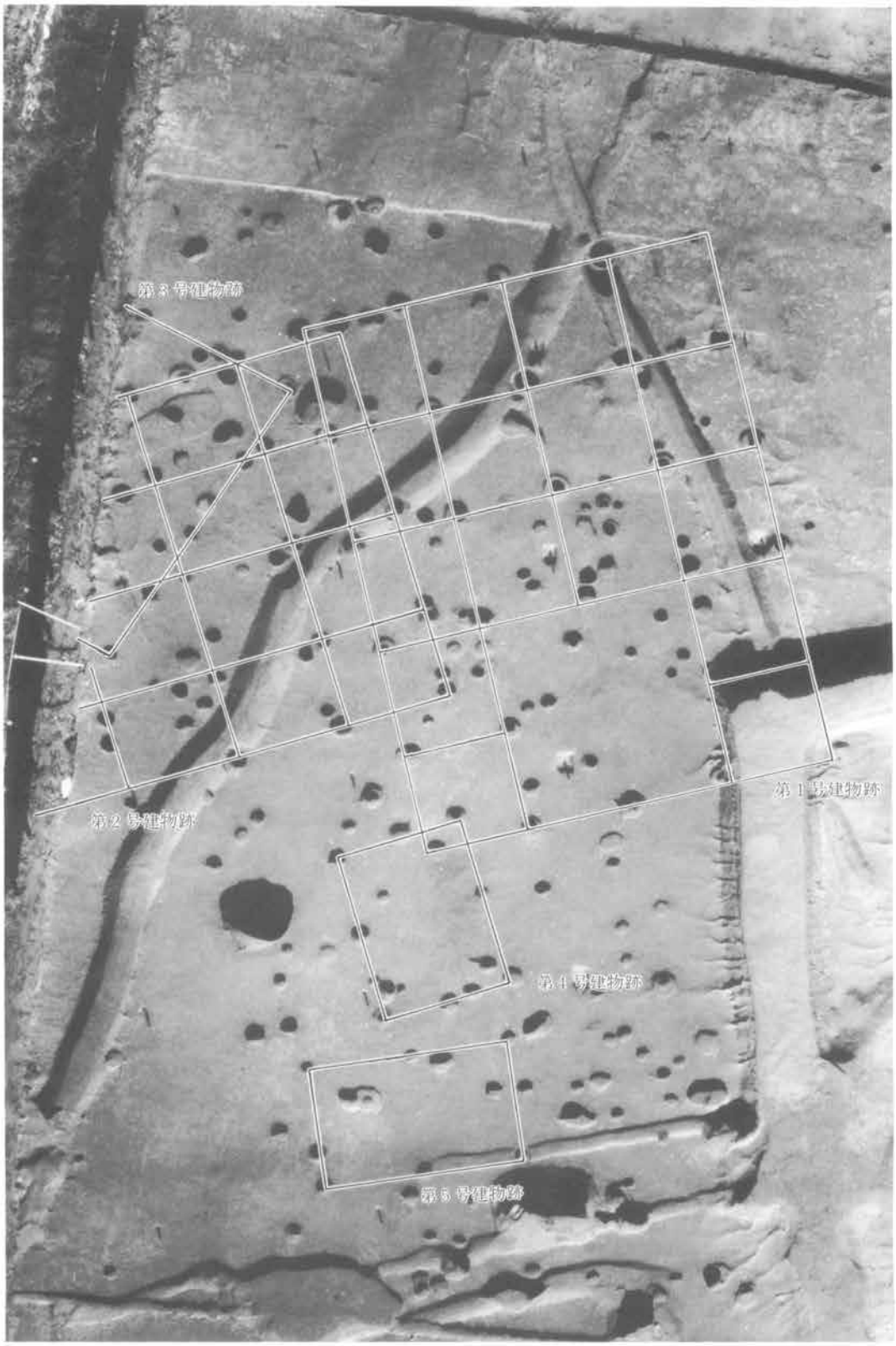
(41) 橋本澄夫　『石川県考古学便覧Ⅰ』　株式会社北国出版社　1970年。

(42) 注41に同じ。

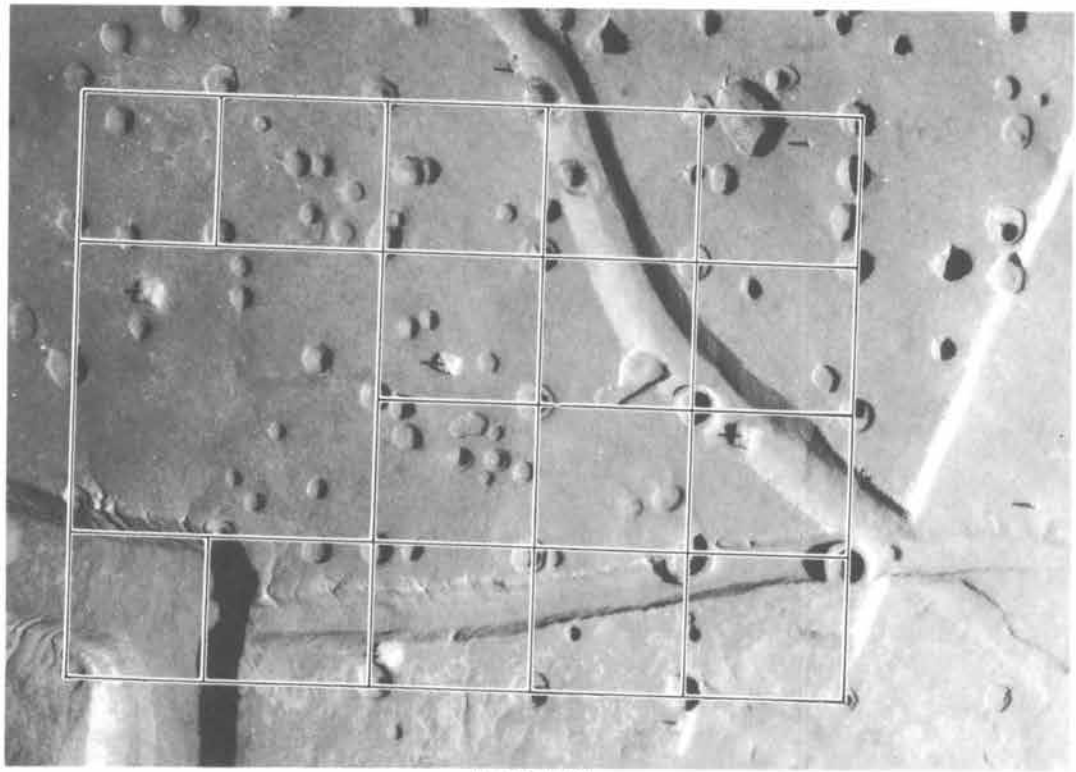
(43) 本報告書による。

図　　版

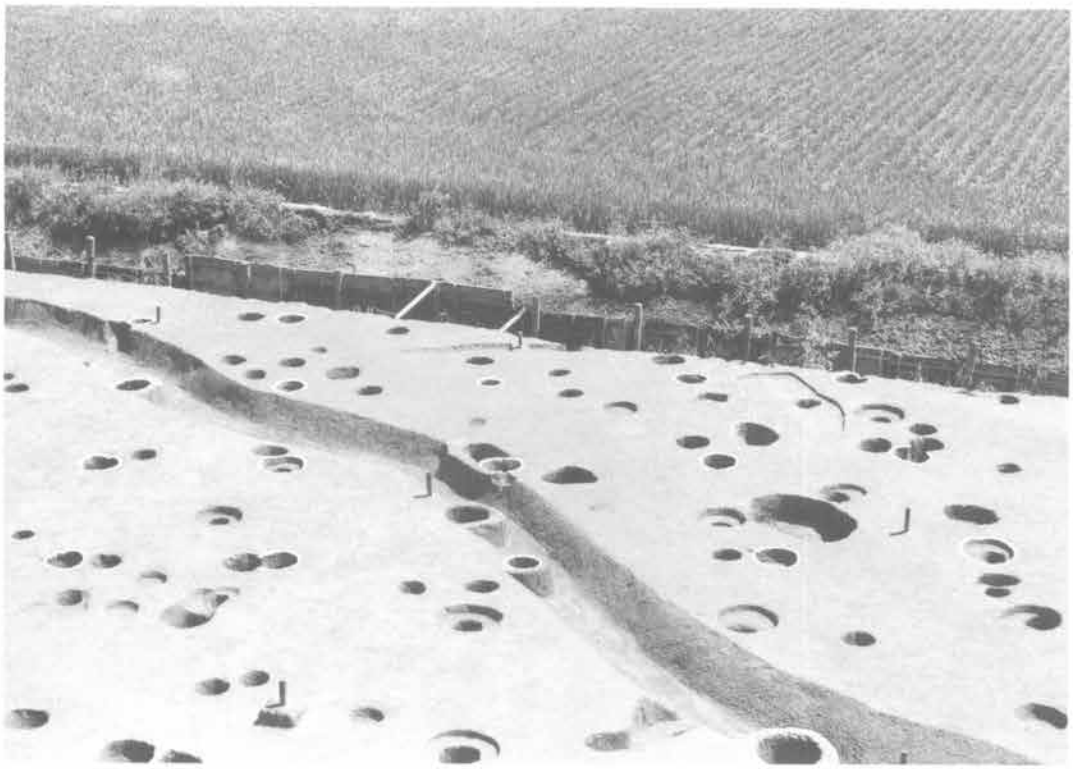
図版1



南側建物跡群（1～5号）

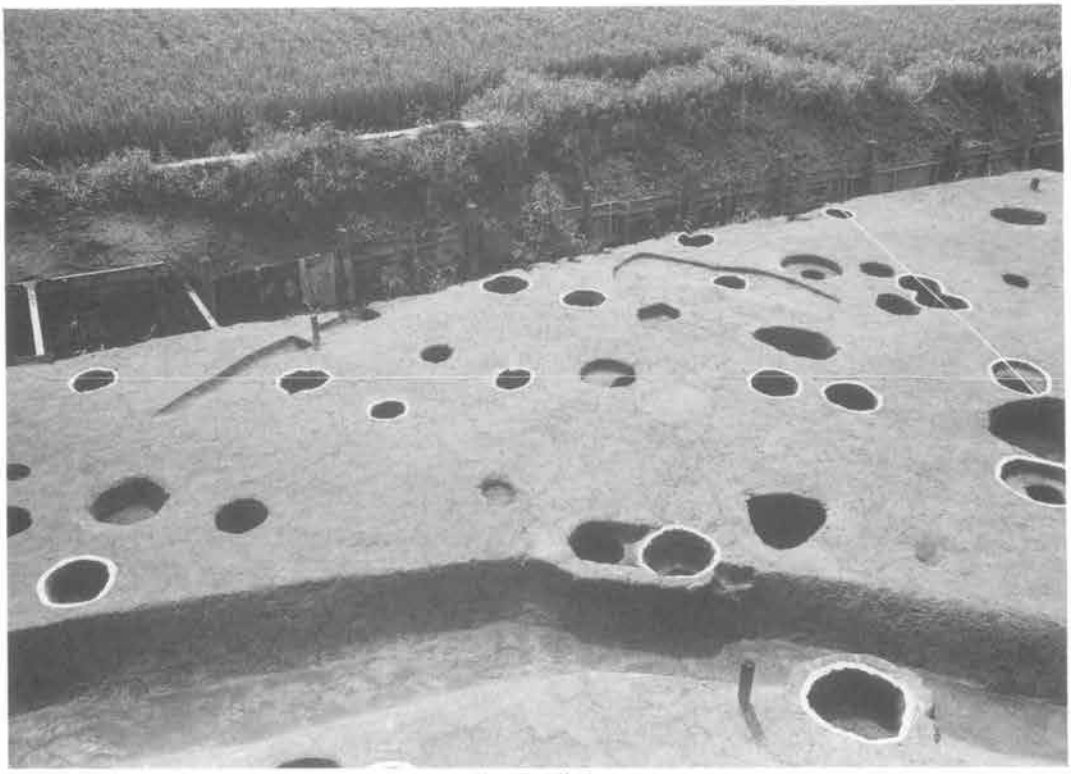


第1号建物跡

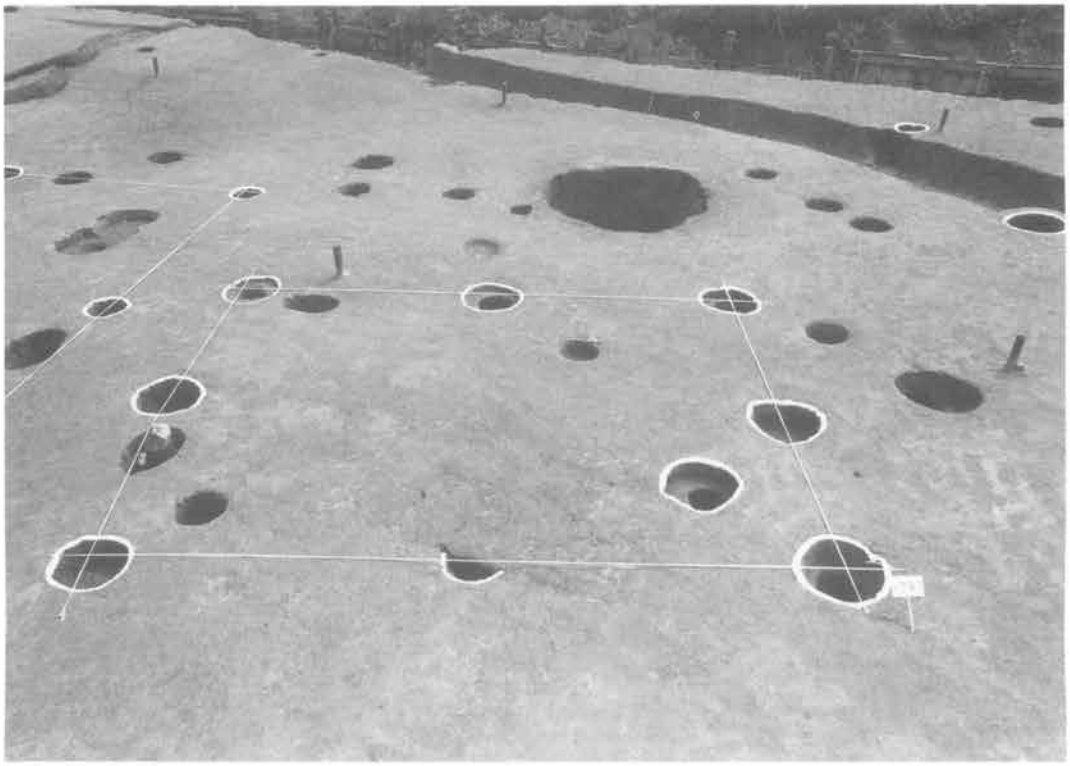


第2号建物跡(白線)

図版3

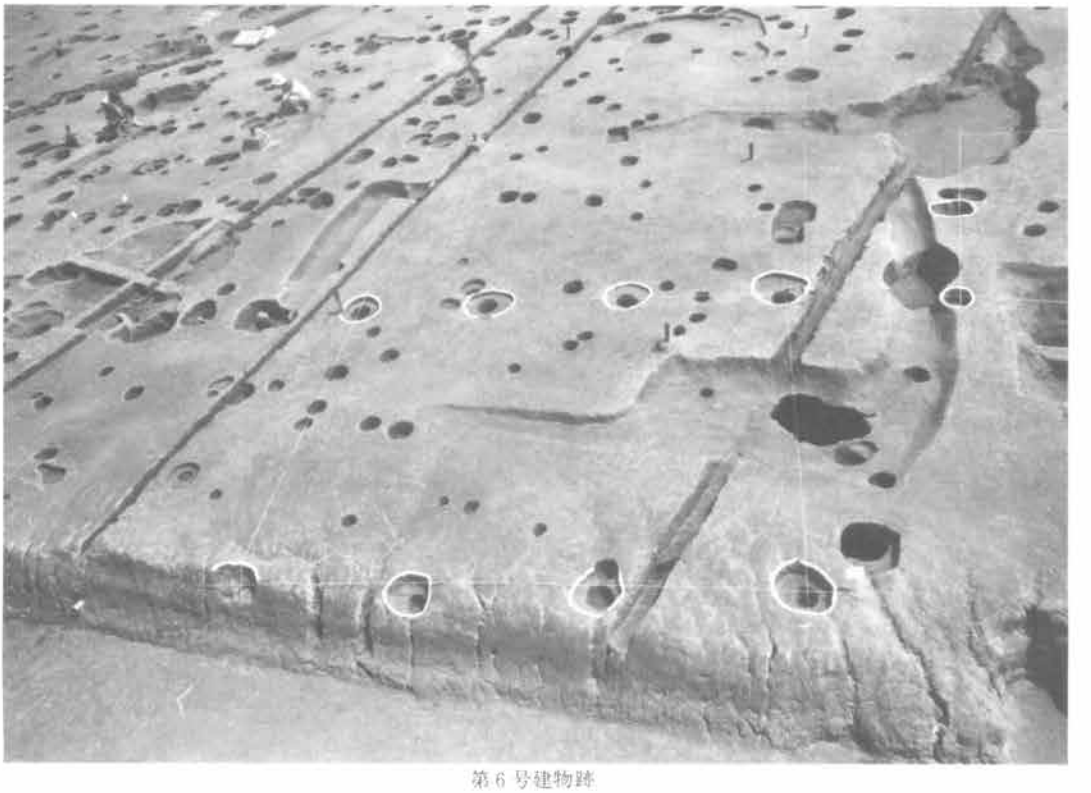


第3号建物跡



第4号建物跡

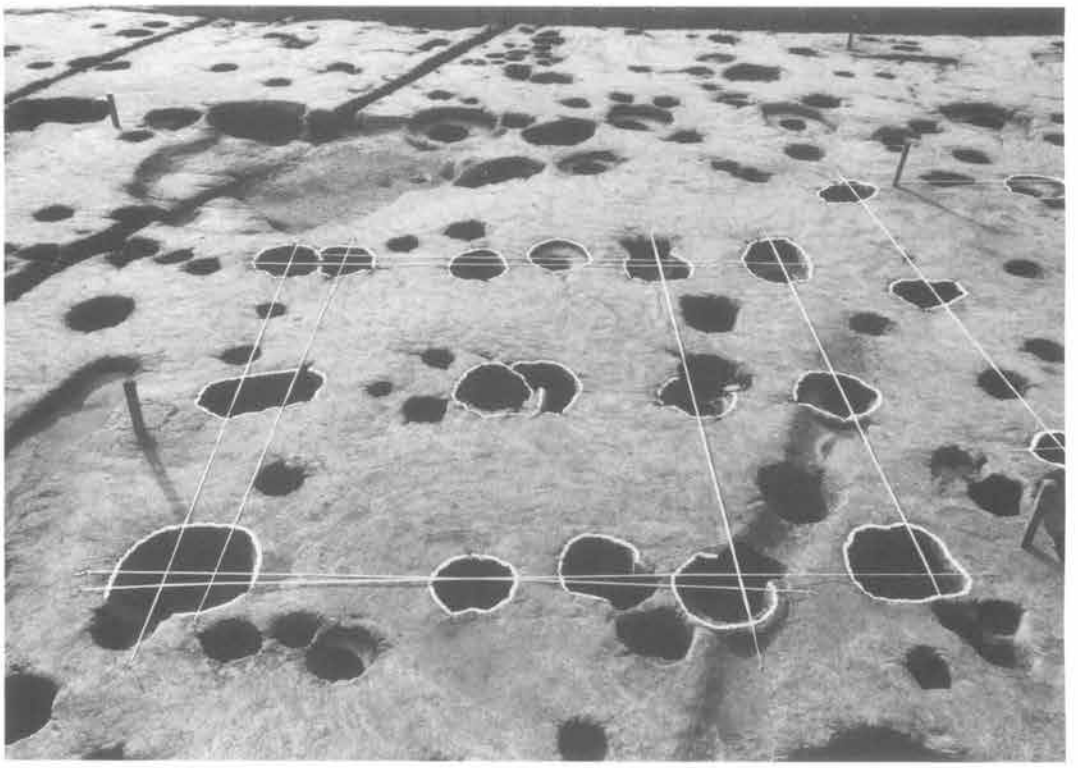
第5号建物跡



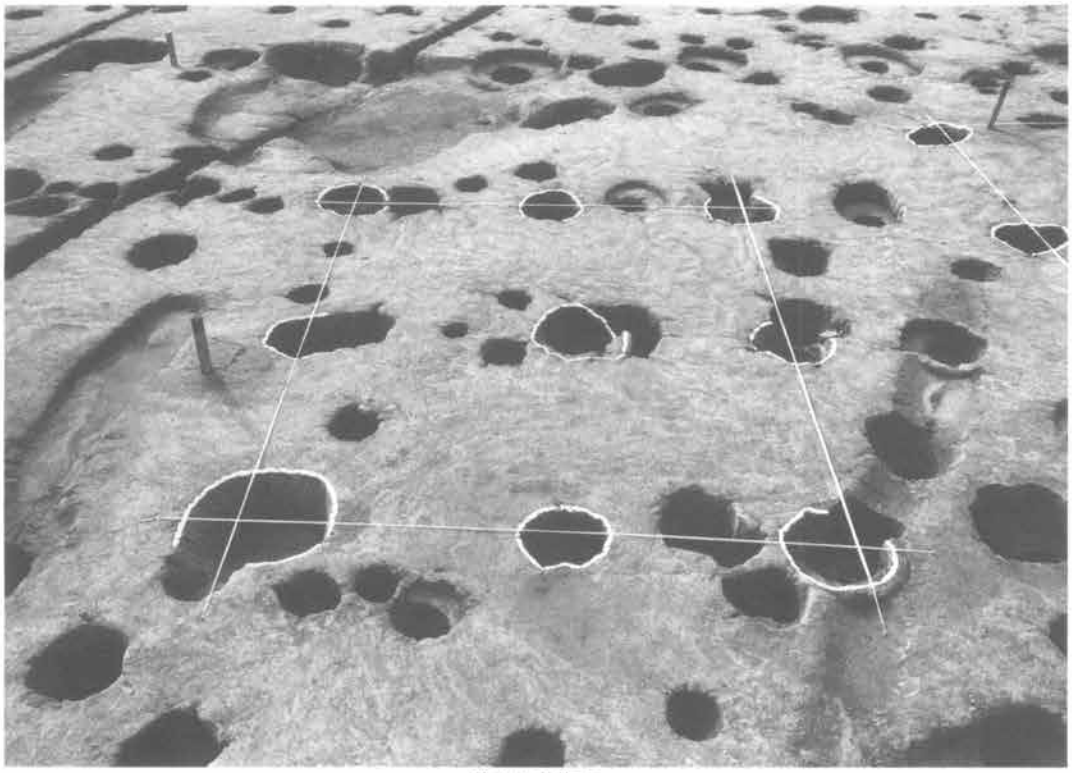
第6号建物跡

図版5

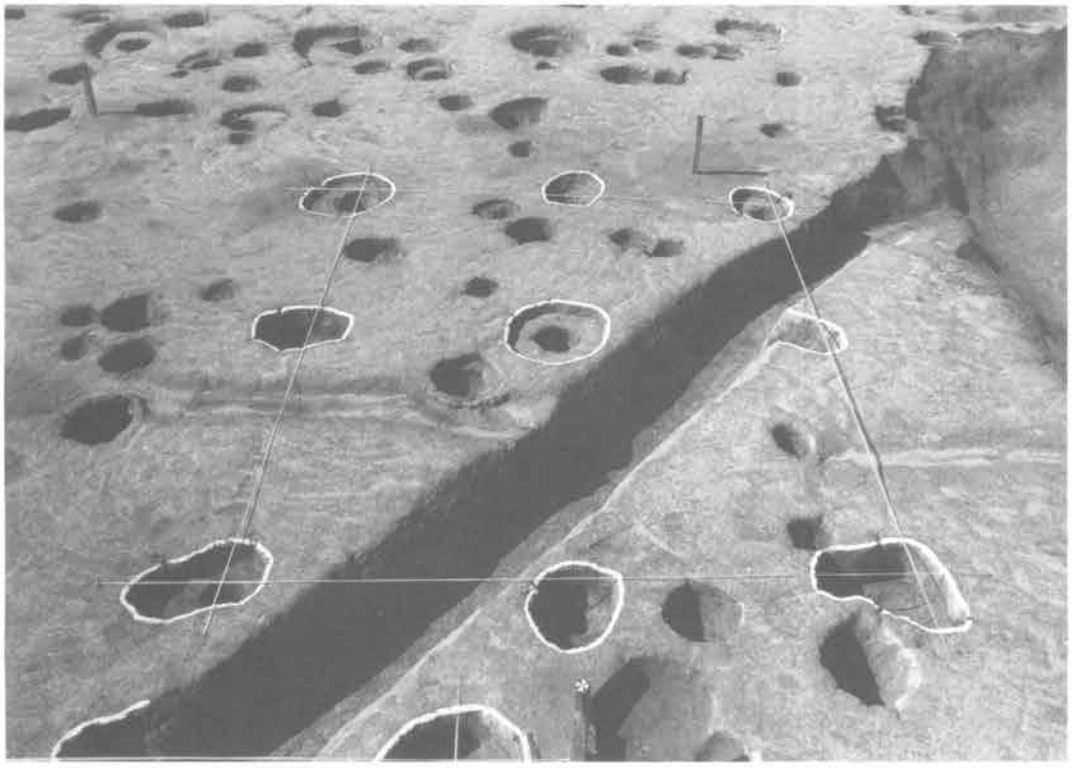
第7号建物跡



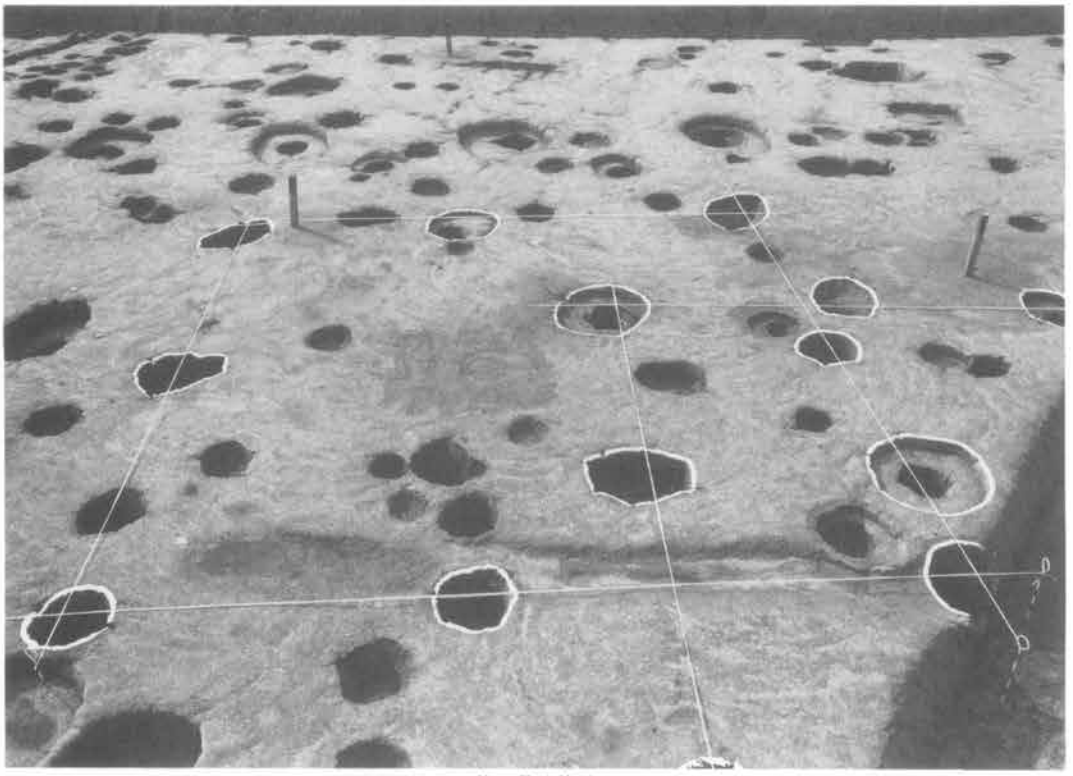
第8号(右)・第9号(左)建物跡



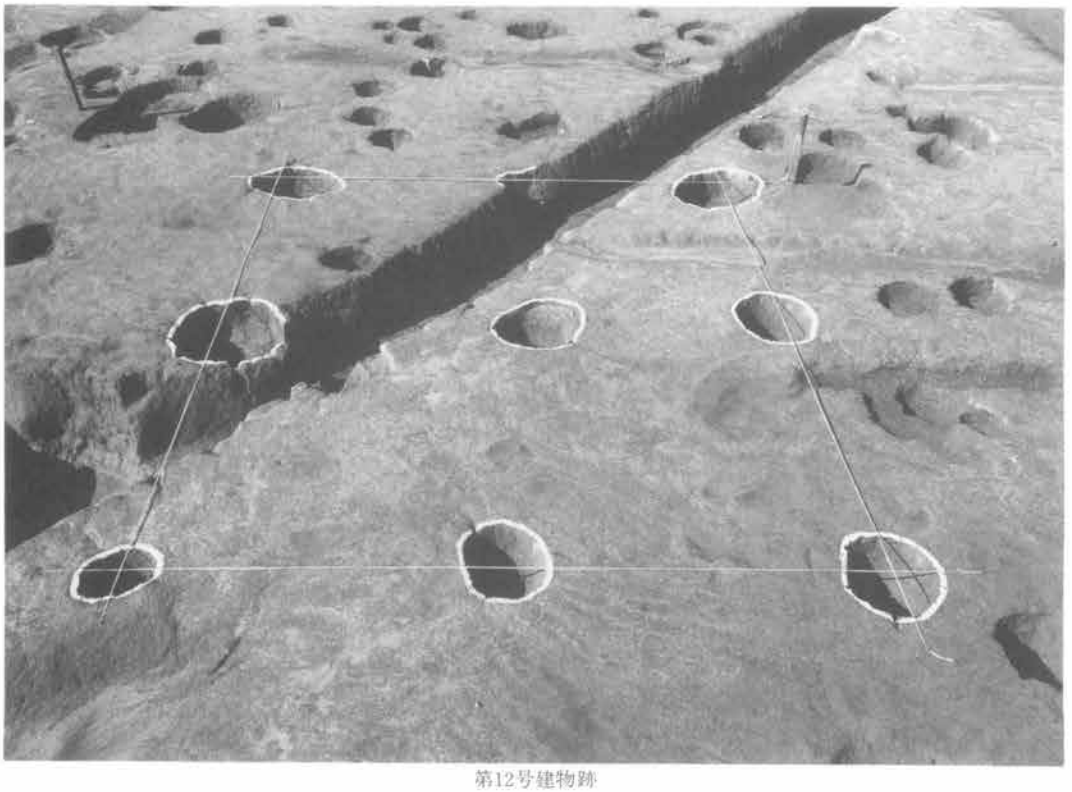
第9号建物跡



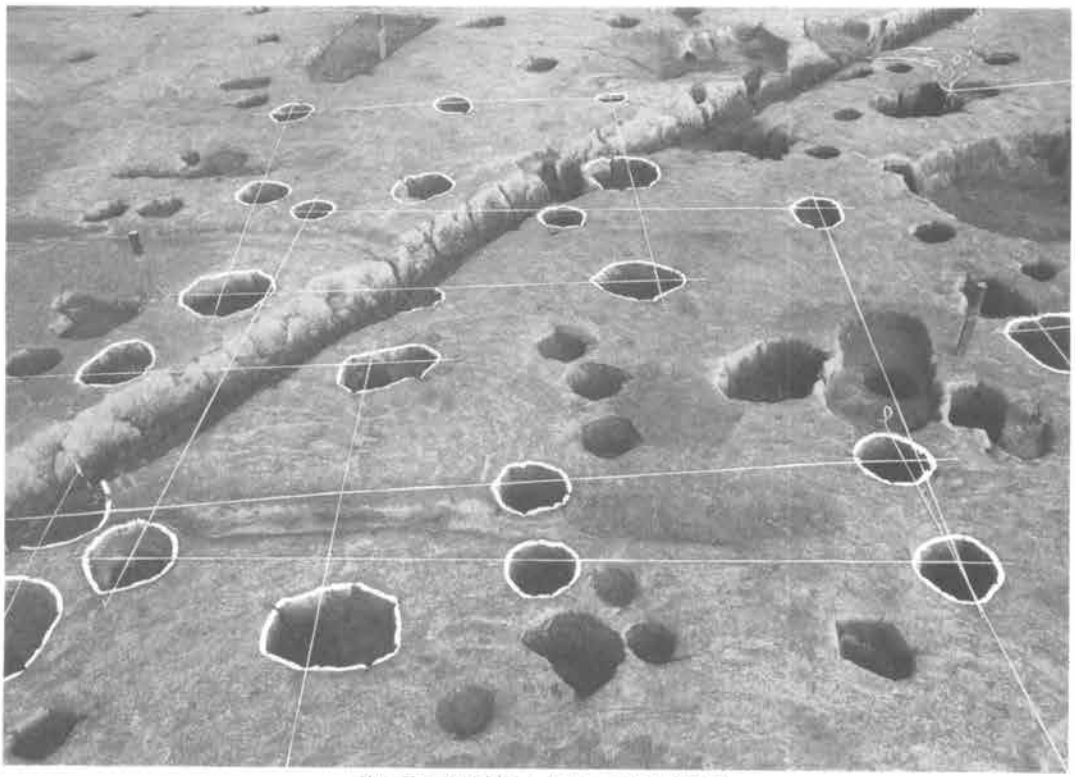
第10号建物跡



第11号建物跡



第12号建物跡

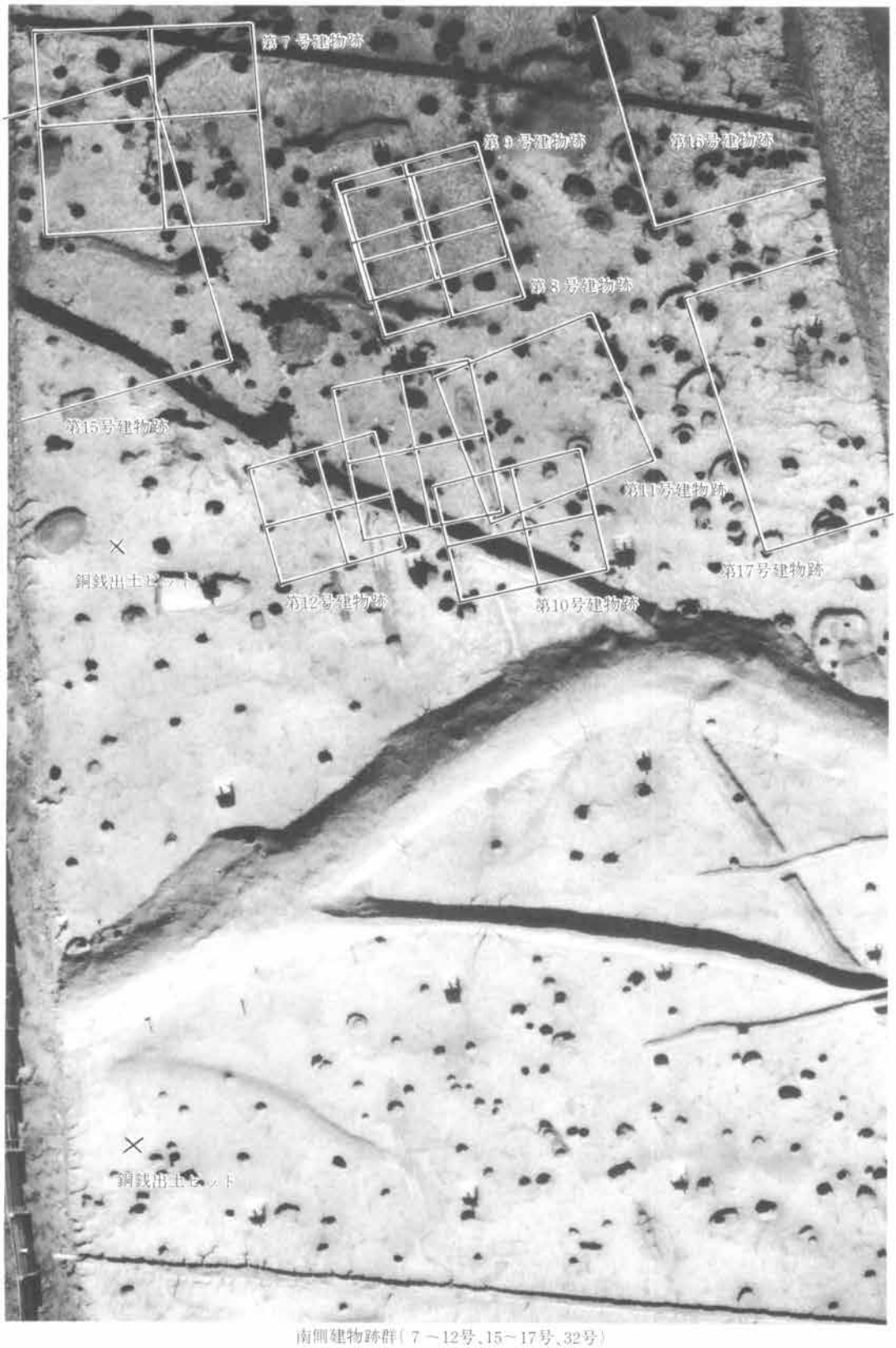


第12号建物跡(奥)と第32号建物跡(手前)

第14号建物跡

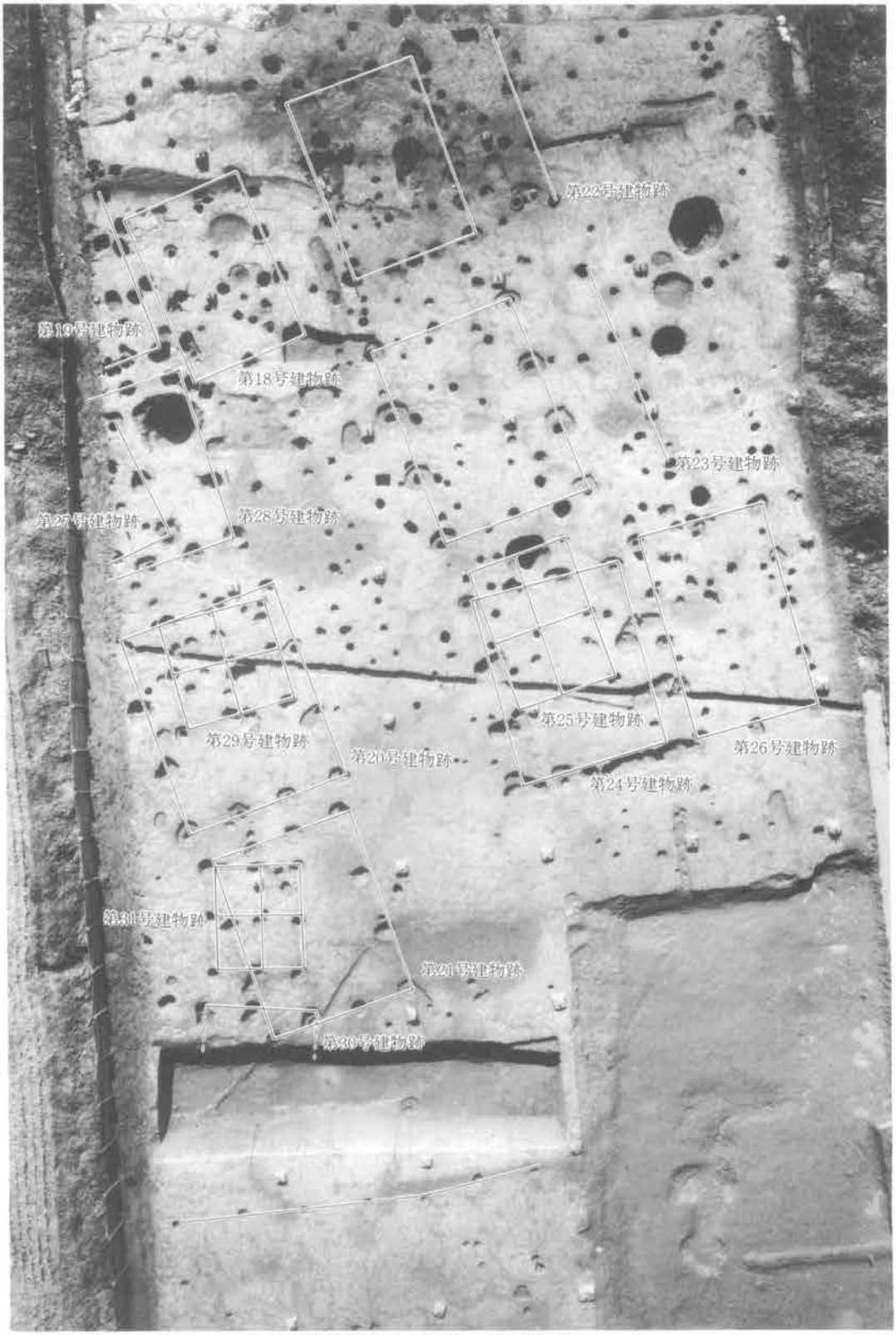
第16号建物跡

第17号建物跡



南側建物跡群（7～12号、15～17号、32号）

図版11

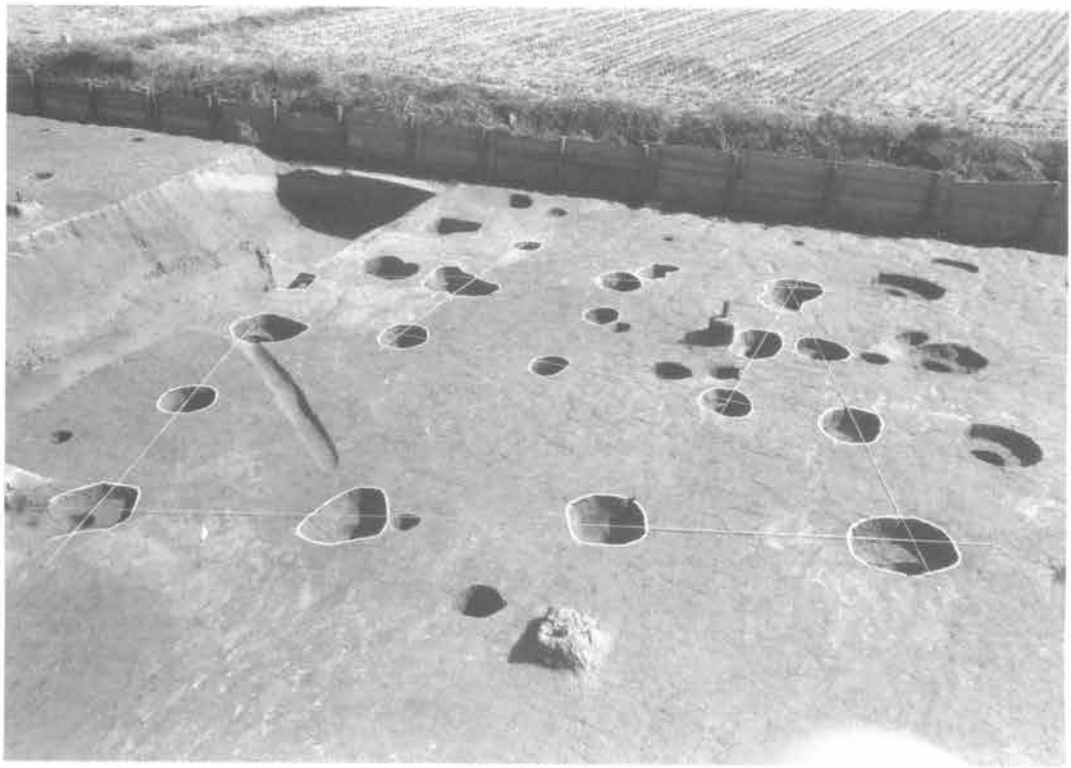


北側建物跡群（第19号～30号建物跡）

第18号建物跡

第19号建物跡

第20号建物跡



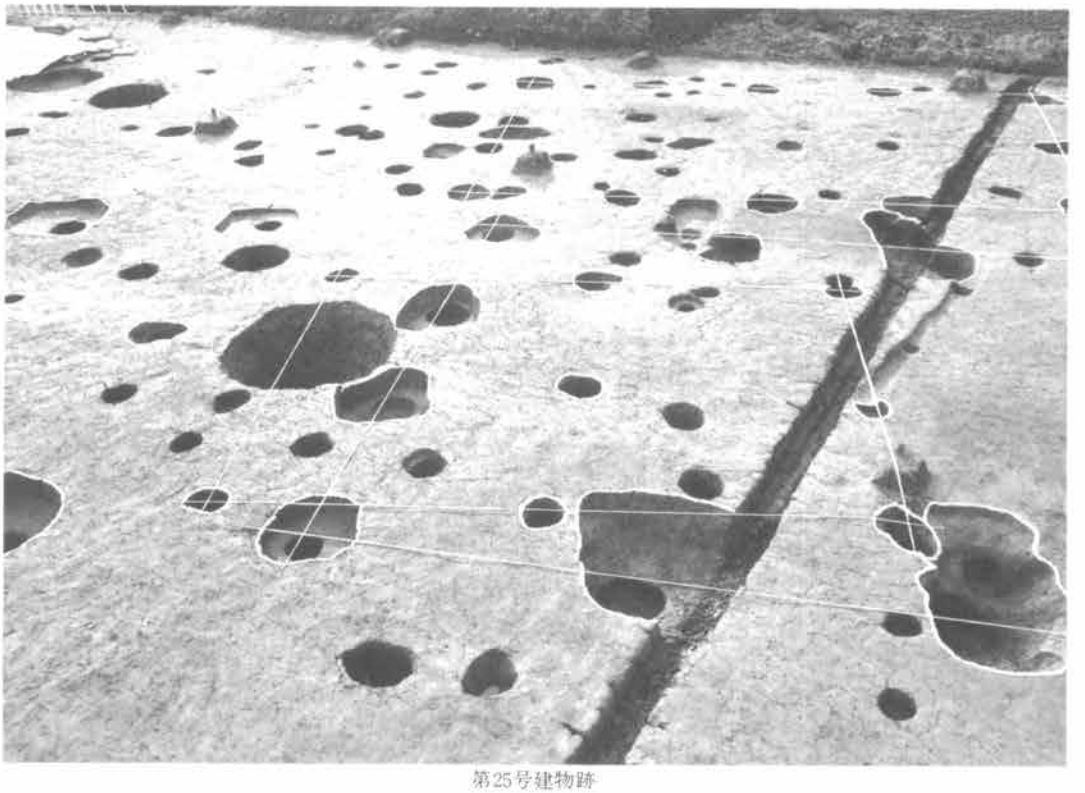
第21号建物跡

第22～24号建物跡

第22号建物跡

第23号建物跡

第24号建物跡

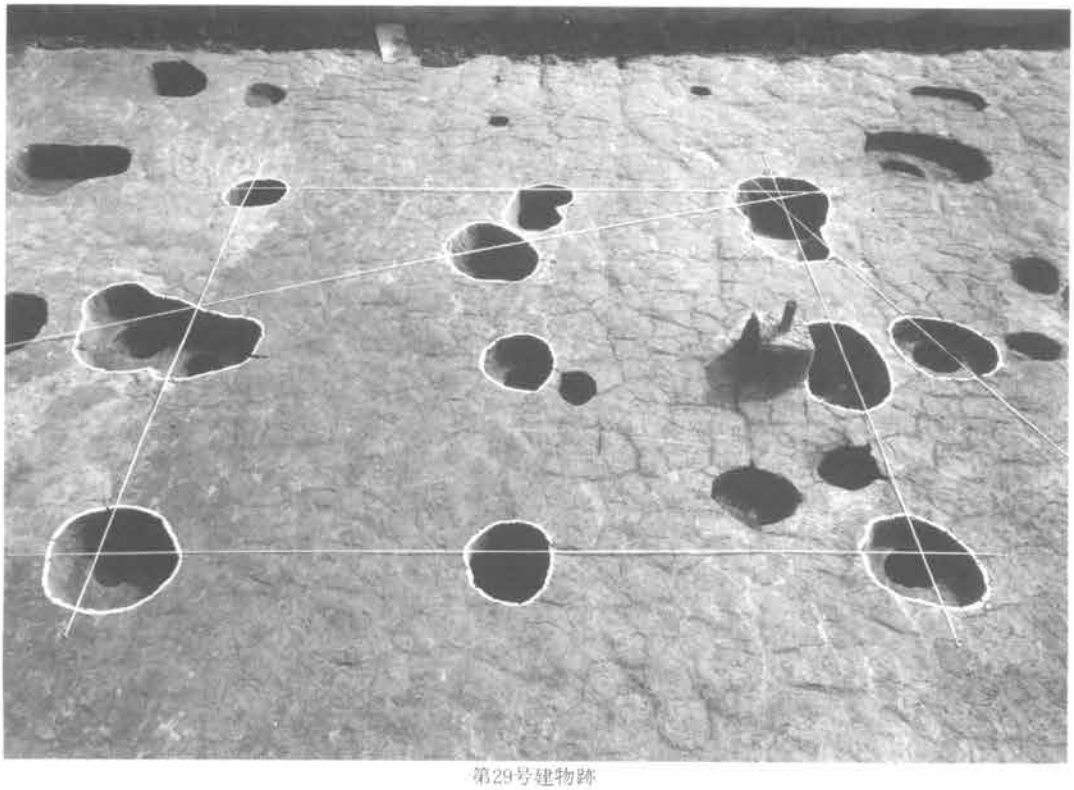


第25号建物跡

第26号建物跡

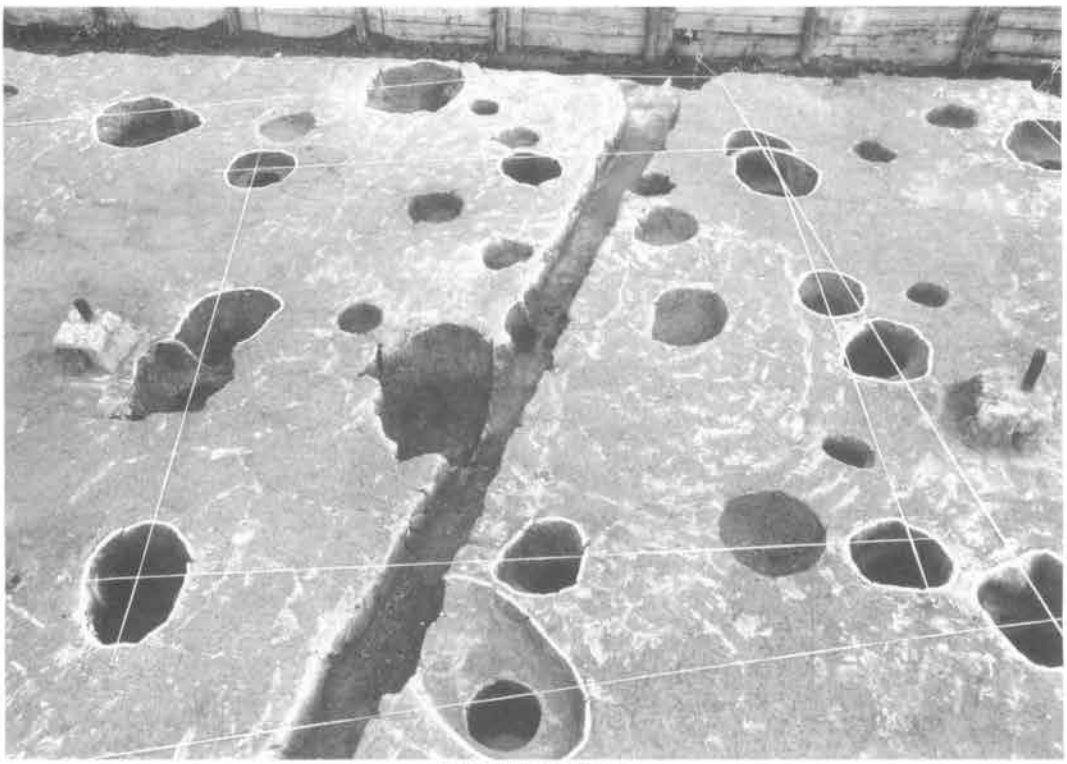
第27号建物跡(後方)

第28号建物跡

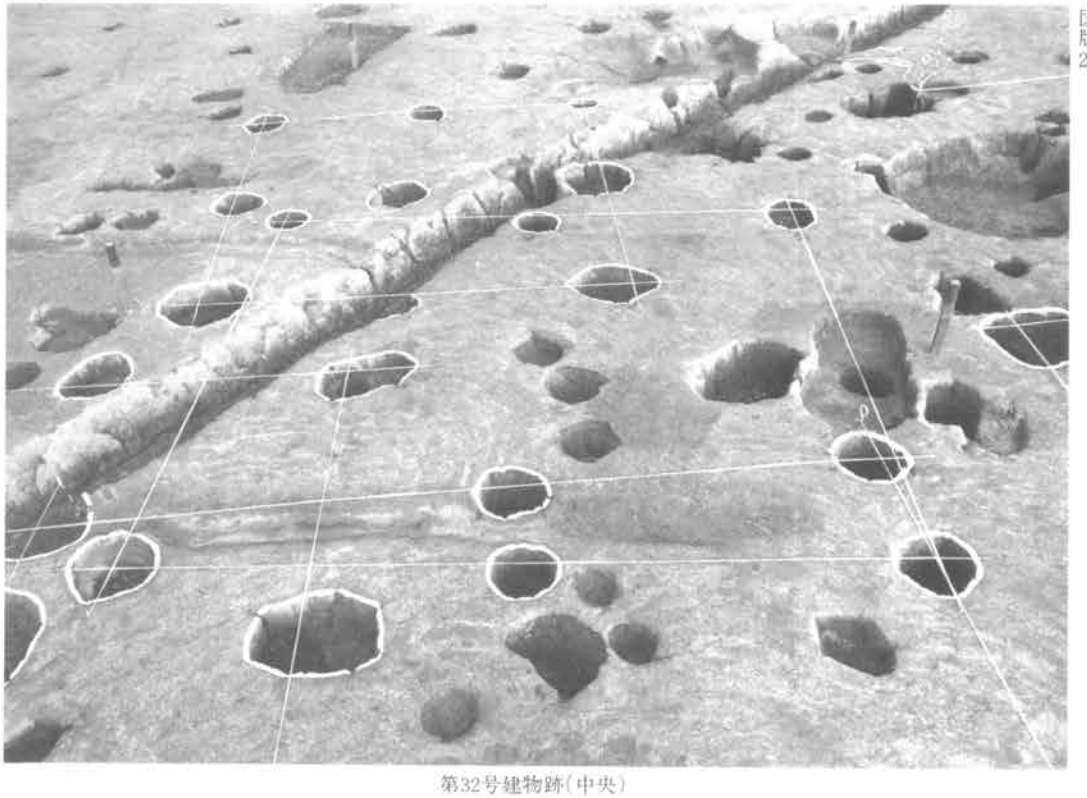


第29号建物跡

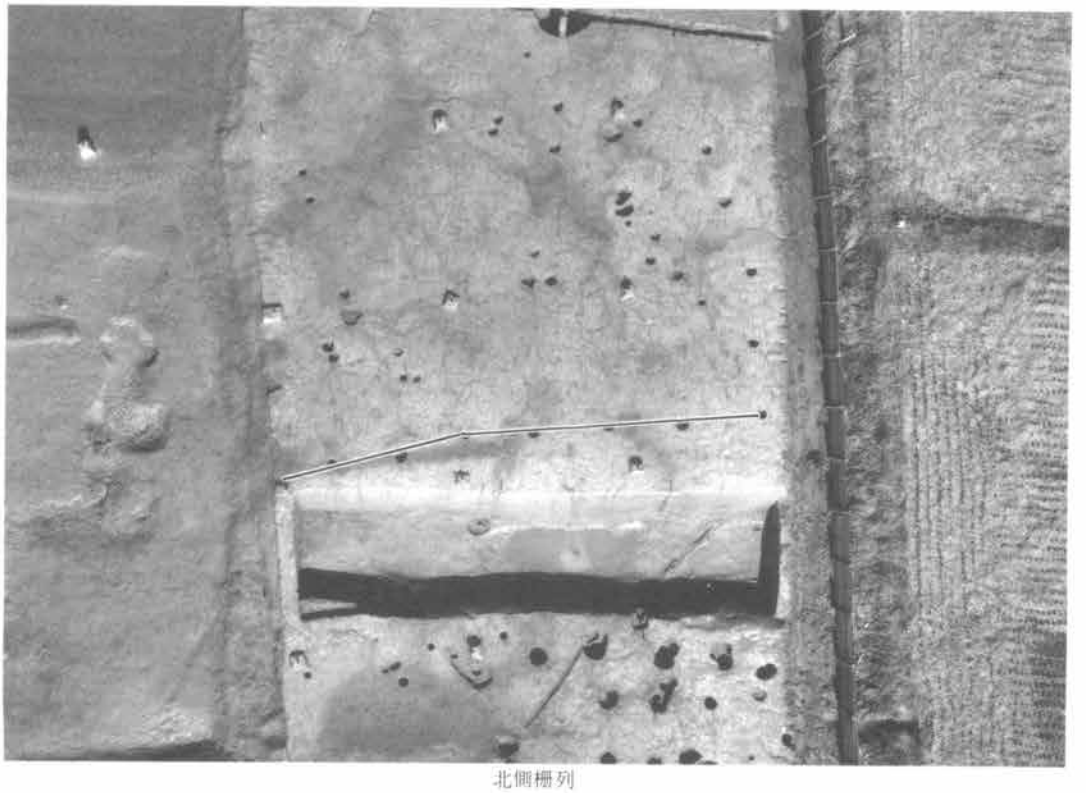
第21号建物跡



第31号建物跡(中央)



第32号建物跡(中央)

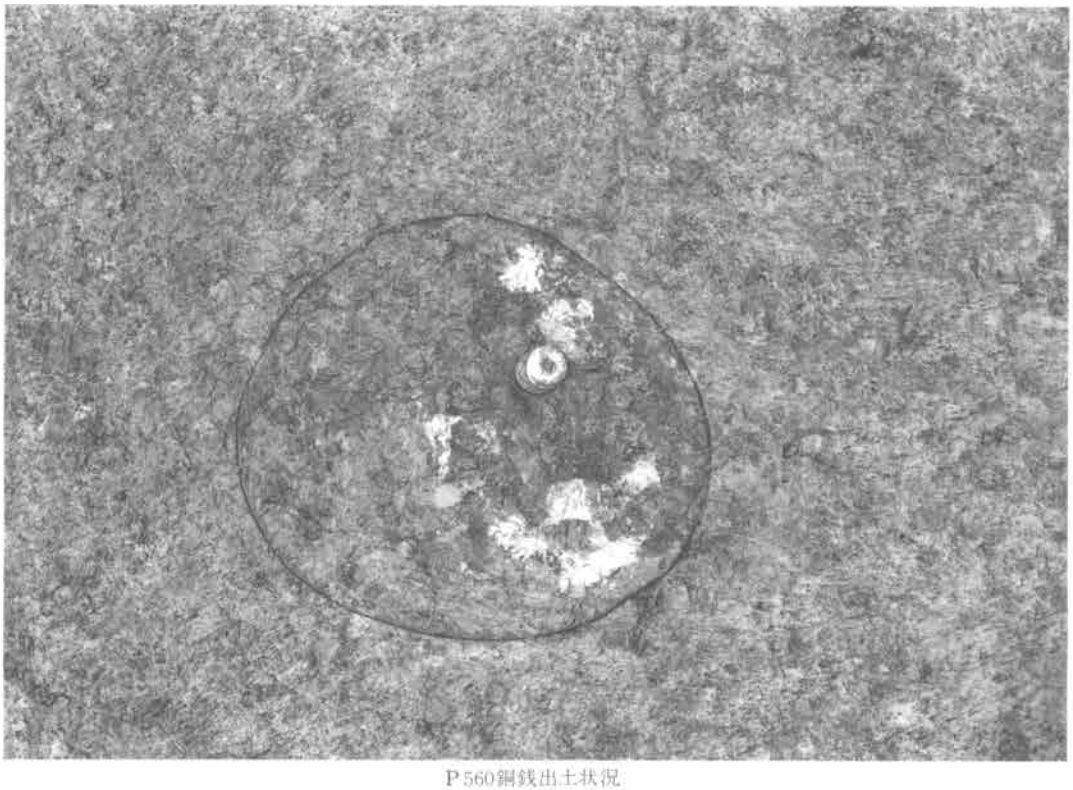


北側柵列

第12号建物跡柱穴(P430)土器出土状況

第12号建物跡柱穴(P431)土器出土状況

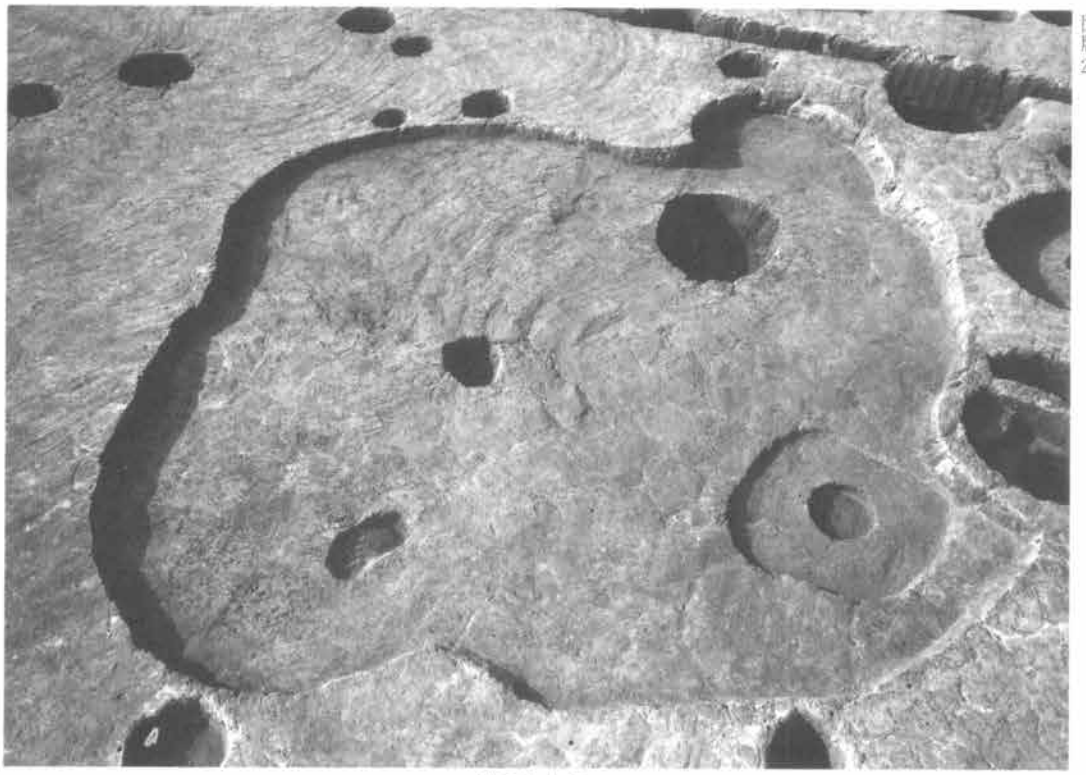
第22号建物跡内銅銭出土状況



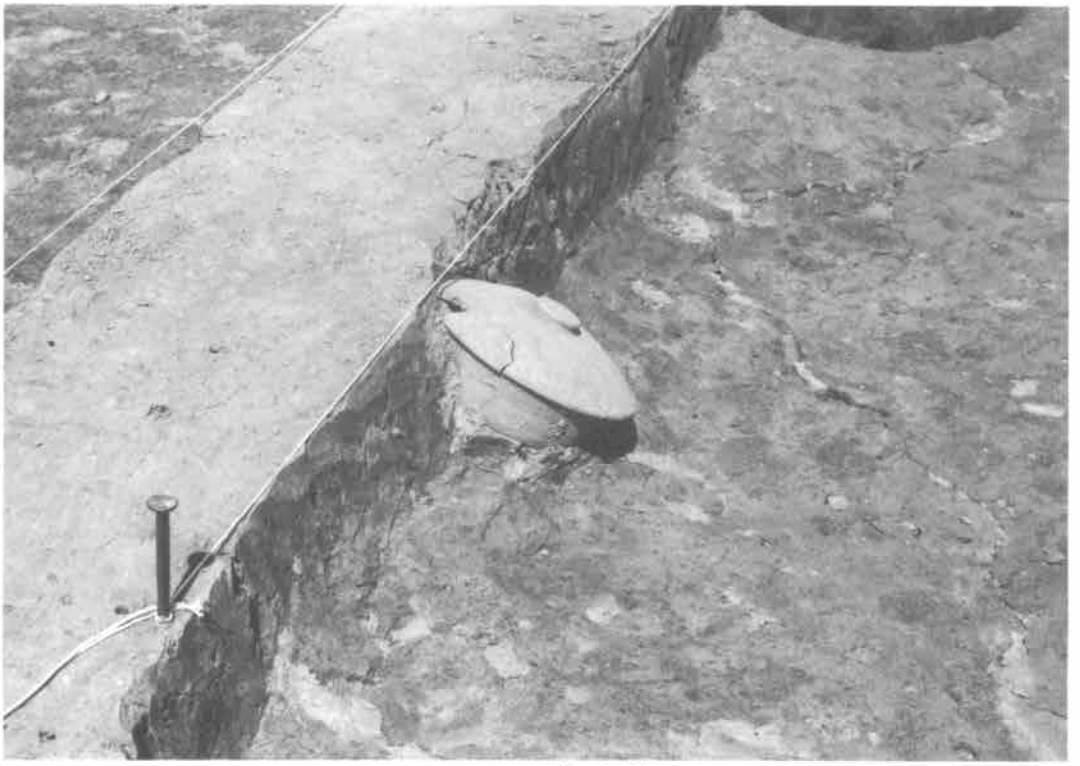
P560銅銭出土状況

第1号土坑

第1号土坑　土師質土器出土状況



第5号土坑

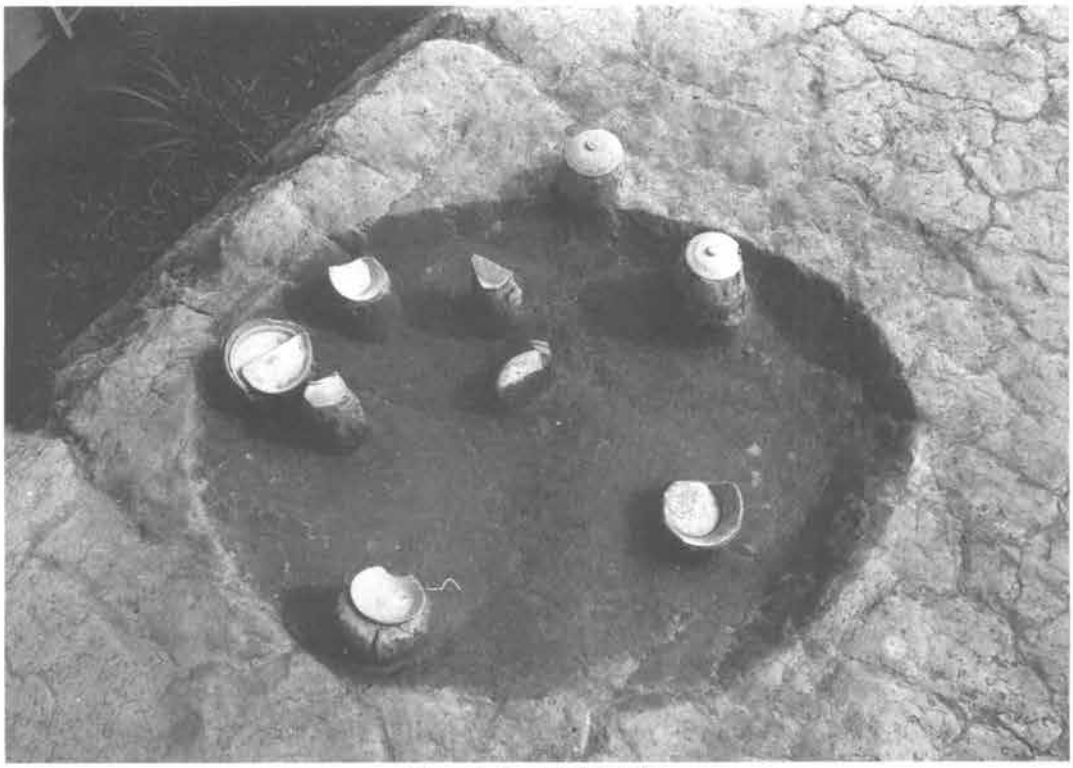


第5号土坑　土器出土状況

第11号土坑

第11号土坑　土器出土状況

第12号土坑　検出状況



第12号土坑　土器出土状況

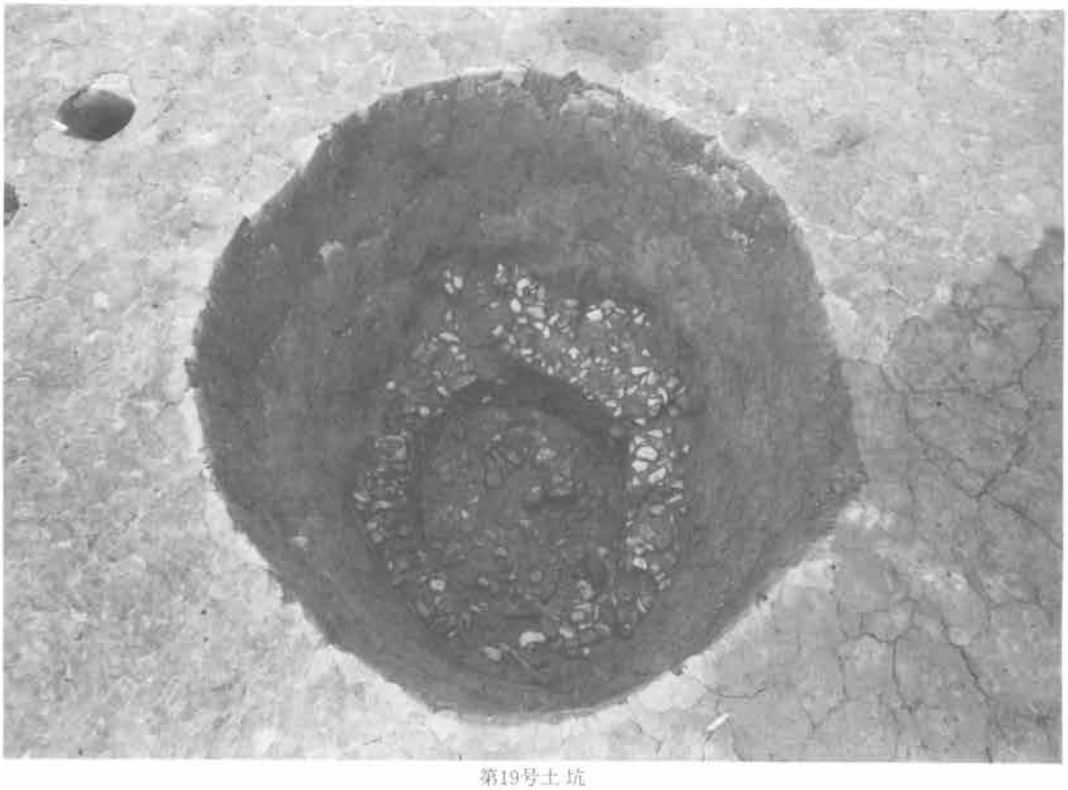
第13号土坑

第17号土坑

第18号土坑

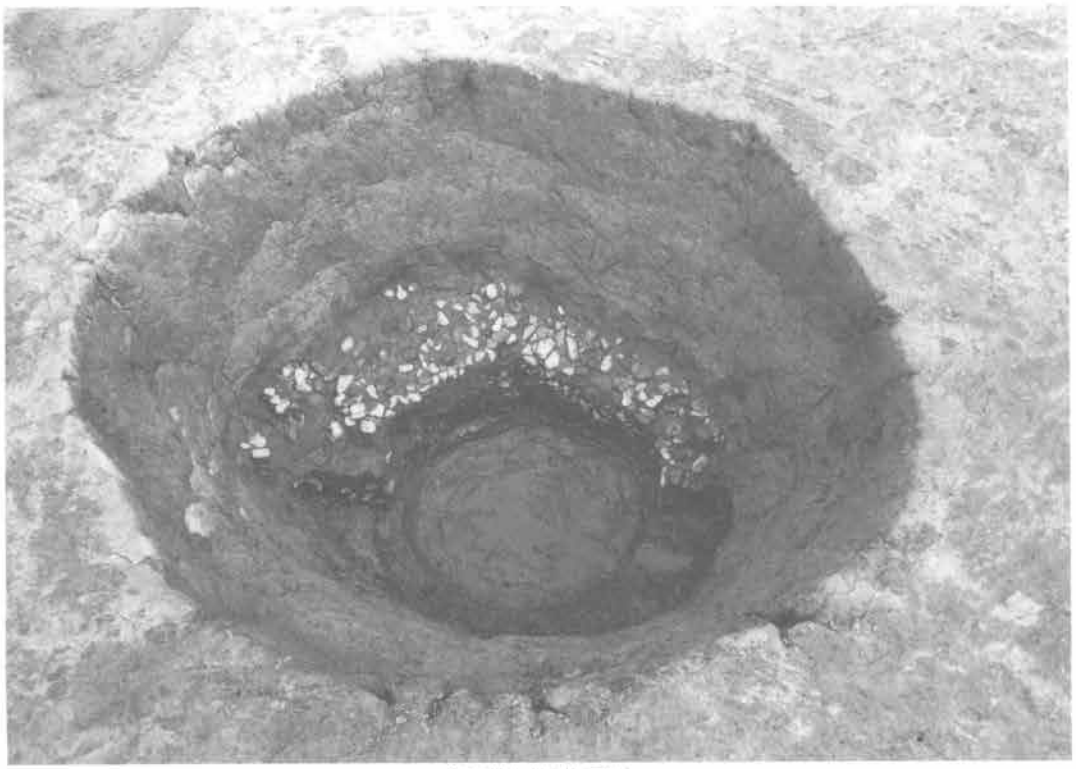
第18号土坑　集石状況

第19号土坑　土器出土状況

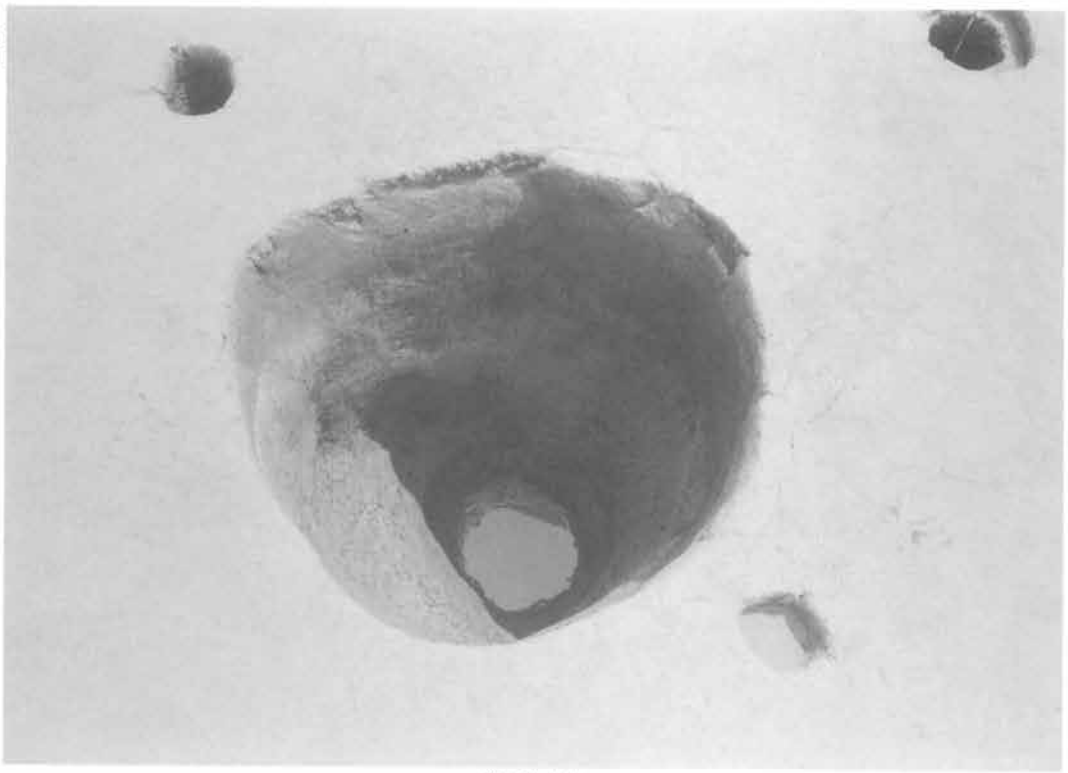


第19号土坑

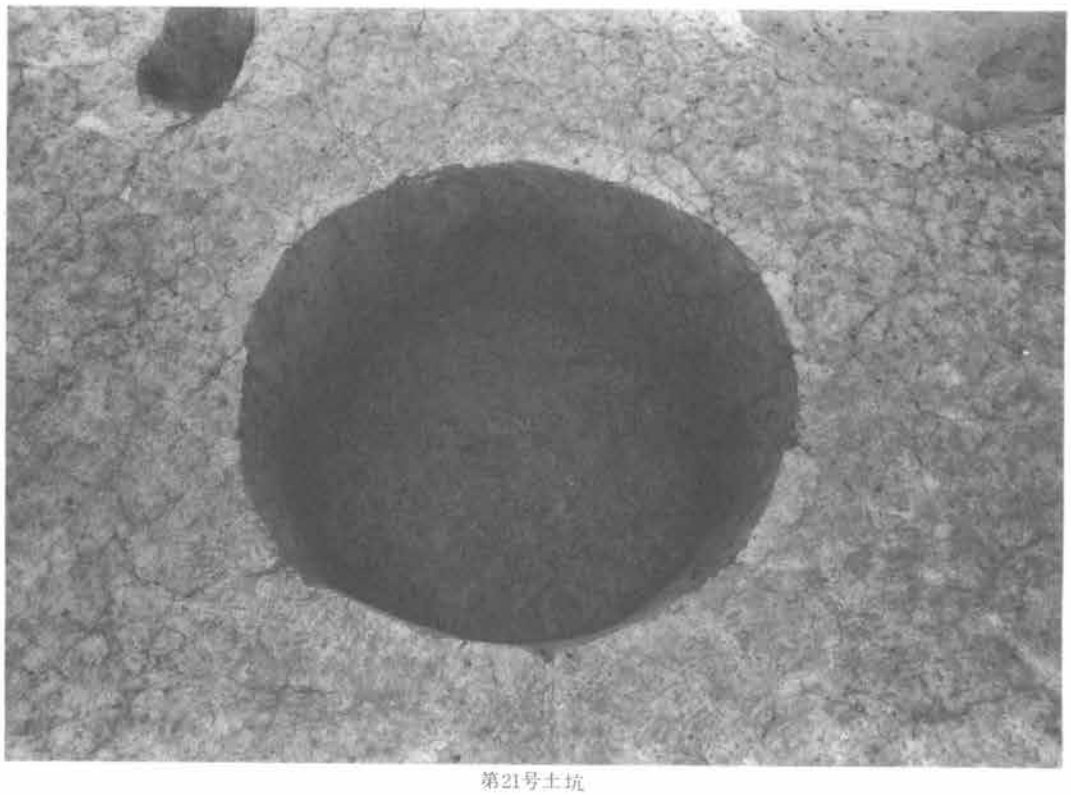
第19号土坑（井戸跡）細部



第19号土坑（井戸跡）



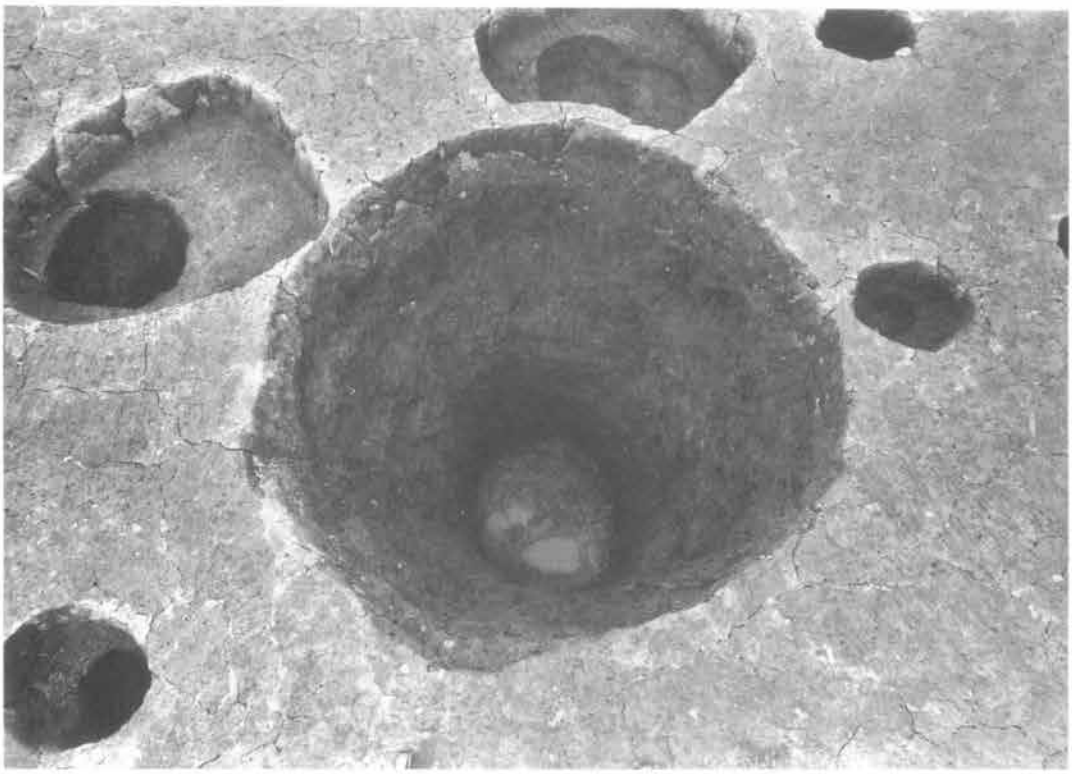
第20号土坑



第21号土坑

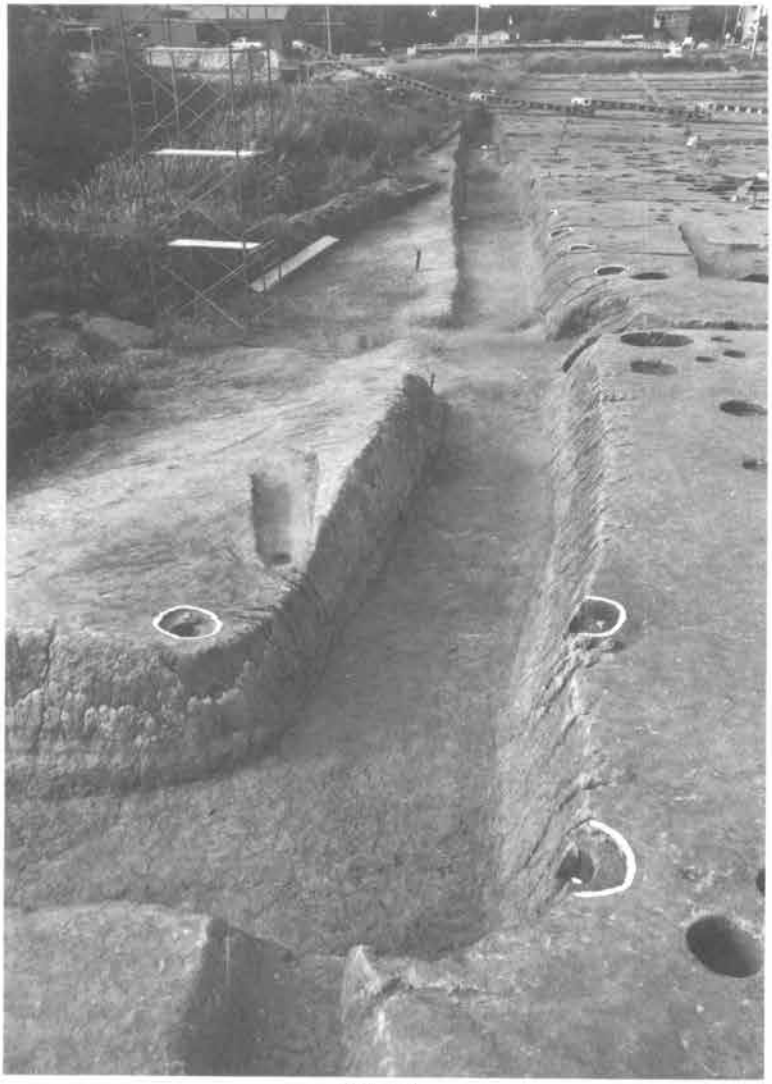
第22号土坑

第26号土坑

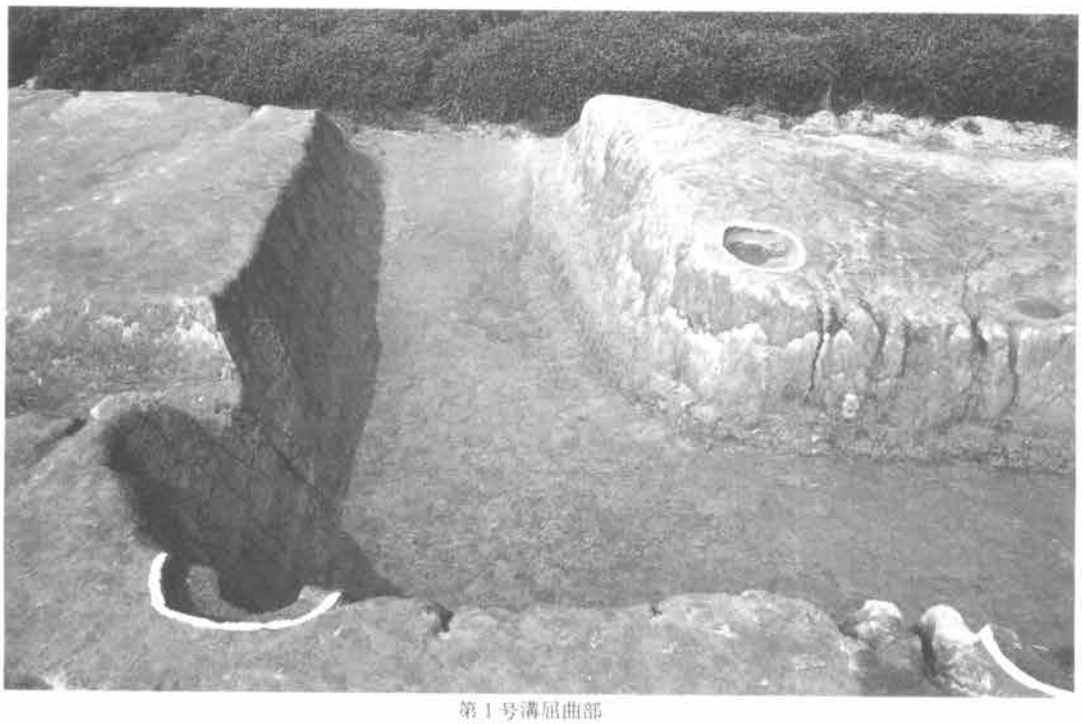


第27号土坑

第34号土坑



第1号溝



第1号溝屈曲部

第１号溝土層断面

第12号溝土層断面

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

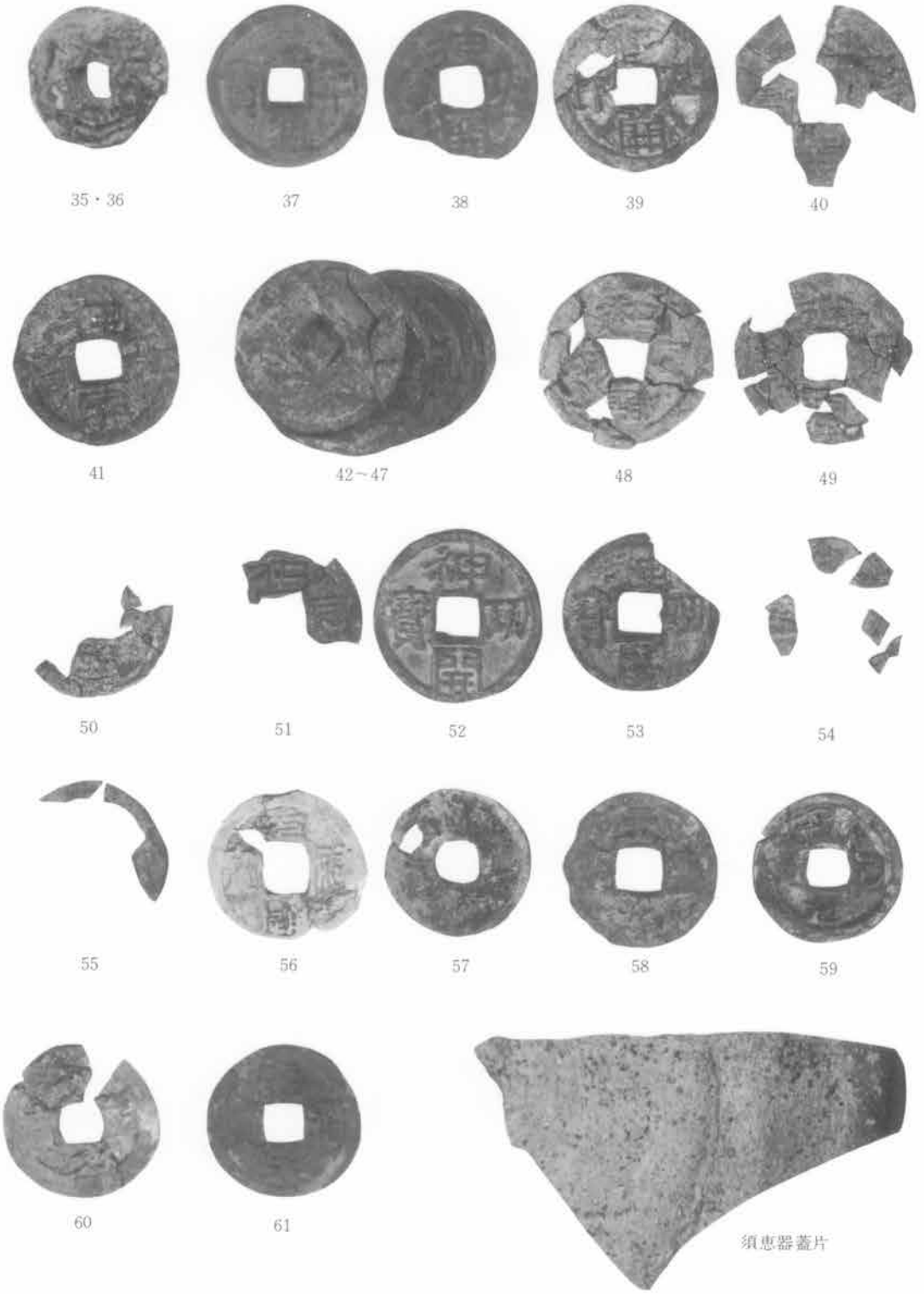
22～25

26～28

29～31

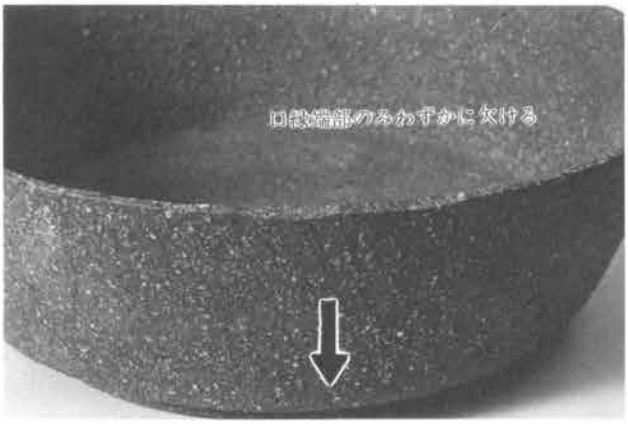
32～34

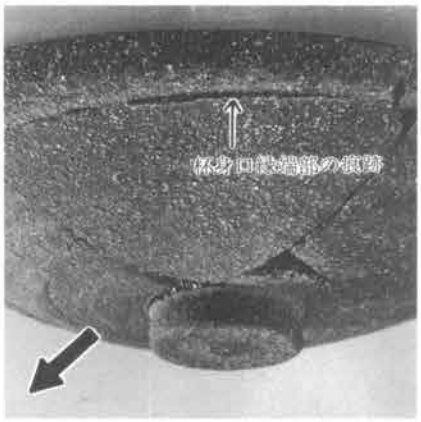
銭貨(原寸)



銭貨・共伴遺物(須恵器)(原寸)

蓋杯重ね焼きの復原

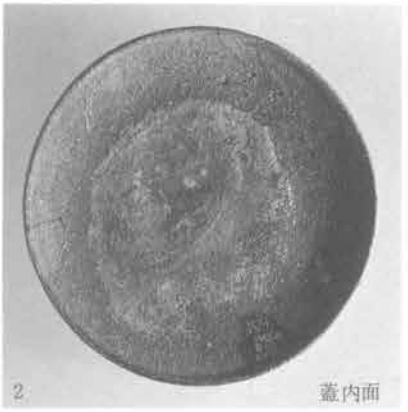




蓋内面

5号土坑出土須恵器

図版39



1・2：5号土坑　　5：包含層
3：1号溝出土カマド　6：19号土坑
4：19号土坑

敷地鉄橋遺跡

昭和62年3月20日　印刷
昭和62年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43—7692番(代)

印　　刷　北国書籍印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター　1987

敷地鉄橋遺跡平面図

第28号溝
第30号建物
第31号建物
第29号建物
第27号建物
第26号土坑
第21号建物
第24号建物
第25号建物
第25号土坑
第23号建物
第26号建物
第20号土坑
第21号土坑
第19号建物
第24号溝
第18号建物
第18号土坑
第22号建物
第19号土坑
第10号溝
第12号土坑
第15号建物
第14号建物跡
第13号建物跡
第11号土坑
第22号建物
第10号建物
第9号建物
第11号建物
第17号建物
第16号建物
第14号建物
第7号建物
第5号建物
第6号建物
第8号建物
第3号土坑
第2号建物跡
第5号建物跡
第4号建物跡
第3号建物
第1号建物
第1号溝
第3号溝
第4号溝
A
B
DL+000
DL+000
1:200